

---

# 彼女には牙がある。～汝は人狼なりや？～

森矢 又文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女には牙がある。〜汝は人狼なりや？〜

### 【Nコード】

N9142T

### 【作者名】

森矢 叉文

### 【あらすじ】

気弱げな笑みの少年と、無表情な美少女と、怒りっぱい巨乳少女が織り成す、苦痛と流血の不器用系中二病マルチトリアングル・ラブストーリー。

## 逆咲青の結末（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。



に。

人狼はくるくる喉を鳴らし、尻尾を引きずりながらあとを追う。狩りの時間を長引かせるように。獲物の抵抗を楽しむように。ごちそうを前にして、滝のように涎をこぼしながら。

「GO:OOOAAAAA!」

人狼が叫ぶ。青が倒れ込む。そのたびに立木が倒れて、音の檻を作り出す。繰り返し繰り返し、青の心がはぎ取られ、青の身代わりが消えてゆく。

陽が完全に落ちて、張り出した闇が足下を覆い隠した。

だから、兎捕りの罾のように突き出た木の根に、気付かなかった。

「あつ……!」

青が倒れる。立ち上がるうとしてまた転ぶ。足を捻っていた。痛みを堪え、片足だけで立とうとして、耳元で吹き荒れた叫声に、みたび足下を失った。

(どうして?)

致命の隙。

人狼がついに青を捕らえた。下半身にのしかかる重みに、身を起こすこともできなくなる。

呆然と荒い息を吐く少女の顔に、ぼたぼたと涎が落ちる。夜空を背に視界を占める、欲情に歪んだ獣の相貌。

粘液の川が青の頬に落ち、あごを伝って首筋を流れ、細い首を飾る漆黒のチョーカーをべたべたと濡らした。

刃物めいた爪がシルクの生地にかかり、青は、ヒュツと息を飲む。それは、青の儚い誇りで、ずっと守ってきた秘密で、信頼の証だった。

そうなるはずだった。

顔を背けた瞬間、風を巻いて爪が疾り、チョーカーとブレザーを布切れに変えた。白い下着と、細い首筋が露わになる。

「……………っ!」

首筋を隠そうとする青の両腕が、人狼の右前肢にまとめて抑えつ



## 逆咲青の結末（後書き）

GA文庫の規定では、Web公開中の作品も投稿可能なようです  
で、そこに甘えてWeb公開を開始します。作者の想定では、秋頃  
に削除要請がかかるはずですので、冷暗所にてお早めにお召し上  
がりください。

## プレゼンテーション(前書き)

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。



## プレゼンテーション

例えば、通い慣れた道を歩いているとき、ふと、路傍に咲いた花に気付く。

例えば、普段見上げない夜空に、知らない星座の輝きを見付ける。視界に入っただけでも、意識することのない存在に、不意に目を奪われる瞬間がある。

例えば 隣のクラスの地味な女子が、急に魅力的に見えてしまう、とか。

東堂示あきひこにとっての非日常のはじまりは、そんな些細な、ごく日常的なできごとだった。

(手がきれいだ)

東堂示が、彼女 逆咲青に抱いた最初の印象が、それだった。

目立たない少女だった。少なくとも、『彼女にしたい女子ランキング』とか『パンツ見せてほしい女子番付』とか『メイド服が似合いそうな女子コレクション』とか、そういった話題のネタになるようなタイプではない。もともと、示自身、そうした話題に混ざることとはあまりないので、実際のところはわからないのだが。

示の回想するところ、最初に彼女の存在を意識したのは、ほんとうになんてことのない、廊下ですれ違っただけときだった。

影のように気配が薄く、ただ一人を除いては誰にも意識されていない青の存在を、示もまた、それまでほとんど気に留めていなかった。というか、顔と名前が一致していなかった。示が彼女の名前を知ったのは、それから三日後のことだ。

見付けてしまえば、目が離せなくなった。

気付けばいつも彼女を探していた。朝、隣の教室を覗き込んで、四列目の四番目の席に、いつも通り座っているのを見るとほっとした。ほっとしたあと、爆発する動悸に苛まれるのが毎日のことになっていた。

青が立つても、座つても歩いてても、なにもしなくてもドキドキした。嬉しいのかも悲しいのかも、彼女が可愛いのかも怖いのかも、全くなにもわからなかった。

夜眠つても忘れられず、朝起きても夢に見た。一日中、青が頭から離れなかった。

思い詰めたあまり、一歳下の妹に悩みを打ち明けた。がさつで大雑把で皿洗いの一つもしない妹は、こう答えた。

「そりゃ兄ちゃん、恋だろ」

それでもわからなかった。自分の知っている恋とは別物であるような気がした。解釈も制御も全く不可能で、そのままでしたらたぶん死ぬような気がした。

だから、青の下駄箱に手紙を入れたのは、本当に縊るような気持ちだったのだ。

示は、彼女のメールアドレスも知らなかった。

成算も、勝算も、捕らぬ狸の皮算用すらもなかった。

それでも、放課後の屋上に、青は来たのだ。

麻倉紫乃あしほむらは、廊下を走っていた。

細いリボンでくくった長髪をなびかせ、猛然と階段を駆け上がる。一瞬の油断だった。

人間どもが浮かれる春は無事過ぎた。人の雄どもが沸く夏はまだ先だった。五月半ば。オトコなる害獣から青を守る役目を自任する紫乃としては、いくらか気を抜ける時期だった。

幼い頃から相も変わらず、青には浮いた様子も噂の一つもなかったから、紫乃はいつの間にか安心していて、大事な青に悪い虫がつくとは想像もしていなかった。

机の上に残された、いわゆるラブレターを発見する、そのときまでは。

「なんでよおおおおおおおおお」

青に目を付ける男など、クラスにも、学校にも、この世のどこにもいないはずだったのだ。まさしく青天の霹靂。

「青　　ッ！　早まつちゃダメよ　　ッ！！」

盛大に周囲の注目を集めながら、紫乃は走る。

「私の青をポツと出の男に渡してたまるもんかあああああ！」

ドアノブが回った瞬間、示の鼓動は十六ビートから三十二ビートにリズムを変えた。

金くさい音を立てて、焦れったく扉が開き、少女の小柄な姿が、そこから覗く。

現れた青の視線は俯けられている。待ち受ける少年に目を向けず、屋上に一歩進み出ると、振り返って扉を閉めた。

ごっこん、と退路が断たれる音に、示は唾を飲もうとして失敗した。のどが乾ききっていた。

青が振り向く。彼女はまっすぐに歩き始めた。微風に揺れる制服が、細い体のラインをほのかに浮かび上がらせ、静かな歩調に髪が踊った。二十歩の間、示はその往復に見とれた。

ぎりぎり、互いの手が届かない距離で立ち止まる。

初めて、なにも誰も挟まず、示の目の前に青がいた。

恐ろしく素直に垂れた黒髪が、墨のヴェールとなってその顔を薄く覆っている。貴人の姿を隠す御簾を連想させた。

それがはらはらと揺れるたび、極細の面相筆を百年かけて一筆引いたような、神秘的な生え方をした眉が、幻めいて見えては退く。覗いている片目も、長いまつげの中に伏せられている。しかし、呼吸器というより美術品にしか見えない鼻梁や、食べものと飾りものと生きものの魅力を盛り込んで混ぜ合わせて絶妙に切り計った唇をはっきり目にするだけで、示には刺激的すぎた。

上履きに包まれた足は心配になるほど小さく、そこから伸びる脚は口に含んだら溶けそうなほどに淡く白く、筋力というものを一切感じさせなかった。日頃俗世の汚れにさらされていないその上に至

つては、もはや外気に触れただけで崩壊しそうで恐ろしい。あんなに甘く脆そうな両腕がむき出しになってるのは、やはりなにかの間違いとしか思えない。自分がその手を見て青を見つけてしまったことはどう考えてもおかしくて、異常で、これほどきれいなものは存在しないことになっていないといけないのではないだろうかと思はる。

例えば、今やわらかく流れているだけの風が急に牙を剥いて、青の頬やひたいやあごを覆っている髪の毛を跳ね上げてしまったら、きっと自分は失神するだろうし。

そう、例えば、艶めかしすぎて甘露と毒の濃厚ハイブリッドになっている鎖骨をまとって、感動的なほど毅然と立っているあの首筋を、ぎりぎり全部は見せないように覆っているあの漆黒のチョーカ―が、万が一、運命の手ひどいミスによって剥がれてしまうようなことがあつたら。

そのときが、自分の人生の終わりになるのだろうか。というようなことを、十鼓動に一回くらいずつ考えていた示は、あまりに無防備で、ふと青が目を見開いて視線を合わせた瞬間、澄んだ黒耀石の瞳に射られて一回死んだ。

ような気がしたが、人生は絶好調に続行中であり、最高潮に均衡中であり、つまり青はとつと用件を切り出しやがれと一瞥で訴えたのだった。

失命できなかつたので、示は失神した。  
「ぼくに、なにか用？」

失神したままもう一回失神したら現実が待っていた。もしくはフアンタジーが待っていた。つまり、示は青の声を初めて聞いたのであり、それは彼が事前に想像していたあらゆる響きを絶しており、陶酔する間もなく、耳から打ちのめされた。

付け加えるなら、示は青の一人称が『ぼく』であることも初めて知ったのだが、実は青が男だったというような展開は用意されていないし、されていたとしてもたぶん示にはあんまり関係なかった。

もつと大きな問題を抱えていたからだ。

これから、あなたのこれこれこういうところが素敵だと思います、  
というようなことをプレゼンしないといけないのだった。

それがわからんから困っているというのに。

「ひいい……」

悲鳴が漏れた。

青を見た。ドキドキした。しすぎて頭まで痛かった。

助けてほしかった。

「あ、あなたを」

言葉が目の前の女神に縋った。

「見ていると、おれは正気で、なくなります」

青は、まばたきだけをした。

「と、いうか、見ていなくても、ずっと、あなたのことを思い出して  
いて、つまり、ずっとおかしいんです」

青を見ながら気持ちを言葉にしていると、もつと取り返しが付かない  
ほどおかしくなりそうなので、示は地面を見ることにした。

「ずっと、ドキドキしてるし、心臓の病気かと、思った。で、でも、  
あなたを見ると、いっそうひどくなる、ようです。ひどく、つらい」

結果的に青の表情が見えないので、助かったと示は思った。どん  
な表情をされたとしても、ただでは済まないだろうから。

「痛いんです。怖く、て、でも、気、になるんです。やめよう、  
と、思っても、探す、のを、やめられない」

汗がぼたぼたコンクリートに落ちるのを視界に留めて、ごうごう  
耳鳴りがうるさいと思う。

「見る、たびに、苦しく、なる。もつ、と、見てしまう。もう、ダ  
メ、なんで、す。耐え、られな、くて、あなたに、受け入れ、て、  
もらえ、ないとおれは、ダメなん、です」

わけもなく悔しくて涙がにじんだ。

「おれを、受け入れて、ください。許して、ください。救って、く  
ださい。お願いです」

示は顔を上げた。青が見ていた。逃げ出さないために持ち合わせの勇気を投げ散らかして叩き売った。

乱暴に扉が開き、全身から湯気を噴いた紫乃が駆け込んできても、示はもう止まれなかった。

「おれの恋人になつてください……！」

示が直角に腰を折った瞬間、紫乃は腰から崩れ落ちた。

示は、冷や汗をたらたら流しながら地面を見ている。

青は、無表情を風にそよがせながら示を見ている。

紫乃は、顔を絶望に打ち崩しながらあらぬところを見ている。

三人が三人とも動かず、あるいは動けないまま、野球部の外野ノックが二十球ほど繰り返されたあと。

青が、示のつむじから目を切った。

きびすを返す。

来るときと全く変わらぬ歩調で、雲の上を滑りでもするように、するする、ふわふわと、二十歩、二人の緊張を糸のように引き連れて、ドアまでの距離を歩いた。

青の影を追いかけて、示の顔が持ち上げられる。

立ち止まった青に、二人の視線が吸い寄せられた。

青は、ぼかん、と見上げる紫乃に、真っ黒に澄み切った目を向ける。

「ぼく、帰るけど」

かすかな、しかしその場の全員に届く声。

答えを待つことなく、青はゆっくりと、残り香のように足音を残して、歩き去った。

つまりそれが、彼女の答えだった。

「……………あは？」

紫乃の口元が勝ち誇る。

立ち上がり、きつちり校則通りのスカートに付いた埃を払うと、それ以上その場には興味を示さず、紫乃は駆け去った。

あとには、打ちひしがれた彫像だけが残された。

翌日。

紫乃はいつも通り青を連れて登校した。いつも通りでないのは紫乃の機嫌で、ちよつと危うげなほど急角度に釣り上がっていた。人生最大の危機を乗り切ったあととなれば無理もない。歌なんか歌っちゃったりして。

「クライシスイズゴーン　ラブイズフォーエバ〜」  
「なのだった。」

一方の青は、全くもって、完璧に、一分の隙もなく、人形のごとき無表情で、影のように紫乃の隣を歩いていた。話題を振ることもなかった。

「あーっ！　そうよ青、土曜日にとっか遊びに行きましようよ！　久しぶりでしょ？　どこでもいいわよ？　海でも！　山でも！　砂漠でも！」

青は、一瞬だけ、考える素振りを見せた。

彼女の迷いはすぐ、秀麗な面おもてに沈没する。

「ぼく、予定あるから」

「やーん、残念」

紫乃はビュンビュン鞆を振り回す。本気で残念なのだが、全くそうは見えない浮かれようだった。

「たぶんね」

なので、青の言葉にある含みに、紫乃は気付かない。

示は、いつも通り、友人の志沢鷹仁しざわたかひとに連れられて登校したが、いつも通りなのはそこだけだった。

前日も、心配した鷹仁が様子見に来るまで、ずっと屋上で彫像と化していたのだ。鷹仁に家まで引きずられ、今朝には例の妹が、叩き起こして大雑把に身繕いし、家から蹴り出してようやく登校して

きている。ちなみに、妹も同じ学校だが、諸事情あって別に登校している。

つまり、お通夜ムードだった。

鷹仁が、渋みと野生味をブレンドし、経験で研ぎ澄ましたような顔に、同情をにじませる。

「よう……まあ、なんだ。あんまり落ち込むんじゃねえよ。この世の終わりってわけでもねえんだ……」

この世の終わりを見たとしか思えない表情を見て、鷹仁は口ごもった。

長い付き合いでもないが、浅い付き合いでもない鷹仁をしても、手の施しようがない。

これは、気休めでもなんでも言っておいたほうがよかるうか、と思う。

「……ほれ、アレだ、女はアレ一人ってわけじゃねえからよ……その、一応……な……？」

親友の必死の心遣いに応えたか、ぐぎぎ、と横向いた示の口から地獄の亡者めいた声音が漏れる。

「……姿子<sup>しほこ</sup>さん以外の、女の子……」  
「うぐ……」

“姿子さん”は、二人の一年先輩であり（鷹仁とは同い歳であり）、気っ風のいい姉御肌の女性であり、鷹仁のアレだった。

この男、彼女持ちなのだった。

おしどり夫婦なのだった。

ラブラブなのだった。

今この瞬間の慰め役として、不適當極まりない人材だった。

もちろん、鷹仁としても、“姿子さん”以外の女性に、カケラの興味も持てない現状だ。

説得力のかけらもない。

「……そう、だよなあ……」

鷹仁は深い溜息を吐いた。示は、ドロドロとホラーハウスの効果



音を口からこぼす。

校門が近付いてくる。学校に着けば、例の彼女と顔突き合わせることもあるだろう。

それまでになんとか示の気持ちを立て直してやろうと、涙ぐましく頭を回転させる鷹仁だが、結局、時間が癒してくれんだろう多分という投げやりな結論しか絞り出せなかった。それとて、何年かかるかわかったものではない。

脈のありそうな女子が、一人二人、いないわけではないのだし、新たな恋でも見付けられればいいのだが。

「そっぴいあ示よお、お前元々は」

「それじゃあ青、今日の放課後は」

神の差配か、悪魔の指図か。

誰のたくらみか。

二組の男女は、校門前で見事ばったり出くわした。

あっちゃあー、と鷹仁は頭を抱えた。

鷹仁の反応を見て、紫乃はガリツと記憶を検索し、ようやくゾンの正体に気付いた。「ああっ！」

そして、互いの連れが硬直した、空白の一瞬に、青は示を見据えたまま、するりと一歩を踏み出した。

とっさに伸ばした紫乃の手が、髪をかすめて空を切る。

鷹仁は、ぐっと顔を引き締めると、邪魔にならないよう後退った。朝の喧噪の中に切り取られた静寂を、青が歩む。

示のどろりと濁った視線が持ち上がる。

示の目の前に青が立つ。その目がとてもきれいで、示は夢を見ているのかと思った。

それは、腐った示の脳が、現実に追いつく直前のタイミングだった。

「　　いいよ」

かすかな、しかしその場の全員に届く声。

言い置くと、青は直角にターンして、校内に向かって歩いていく。



## プレゼンテーション(後書き)

事実上、ここまでがプロローグ。

ライトノベル史上、最もキモい告白シーンを目指しました。

ドウ・イット・ユアセルフ(前書き)

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。



それでいらしかった。だらだらと口からお茶がこぼれる。

「なんだい！ 一人で浸ってんじゃないよこの幸せもの！」

バシバシバシバシとお花畑が詰まった頭をしばく姿子。えへへうへへと照れる示。この繰り返しで、全く話が進んでいなかった。彼女と親友の仲睦まじい様子を微笑ましく見守りつつ、鷹仁はほんのりと隣のクラスを思う。

「向こうはどうなってやがるやらなあ……」

「やめなさい」

目の前に仁王立ちする紫乃を、青は完全に無視していた。

教室の喧噪が静まり、注目が集まる。

ぎろり、と紫乃が周囲を見回した。クラスメイトはそそくさと視線を逸らし、談笑やゲームや予習に戻った。耳だけを残しつつ。

紫乃が肩を怒らせて青を睨む。何年ぶりかの出来事だった。青は、窓の外に、興味なさげな視線を投げている。

睨み合いともいえないぶつかり合いの末、紫乃が再び口を開いた。

「私は許しません」

「知りもしないくせに」

目を合わせないまま、青がつぶやく。

「青だつてあの男のことなんか知りもしないでしょう！ 軽率にも程があるわ」

「ふうん」

青の視線は、紫乃を素通りして天井を貫き、四階も透かして、屋上に届く。

しばしあり。

「だとして」

青の目がようやく紫乃に留まった。

「なにか、シノに関係ある？」

「心配だから決まつてるでしょッ！」

紫乃の両手が机を叩き、再び注目が集まる。今度は、紫乃に周り

を気にする余裕はなくなっていた。

「ぼくが、男子と付き合つて、デートして、手をつないで、キスして、その先もする。なにか問題ある？」

「大アリよッ！」

このとき、青の瞳孔がすつと細まるのを見たものがいたかどうか。

「なにが？」

「なにが……つて、それは……」

「校則がどうの、年齢がどうの、言わないよね。まさか」

「それは……」

ほかの相手なら言つたかもしれない。

しかし、青に対して、そんな上っ面の理屈は口にできなかった。

嘘も吐けなかった。

真実も口にできなかった。

「それは……」

結局紫乃には、なにも言つことができない。

「そう」

青は、それだけ言うと、窓の外に視線を戻した。それ以上、言うべきことも、聞くべきこともないと言わんばかりだった。

「始めるぞー」

担任の教諭がやってくると、あちこちに寄り集まつてふたりの会話（または喧嘩）に耳を傾けていた生徒たちは散つてゆき、紫乃もまた、強く唇を噛んで、席に戻った。

紫乃の犬歯が、唇を傷付けて、じわりと赤い血を浮かばせた。

それが、一限目のあとの休み時間のことだった。その後も示は、話を聞きたがるクラスメイトに、ぽつぽつと事件のあらましを披露してやりつつ、幸せを噛み締めた。

残された穏やかな時間が、あっさり過ぎ去つたことを示が知るの  
は、昼休みのことだった。





しか使われず、そして美術の授業は午前中にしかない。従って、昼休みには誰も訪れない道理だった。

影法師のように立ち尽くす青の元に、どたばたと示が走り寄ってくる。

「ご、ごめん！ お待たせ……」

「うん」

「う、っ……」

待たされたことを気にしているのか、判断しかねる返答だった。

「い、今、開けるね……」

示がドアを開けると、青は促されるでもなくすりり中に入った。追って部屋に入ると、青はまた、飾りもののように突っ立っている。示が慌てて座布団を並べると、青は今度は置物のようにその上に収まった。

寺院の仏像めいて安置された姿に、示は一瞬見とれる。千年前からそこにいて、千年後までもずっというようだった。時間の流れが微睡んだ。提げた弁当箱が手から落ちかける。

寸前、青がつぶやく。

「座らないの？」

「ひゃひゃい！？ すわ、座ります、はい」

よたよたと座布団に正座して、示はすぐ後悔した。ロケーションに合わせて茶の湯の距離で座布団を並べてしまったが、あまりにも近すぎる。

手を伸ばせば届く距離にある、雪の青白さにごく微量の紅を差した青の顔に、押し退けられる圧力と吸い込まれる引力を同時に感じて、示はどうしていいかわからなくなる。

ふっと視線を外した青が、弁当箱をほどき始めるのを見て、ようやく示は昼休みの学校に戻ってきた。

「い、いただき、ます……」

示が習慣通り手を合わせると、青はちらりと示を見上げ、ついどこちんまりと彩られた弁当に目を落とし、それから、そっと両手を

合わせた。

思いのほか、真摯に。

「いただきます」

ふたりは弁当をつつき始めた。ほんの少量ずつ取られた料理が、青の小さな口に運ばれては吸い込まれていく。その仕草は小鳥のようだったが、ゆったりとご飯を咀嚼する様子は子牛のようでもあり、なんとも微笑ましい。

ちゃんともものを食べるんだなあ、と示は妙なことに感動する。勢い余って、涙がじんわりと浮かんできた。彼女が生きていることに感謝したかった。

（逆咲さんのお父さん、お母さん、お百姓さん、ロールキャベツになった牛さん、どうもありがとう。おかげでおれは幸せです）

示はこみ上げる熱い想いを噛み締める。昼食を噛み締めることはすっかり忘れていた。

いつの間にか先に食べ終わっていた青が、示を促す。

「そろそろ、食べたら」

「……あ、ああ！ そそそそうですよね！ 食べます！」

猛然と（しかしそれなりに行儀よく）弁当を平らげ始める示に、青の視線が触れている。

捉えようとすする。

青が、ちゆる、とパツクの麦茶をすすった。

「質問」

「む、むあい」

示は箸を止めて答える。

「食べながらでいいよ」

「も、もわい……」

「そのお弁当、誰が作ったの？」

示は、箸を置いて、自らを指さした。

あれ、と示は疑問に思う。東堂家の事情はともあれ、尋ねるまでもなく、ふつう弁当は母親が持たせるものではなかるうか。

そんな疑問を、表情や仕草から察したのか、青はこくりと頷いた。  
「これは、シノが作ってる」

「……むぐ……」

ええと、それは。麻倉さんは一緒に食べたいんじゃないのかなあ、と示は思う。

青は、もの問いたげな示の視線に、今度は答えなかった。

「それは、おいといて」

未練ありげに、示は頷く。

「学校だと、デザートを売ってないのが、困りもの」

「……んぐ……」

確かに。密かに甘党な示としても、食後に物足りなさを覚えることがなくはない。

「そこで」

青は、空になったパックを置き、細く息を吸い込んで、布告めいて口を開いた。

「『山月堂』のフォンダンシヨコラを、食べたいと思う」

示は、一瞬きよんとし、慌ててお茶で口の中のもの流し込むと、青に訪ねた。

「え、っと……学校で？」

青は、こくり、と頷いて答える。

「明日の昼休みに」

もちろん、話の流れからしてそういうことにはなるだろう。問題は、『山月堂』のフォンダンシヨコラが曜日限定であり、非常に人気が高い上に生産数も少ないメニューであり、一人一個限定販売にもかかわらず、十時の開店から間もなく売り切れてしまい、例え昼休みに商店街まで走ったとしても、買えるはずもないことだった。

つまるところ、『山月堂』のフォンダンシヨコラを入手するためには、学校をサボらなければならぬ。

「おれが……買ってくる、んだよね」

青は再び、こくり、と頷いた。

フランス帰りの腕利きパティシエが、結婚を機に、高級レストランを退職して始めた『山月堂』でなければ。あるいは、山口パティシエのスペシャリティであり、いかな“シヨコラの達人”といえども一日三十個以上は作ることができないフォンダンシヨコラでなければ。明日の昼食後に供してみせることは、さほど難しくないだろう。しかし、青は『山月堂』のフォンダンシヨコラを指定した。この時点で、『山月堂』のブラウニーなり、『アールジュネス』のフォンダンシヨコラなりで代用するといった、安易な考えは示にはない。実際問題　示も先の春休みに食べてみたのだが、これはそうそう代わりの利く品ではないのだ。絶品、といえる。知らない人には教えてやりたく、彼女が食べたがっているのなら　是非とも食べさせてやりたい味なのだ。

青は、懊悩にしかめられた示の表情を一瞥すると、荷物をまとめ、音もなく立ち上がった。

「あつ……」

「じゃ、よろしく」

あとを追いかけた示を拒絶するように、たん、とふすまが閉まる。示は、呆然とドアを見つめるしかなかった。

放課後、青が示の教室を訪れると、彼は不在だった。

代わりに青は、バッグを担いで立ち上がった鷹仁に声をかけた。

「ねえ」

「ん？　おお、あんたか。示なら、終わるなりすつ飛んで帰ってっただぜ。なんだ、あの野郎、教えてなかったのか？」

頷いたのか、俯いたのか、青は顔を伏せた。

ただ一言。

「そう」

とだけ言い残すと、すぐに去っていった。

ならばもう用はない、とでも言わんばかりに。

鷹仁は、渋い顔でこりこりとあごを搔く。

「……まあ、なんとかすんだろ」

そう一人ごち、姿子を迎えに行く鷹仁だった。

紫乃は、今日も青と一緒に下校できる運びとなった。

喜んでいいものか、怒り続けたものか、紫乃は態度を決めかねていた。青の考えがわからなかった。

そもそも、紫乃にとって青の面倒を見ることは義務であり、決意であり、日常でもあった。だから、青が面倒を見られる理由を思ったことは、これまで、一度もなかったのだ。

「週末」

「……あ、ええ」

「予定、空くかも」

「……？」

それでも紫乃は、青が側にいてくれさえすれば幸せなのだ。そのために、なにを耐えたとしても。

「残、念」

青の囁きは、風に紛れて、紫乃の耳には届かない。遠く離れた示の耳には、なおさら。

青の心は、まだ見えない。

翌日、昼休みとなった。

示が教室の扉を開くと、目の前に青が立っていた。

「……行こうか？」

青は、無言のまま歩き出した。

前日と同じように、ふたりは向き合って座った。一つだけ違うのは、示が携えた紙袋だ。

その袋に、『山月堂』の文字は記されていない。

示が一限目から学校にいたことを、すでに青は知っていた。

示がチラチラ上目に見るのを、青は食事の間じゅう、受け流し続けた。

ほとんど同時に弁当箱の蓋を閉め、手を合わせると、二人は、ドアを挟んで対峙したとき以来で互いの目を見た。

示は、緊張の面持ちで、紙袋を青に差し出す。

「ど……どうぞ……」

青は、袋を受け取ると、中を覗き込んだ。

袋の中には、フォンダンシヨコラ　らしきものが入っていた。

それは深いブラウンで、慎ましい佇まいで、ほのかなチョコレートの香りがして、二切れあり、そして、『山月堂』のフォンダンシヨコラによく似ていた。

青は、しばし、示された回答を見つめる。

「じ、じ……ごめんなさい！」

視線を戻すと、示の頭頂部にぶつかった。

「頼まれてたケーキは、その、買ってない、んだけど……」

示は、頭を下げたまま、胸から言葉を絞り出す。

「も、もし逆咲さんが、なにか困ってて、助けが必要なら、おれは絶対、そこに行く……。学校があるうがなかるうが……。だけど」

青の表情を伺うことなく、腹にあらん限り力を込めて、示は言い切った。

「学校サボって、ケーキを買いに行くとか、そ、そういうことは、おれにはできない。ご……ごめんなさい！」

青は、すつと目を細めた。

「これは？」

「さ、『山月堂』に行ってきたんだ！」

相変わらず水平に腰を折ったまま、示は続ける。

「昨日、学校終わってからすぐ……。よ、予約させてもらえないか、お願いしたんだけど、特別扱いはしない、って……。だ、だから、教えてもらってきた……。その、作り方を」

紙袋を持つ青の手に、少しだけ力が入った。

「レシピとか、そのまんま教えてもらったわけじゃないけど、さすがに……ただ、コツというか、アドバイスというか……ええと、フイーリング、というか……。時間もなかったし、ちゃんと、じゃないけど……」

高名な菓子職人である山口氏だが、これまで弟子を持ったことはない。かつてレストランのデザートを仕切った時代にも、教えないことで知られていた。謙虚ゆえとも、頑固ゆえとも言われるが、ともあれ、かれのスペシャリテの製法など、業界広しといえど秘中の秘だろう。

その指導を小なりとも受けるには、どれだけの情熱が必要か。

「それで……またスーパードに行くって、昨日から仕込みして、なんとかできあがったのが、それ……です、はい……」

そう言っつて、上目遣いに青に向けられた目元には、くつきりと隈が浮かんでいる。

眠っていないのかもしれない。なかった。

「食べてみて……くれない、かな……？」

示は、にへっ、と気弱げに笑った。

青は、一名様一個限定ではなく、二切れのフォンダンショコラを、じつと見つめ、そして、一切れを手を取った。

小さな紙皿に載せられたそれを、たつぷりした光の中でもう一度見た。

それから、犬の絵が付いたフォークを手挟むと、ゆっくりとケーキに差し込んだ。

最初のひとかけらが、青の口に吸い込まれる。

小さく咀嚼する青を、示は固唾を飲んで見守った。

草花の茎めいたのどが、かすかにうごめいて、ケーキを胃に送り込む。

青が、ちらり、と示を見る。示は、ぎぐり、と硬直した。

青が視線を伏せた。フォークがさつきより少しだけ深く差し込まれ、彼女はさつきより少しだけ長く、二口目を味わった。

ざわめきが、BGMのように流れて過ぎる。切り取られた静寂の中、青が、三度差し込みかけたフォークを止めた。

「食べないの？」

「はひゃい!？」

青の視線が、もう一本の、うさぎの絵がついたフォークを指す。

「い、いただきます……」

示ががさごそ音を立てて、もう一組の皿とフォークを手に取ると、青はまた、ゆつくりとケーキを口に運び始めた。

それはやはり、あの絶妙のフォンダンシヨコラには到底及ばない、素人芸だった。材料の質が低く、季節天候に応じて調整を加える感性など望むべくもなく、仕込みに時間をかけすぎてタネがダレていて、見た目にもただただ素朴に過ぎた。決してまずくはないが、特別な出来映えとも言い難い。そのへんのちよつと素敵な奥さんにも作れる、平凡なケーキ。『山月堂』の店頭に並べられる品ではなかった。

それでも青は、変わらないペースで 紫乃が作った弁当と同じように、ごくふつうに、食べ進んでいった。

示の胸に、一つの感慨が沸く。

(おれが作ったものを、体に入れてくれたのか)

感じ入る示に、青は、パックの烏龍茶を、つん、とつついて言う。

「紅茶がない」

「……あつー!」

痛恨のミスだった。フォンダンシヨコラのアマリの難度の前に、飲み物を完全に失念していた。『山月堂』は紅茶もウリの一つだというのに。

頭を抱える示を見もせずに、青は続ける。

「ほかには」

「え」

示は、もぐもぐと口を動かす青を見つめた。

「なにが作れるの？」



示の脳裏に、べらべらべらとレシピブックが翻る。

「……………あ、ああー、うん、色々作れるよ、モンブランとか」  
「今の時期は、栗がないでしょ」

冷静にツッコむ青は、眉一つ動かさず。

「うああ、そうだよな！ そ、今？ あーっと……………今の時期!？」  
示は呆然と、彼女の回答を受け取った。

「ひよっとして……………明日も、作ってきていいの……………？」

青は手を止めない。

「ほかに」

「ひゃい！」

「レパートリーは」

「そ、それはその、ショートケーキでも、タルト系でも、あと妹が好きなのは」

「妹」

「へう！」

青の目が、闇夜の星めいて光る。

「いるんだ、妹」

「う、うん……………。それで、妹が好きなのは……………チーズケーキ、で……………」

青は、こくりと嚙下すると、目の前の中空に目を留めて、繰り返した。

「チーズケーキ」

つぶやくと、半分以下になったフォンダンショコラに目を戻し、また崩し始めた。

示は、おずおずと尋ねる。

「ひよっとして、好きな……………？ その……………チーズケーキ」  
残り少ないケーキを前に、心なしか、寂しげにも見える青に、示は独り言めいて問いかける。

「あ……………明日は、チーズケーキ、作ってこよう、かなあ……………？」  
青はもう、なにも答えず、ただ手と口を動かし続けるのみ。

「ごちそうさま」

「お、おそまつさまでした……」

結局、青はなにも教えてはくれなかった。

「……バイクドとレア、どっちにしよう……」

その夜、チーズケーキの材料を前にして、妹が鶴の一声を下すまで、延々と唸り続けた。

残念ながら、彼の悩みが報われることはない。

バイクドチーズケーキを完食した青は、翌日のおやつにレアチーズケーキを所望した。

ドウ・イット・ユアセルフ（後書き）

もはや跡形もありませんが、本作のモチーフは『竹取物語』なので  
す。

石作皇子も、ご自分でろくろを回せば、かぐや姫に振り向いてもら  
えたかもしれませんね。

今夜のドレスは如何？（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## 今夜のドレスは如何？

体育の授業が終わったあとのことだ。

鷹仁とともに用具の片付け当番に当たった示は、例によって親友に相談を持ちかけた。

「ねえ、鷹仁……」

「あん？」

「彼女に食べられたい、って思うこと、ない？」

「ブツ……ゲホツ、ゲエーッホ！ ゲホツ！！」

鷹仁は、なにか異質なものを見る目で、恋の病と闘病中の親友を見た。

「……ケーキやしら共が憎い……」

「そ、そうか。俺アねえな」

「そうなんだ。変わってるね」

頭おかしいんじゃないかねえのか、とはなかなか言えない鷹仁なのだ。本当に、おかしいので。

「なんだ、ホレ。食われたら、もう会えねえだろうが」

「彼女と一体になれたら、それでいいんじゃないかなろうか……」

そう言われると、自分の愛情の確かさに、つい疑問を抱いてしまったりする鷹仁だが、体が別々だから味わえるものもあるので、やはり自分の肉体は捨て難い、と思う。

「お前はスキンシップが足んねえんだよ。彼女の手えくらい握ったのか？」

「手……！！……？……？……？……？……？」

示は驚き戸惑った。

「どんだけビビんだよ、この程度の話で。握るだろ、付き合ってたら手えくらいはよ」

「……鷹仁師」

「おつよ」

示の態度が、友人に向けるものから、人生の先達に向けるものになる。

「どうやったら彼女の手を握っても生き残れますか？」

「フツーに許可取って手え取ったらいいんじゃないか？」

もつとも、鷹仁自身は、その程度のことでも彼女にお伺いを立てたりはしない。

「シヨックで死なない？」

「女の手え握る度にくたばってたら、輪廻しすぎでとっくに解脱してらア」

「……実は、きみは神仏だったのでは……」

男として己の遙か先をゆく親友に、示はもはや神々しさすら感じた。

片付けを終えて教室に向かいつつ、鷹仁は答える。

「真言立川流もビツクリだなオイ。まあ、やってみろつて。案ずるより産むが易しだ。もつとも、産ませるのはそれなりに難しいけどよ」

「そうか……」

下ネタに全く気付かない示なのだった。ちなみに、真言立川流とは、男女の交わりを通じて成仏を目指す、仏教の一流派をいう。

「……いつか、お前とこういう話で盛り上がったらいいなア」

「うん？ あ、え、うん？ なんの話？」

「なんでもねえよ。気にすんな」

「なんの話？」

「いや、鷹仁がなにか　びゃわあああ！！」

「……俺アそろそろ慣れてきたぜ」

青のつぶらな瞳が、至近距離で示を見上げていたのだった。

「ちよつと、来て」

鷹仁と別れて青のあとを追いつつ、示は彼女に尋ねた。

「どうしたの？　一緒に帰ろうつてことじゃ……ないよね？」

青と昼食を共にするようになって数日が経つ示だが、未だに登下校は別々だった。紫乃がいるからだ。

ともあれ、用件がなんだろうと、青の誘いを断る理由は示にはない。冷や汗と微笑みが同時にこぼれる。それでも、随分と緊張しなくなったのだ。

「手伝って」

「う、うん！ でも、なにを……？」

「探し物」

「う、うん！ でも、なにを……？」

そこで、青は一拍、間を置いた。

「パンツ」

「う、うん！ パ」

示の脳が、入力された情報を遮断した。

「あと、ブラジャー」

「ブ」

「つまり、下着」

衝撃発言に呼び起こされたように、開け放たれた窓から風が入り込んだ。

膝丈のスカートが、奇跡的な効率で風をはらむ。

青は押さえようとせせず、太ももまでも、露出するに任せた。

その瞬間、青の発した、ただならぬ単語を必死に理解しようとしていた示の意識が、全て白くぬめぬめ光る青の生足に吸い付けられた。そして、全ての情報が正しく配列される。

下着 探す ない 穿く ない 中 ない 生 全部。

示の肉体は、極めて紳士的に運動した。

すなわち、脛をピシヤリと閉め、猛然と半回転したのちに、青に背を向けながらその脇を駆け抜け、窓をしっかりと閉めた上で施錠したのだった。

「ひいっ……ひいっ……！」

青は、スカートが空気を吐き出し終えて、脚にまといつくまで、

なんの防御も抵抗もしなかった。一片の羞恥も顔に出すことなく。

「じゃ、行こうか」

「ま、待ってよ！」

青は、ごくわずかに小首を傾げた。示にこのわかりにくい意思表示が見えるようになったのは、つい昨日のことだ。

「あの、前の授業、水泳でしょ？」

青は、こくり、と頷く。しっとりとした水を含んだ髪の毛のヴェールは、いつもより隙間を大きくして、青白い頬が大胆に覗き、示の心臓を跳ねさせた。

「下……その……問題のもの、を失くしたのって、女子更衣室、だよね？」

こくり。なにを当然のことを、と言わんばかりだった。

「おれ、入れない……ん、ですけど……」

「今は誰もいないよ」

「うえ……」

つまるところ、概ね自分の世間体だけの問題なのだった。邪な目的のためでもなく、バレなければ誰に不快も迷惑もかけることはない。となると、なんとかしてやりたい、と思うのが東堂示という少年の性<sup>さが</sup>だった。

「ぼく、困ってるんだけど」

なにより、青がノーブラ&ノーパンという事態。見過ごすには、あまりに危うい。

ぎぐり、と示の心臓が波打った。

上下のブレザーに隠されて、今は人目に触れる状態ではないが、一歩間違えれば全開必至の状態なのだ。特に下が。

青のお大事は今、最後の守りを失っている。ついさっき、示自身が、加害者になりかけたのがいい教訓だ。

下着泥棒の可能性を一切考えていないあたり、どうにも平和惚けが過ぎるが、ともあれ示は、現状を緊急事態と認識した。

やるしかない。



「十分ほど、お待ちいただけますでしょうか……」

葛ヶ丘南高校には、室内プールが完備されている。温水設備により、真冬でも水泳ができる代物だ。もちろん水泳部もあり、一年を通じて活動している。従って、いま 平日の放課後にも、彼らはプールで練習に励んでいる。

しかし、示にとっては幸いなことに、紛失や盗難を避けるための措置として、二室ある女子更衣室には、しっかりと利用区分が決められている。すなわち、部活動では第一、青を含む一般生徒は第二更衣室を利用する。

つまり、青の言うとおり、第二更衣室には現在誰もおらず、誰の荷物も置かれていない。一方、すぐ隣には利用中の更衣室があり、誰かが通りかかったり、物音を聞いて入ってくる可能性は充分にあるといえる。

ゆえ、示がそのまま女子更衣室に踏み込むことは、やはり社会的自殺行為なのだ。

恥を捨てれば、取りうる手段が一つあった。

示はまず、一年の教室に、妹の<sup>たひ</sup>辿を訪ねた。

彼女は、友人の山吹<sup>やまぶき</sup>木苺とお喋りしていた。木苺は辿と一緒に登校する仲で、しばしば東堂家にもやってくるご近所さん。示にとってもあまり気を遣わなくてよい相手だった。

辿は運動着姿だった。これから部活なのだろう。

「やあ」

「よ、兄ちゃん」

「ひゃー！ こ、こんにちは……」

にへっ、と示が気弱げな笑顔を浮かべると、辿は脳天気極まる笑顔で、木苺は両手で顔を覆ってそれに答えた。

示の側は気安い気持ちを持っているのだが、木苺のほうは、毎度、

示を前にするとときめんに動揺するので、示が妹たちと登校するこ  
とはないのだった。怖がられているのかと思うと、示としては少々  
傷付く。

「ちよっと、涎を借りるね」

「はひ……どうじよ……」

両目と口をぎゅっと閉じ、木苺はパントマイムのように両手で壁  
を作った。

兄妹は、そんな木苺を見て苦笑した。顔を見合わせ、珍しく学校  
で兄妹の会話が始まる。

「制服を貸してくれ」

「いいよー。はい！」

一瞬で終わった。

涎は、ぐしゃぐしゃのまま鞆に突っ込まれた制服を、そのまま兄  
に放って寄越す。

あまりにも大雑把な妹のありさまに、示は将来への不安を禁じ得  
ない。

「……まあ、とにかく助かった。ありがとう、借りていくよ」

「なんなら、そのまま家まで持って帰ってよ。じゃねー」

「それじゃあ」

畳み直した制服を、しわにならぬよう自分の鞆に入れてから、二  
人に手を振り、示は去っていった。

ようやく緊張から解き放たれた木苺が、遅れて状況を把握する。

「……えっ？ たどちゃん、今、どうしたの？ あれ？」

「ん？ 兄ちゃんが制服貸してって」

「……えっ？ えっ？」

「それはどうでもいいんだけど」

『憧れのお兄さん』の女装趣味疑惑を、その妹はあっさりと流し  
た。兄の懸念もやむなしという大雑把さだが、その兄の鈍感さもな  
かなかどうして、危険域だ。

「きいちゃんもさー、そろそろ顔見て話せるようにならないと、い

つまでたつても全然進展しないよ？ 今の彼女から奪わなきゃいけないのにさー」

「えっ？」

そして今度こそ、木苺の意識は、完全に真っ白になった。

「ん？ あれ、きいちゃんに言つてなかつたっけ。兄ちゃんに彼女ができたつて、けっこう有名な話なんだけど」

木苺は、口をぱくぱくさせる。

「まあ、勝てばいいんだから問題ないっしょ。やるこた変わんないつて。友達だからな、あたしはきいちゃんに肩入れしてやるっさ」

「た、たどちゃん」

「なんだねきいちゃん」

「ふつうこれつて、失恋つていうんだけど」

辿は、ごく真面目な顔で言い放った。

「そうなん？」

木苺は、ほろほろと泣き崩れた。

「わはははは！ 似合いすぎだろ少年！」

「し、姿子さん……！ 声を、控えて……」

姿子は演劇部に所属している。カツラの一つふたつは、どこからともなく取り出せる身分だ。制服まで姿子から借りようとしなかったのは、そこそこ良識的な判断といえよう。

苦もなく弟分の頼みを叶えてやれる姿子ではあったが、あえて、交換条件を出した。

そういうわけで、姿子は、示にかぶせた長髪のカツラを梳いてやりつつ、青との対面を果たすこととなったのだ。

「その子が例の彼女かい？ ちはっす」

青は、ぺこり、と会釈する。

長い前髪に隠れた視線を、無遠慮に姿子に射つける青に対して、わざわざ青に会いに来た姿子は、努めて無関心を装った。そんな駆

け引きに、もちろん示は気付かない。

「これでよし、っと。ヘンなことに使ってもいいけど、バレるんじゃないよ!」

「す、するわけないじゃないですか……」

恐縮する示の肩を一発どやして、姿子は去っていった。鷹仁と合流するのだろう。

「あの人は?」

「あ、うん、姿子さん。おれの、友達の　ほら、あの、鷹仁。彼と付き合ってる女性むすめで、おれにとっては、姉貴分……かな……」

「ふうん」

青は、慌ただしく整えられた示の服装に目をやると、朴念仁にもわかるくらい、たっぷり皮肉を込めて言う。

「三姉妹なんだ」

「あの……いちおう、確認、しておくけど、これは別に、おれの趣味ってわけじゃ……」

示の言い訳を遮るように、青が示の口を指さした。

「口調」

「にゃい!?!」

「　バレバレ」

「あ、そそそ、そつだ　わね!　気をつけないと　いけないわね!」

青と一緒にいるときの示の声は、常に上ずっているので、その点、問題は少ないようだった。

現在の示は、長い黒髪を二つ結びにし、しわの寄ったスカートを着いて、妙に甲高い声で喋る、女子高生らしき生き物に見える。

あとは、探索を完了するまで、ボロが出ないことを祈るばかりだ。

幸いにして、女子更衣室に辿り着くまでに、人に会うことはなかった。もっとも、挙動不審な示はともかく、普段から影法師めいて気配の少ない青には、廊下ですれ違って誰も気付かないかもしれ

ない。

青が歩く間ずっと、通学鞆と髪とスカートが揺れていて、示の動悸は休む暇がなかった。

女子更衣室は室内プールに隣接しているため、建物の奥まったところにある。窓のない部屋には日が射し込まず、病院のようなうす明るさを保っている。

「よろしく」

それだけ言つて、早速、青は探し物に取りかかった。

かがみ込んだ青の膝裏がまぶしいほどに剥き出しで　それは普段と変わらないが、密室に二人きりというだけでつい意識してしまい、示は耳まで紅潮する。

ぶるぶる、と示はツインテールを振った。そして、ずれたカツラを直した。

自分の感情などどうでもいい。青は今ノーブラ&ノーパンなのだ。その恥ずかしさ、心許なさはいかほどだろうか。いかほどもなにも、顔に出ないのでわかりようもないのだが、少なくとも、男子がパンツを穿き忘れるのとは次元が違うだろう。

なにより、危険だった。それだけは確かなことだ。

パンパン、と頬を張つて、示は探索を再開する。ロッカーの一つ一つを、目を皿にして、警察犬なみの熱心さで探つてゆく。

しかし。示はふと考えた。自分が発見した場合は（そうでなければ役立たずの変態だが）青の下着を思いつ切り見てしまうのではなかろうか。

青の、パンツ。

「きゃあぁー！ーっ!?!?」

絹を引き裂いたような悲鳴だった。

「見付かった?」

「見、見付かったら大変だよ!」

「見付からなくて、大変なんだけど」

「そ、そそそくだよね! わよね!」

示は、パパパパパン、と頬を張る。

(なにかが見えたら即、視線を外せるように、心の準備をしておく……)

妙に難度の高い決意を固める示だった。

青は、そんな示の全てを、あますところなく観察していた。

そのとき、足音が聞こえてきた。

「ひっ……………」

示は咄嗟に口を噤み、手を止めた。足音は、入り口の前を通り過ぎる。

「ふひい……………」

示が安堵して、詰めていた息を吐いた瞬間、足音の主は不意に引き返し、ドアを開け放った。競泳水着姿の、水泳部の女子だった。

「あっ」

「あれ、どうしたの？」

そう言って、示と青に怪訝そうな視線を向ける。

「水泳の授業のとき、忘れ物」

「そっか。見つからなかったら言ってね」

「ボタン、とドアが閉まる。」

「すう……………ふはあ……………」

示は、大きく深呼吸をした。

そこにまた人影。

「青、こんなところにいたの。なにかあった？」

現れたのは紫乃だった。示は、絶息した。

青とふたりきりである“見知らぬ女子”に、紫乃の視線が容赦なく突き刺さる。切り裂かれる。震え上がる示をよそに、紫乃は青に問いかけた。

「友達？」

「通りすがりの人。手伝ってもらってるの」

どうやら、即死は避けられたらしかった。ほっと息を吐く示をよそに、紫乃は勢い込む。

「なに？ 私も手伝うわよ」

「パンツとブラなくした」

「パ、ブ」

こほん、と咳払いをしつつ、示は紫乃に同情した。同性だからか、あるいは付き合いが長いせいだろうか、紫乃は示よりいくらか早く再起動した。

「た、大変じゃないの！！」

紫乃は、慌てふためきながら、激しく周囲を見回したが、都合よく下着が落ちているはずもない。落ちていたからといって、はけるわけでもないが。

「と、とりあえずこれを！」

紫乃は、猛然と長めのスカートをまくり上げ、自らのパンツに手をかけた。太ももが危ういところまで顕になる。そのまま一気に引き下ろそうとする。

「ぎゃあああああー！ー！ー！ー！？」

示は、締められた鶏のような悲鳴を上げる。

「ぼく、人がはいたパンツはやだ」

「そ、それはそうよね！」

そう言われると、紫乃は大人しくスカートを下ろした。少々傷付いているようでもあった。

そもそもサイズが全然合わないんじゃないかなろうか、と示は思う。

下はともかく、上の方は。

「じゃあ私、買いに行ってくるわ！」

「あ」

間抜けな声を上げる示をよそに、紫乃は稲妻のごとく走り去る。

示は頭を抱えた。わざわざ女子更衣室に忍び込むより、買いに行くほうがはるかに安全かつ簡単で、まだしも恥ずかしくないではないか。

学校から最寄りのコンビニまで（それより近くに女性もの下着を買える店があるのか、示は知らない）普通に走って十分程度。あ

の勢いなら、往復で五分もかからないだろうか。

これで青のお大事は守られるのだ。めでたしめでたし。

と、いうわけにもいかない。

ひよっとしたら、お気に入りだったかもしれない。なにか、理由があつて大切にしているかもしれない。人に見られたくない秘密があるのかもしれない。いずれにせよ、どんなパンツなのか、まるで想像できないが。

そもそも、青の願いはパンツを見付けることであつて、代わりのパンツを手に入れることではなかつたはずだ。少なくとも、示はそう頼まれたのだ。

探そう。見つかるまで。いや、必ず探し出してみせよう。示は、そう決意を新たにした。青を振り返り、にへっ、と笑いかける。

「じゃあ、おれたちは続きを」

青は、示を見ていた。

自分の胸でも、お尻でもなく、なくなったパンツでもなく、示だけ、じつと見ていた。

茫洋とした視線に宿る、真剣とも、懸命ともいえる光が、示の意識を吸い込んで、身じろぎもできないようにした。

コチ、コチと秒針が回る。紫乃は走っている。示と青だけが、微動だにせず、ただ、互いを見ている。

「そういえば」

急に青が、ぽん、と手を叩いた。

「バッグに仕舞つていた、かも」

「……ええええっ!？」

あまりのちゃぶ台返しに、示はつい、バッグをまさぐる青の手を凝視してしまった。それが、なにかを探り当てるまで。

「あつた」

「ぴぎゃあああああああっ!!!」

心構えの甲斐あつて、示はそれを目にする前に、半反転することに成功した。



「見付かったよ？」

「お、おめでとございます！？ ど、どうぞ、おはきになってください！ 早急に！」

「そうする」

ぎゅつと目をつぶった示の耳に、かすかな衣擦れの音が、恐ろしく明瞭に入り込んできた。

まずは、しゅるしゅる、となにかを抜き取る音が二回。ついで、とき、と布が床に落ちる音。きゅつ、と細いものを引き抜く音に続いて空白　と思いきや、耳をすませば、ぷち、ぷち、と連続したごく小さな音がする。ふたたび、しゅるしゅる、しゅるしゅる、とさ、のコンボ。さらに、ジー、と明らかにファスナーを下げる音までが聞こえてくる。

情報を再構築。青はブレザーの上着を脱ぎ、タイを抜き、ブラウスを脱ぎ、スカートまでも、今、脱いだ。

たった今、青が身に着けているものは、チョーカーを除けば、靴下だけだ。

「なななななななんでんでっ！？」

「習慣」

ぐうの音も出ない。もちろん息もできない。なぜなら、示が吸い込むべき空気は、青の素肌の非常に大きな面積と直接に触れ合っているのだから。

なにかこうにおいとかしたらどうするのか。

示の脳裏に、限りなく現実に近い妄想が疾る。全裸になった青はかがみ込んで、バッグに手を差し入れ、さぐり、ブラジャーを取り出した。更衣室に据え付けられた姿見の前まで移動すると、まずは右手を通した。ついで左手も通すと、肩ひもを気持ちいい具合に調整した。それから、ほくろ一つない背中の上で両手を踊らせ、ホツクを留めた。

示は脂汗をだらだら流しながら思った。どうして上からなのか、と。早くパンツをはいてくれ　彼は祈った。自分の背後にある恐

ろしい現実に卒倒しかけていた。

異様に高まる緊張感を感じていないかのように、青は落ち着いて、バッグから、神秘的にして薄くて小さい布製品を取り上げた。時計は無情に時を刻む。

彼女は、足を上げなかった。自然体に立ったまま、その部分にその布をそつとかぶせた。そして、腰の横で蝶結びを作り始める。誰も見てはいないのに、まるで見せ付けるような丁寧さで、左右を結び終えた。まだ示は息をしていない。

時針が傾く。ブラウスに腕が通され、三秒に一個ずつボタンが留まっていた。青から放射される謎のエネルギーが、ようやく弱まったような気が示にはした。青はタイを結び、スカートを引き上げてホックを留め、ファスナーを閉めた。

示は、さんざん迷った末、色んな意味の息苦しさには耐えかね、ついに空気を吸い込んだ。

とてもいいにおいがした。

ガンガンガン、とロツカーに額を打ち付ける。

その間に、青はブレザーの上着を身にまとい、冠婚葬祭全対応のフォーマルな姿となった。

はひ、はひ、という示の弱々しい呼吸音に、分針の揺れる音が混じる。

「終わったよ？」

「う、うん、よかつ」

「ほらね」

振り向いた示の目は射られた。

射たのは、鮮烈な白と黒のコントラスト。

青は、スカートをめくり上げていた。丁寧に、ブラウスのすそまでも巻き上げて。つややかに光るサテンの生地、外縁に沿って広がる蔦模様に、きつちりと可愛らしく結われたサイドの蝶々までも、すべてがつまびらかになっていた。

あでやかな黒。

しかし、示の心を捉えたのはそこではなかった。計算高く造られ  
た高級車フェアレディよりさらに優美な腰骨のラインの。いかなる曲率によつて  
描かれているのか、ひたすらになめらかな太ももの。とてつもなく  
薄く、同時に柔らかかそうなおなかの。黒の被覆から透ける、陶器の  
表面の下に、温かい血の流れを通わせた下腹部の。  
白。

それが、示を捉え、縛り、その血を沸き立たせ、際限のない高揚  
をもたらして、かれの背中を押しかける。

青の手が。きゅ、とスカートを握り締め。

「青——————ツツツ！！！！！！」

「ぴぎゃああああああああああああああ！！！！！！」

「はい、買ってきたわよ！」

「ああああ　　れ？」

こわごわ開けた示の視界で、青のスカートは、な—んにもありま  
せんでしたよ—、と言わんばかりに、貞淑に垂れ下がっていた。

「もう見つかったよ」

「あら、そうだったの？　よかったわね」

紫乃は、全身から滝のように汗を流し、湯気を吹き上げつつ、な  
—んにもありませんでしたよ—、と言わんばかりに、にっこりと笑  
った。

「この人が見つけてくれた」

「それはどうも　あなた、どうしたの？」

崩れ落ちた示に、答えを返す力は残っていなかった。

「疲れたんじゃないかな」

「そう。なら、探し物も見つかったし、帰りましょうか。あなたも  
帰りなさい。それじゃあね」

青は、紫乃のあとに続く。

「また、あした」

小さく言い残して。

「せっかくだから、これはあげるわ。青、こついつの使っでしょ？」  
紫乃が買ってきたのは、ホワイトコットンの上下揃い。

「うん」

答えて、青は新品の下着をバッグにしまいこむ。

「ねえ、紫乃」

「なあに、青？」

青は、茫洋と宙に目をやりつつ、尋ねた。

「ぼく、黒の下着って、似合っと思っ？」

「くっ……も、もちろんよ！ むしろ、たまらないと言ってもいいわ！」

「そっ」

そして、青は呟いた。

「なら、こつちで、よかつたのかな……」

「ん？ 青、なにか言った？」

「なんでもない」

そうして、二人の少女は、仲睦まじげに下校する。

青のバッグには、二枚のショーツが入っている。紫乃に渡された、未開封のコットンショーツと 朝、家を出るときにはいていた、白いショーツが。

## 今夜のドレスは如何？（後書き）

本作は、『竹取物語』における、かぐや姫が五人の公たちに試練を課す部分をモチーフとしつつ、さらに別の童話・伝説のイメージを挿入しています。

今回のモチーフは、『灰かぶり』。ただしこのシンデレラ、ドレスは自分の趣味で選びます。魔女のコーディネートでは、王子さまに見せるには納得できなかった様子。

永久の遠さと刹那の近さ・前（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## 永久の遠さと刹那の近さ・前

「……週末です」

「……おお、そうだな」

金曜日。例のごとく、休み時間に、示は鷹仁と顔をつきあわせていた。

恋愛相談だった。

「やはり……デートに誘うべきなのでしょうが」

「そらそうだろ。つか、お前は行きたくねえのかよ」

「い、行きたいよ！ けど、ちょっと、顔を合わせづらい、というか……」

「なんかやらかしたんかよ？」

「やらか……された……というか……」

昨日、彼女のパンツを見てしまったのだった。

青が勝手に見せたのだから、示がなにか気に病む必要は全くないのだが 家に帰ってから、羞恥に悶絶しつつ例の出来事を回想して、気付いたのだ。どう考えても、彼女は自分以上に恥ずかしかったに違いない、と。それは確信だった。

「じゃあお前、ますます誘うべきだぜ。お互いに、腰が引ける前にな。会わねえのが一番よくねえよ」  
「な、成程」

青の名誉のために示は言葉を濁したが、鷹仁の回答は明快だった。いちいち感心する示だ。

「で、アテはあんのか？」

「それが……なにも……」

示自身は無趣味で、これといって出かける先もない。

一方、青の趣味はといえば これがさっぱり、見当も付かなかった。

「本人に聞いちまえばいいんだけどよ。ノープランつつうのも、カ

ツコがつかねえわなあ」

「そ、そうなんだよ」

「そこで、こいつだ」

鷹仁は、ニヤツ、と笑みを浮かべると、二枚のチケットを取り出した。

「そ、それは」

「見ての通り、温水プールのタダ券よ。海にやちいと早えが、こいつがありゃ、彼女の水着姿が拝めるってえ寸法だぜ」

葛ヶ丘マリナランド。市内のデートスポットでも、ちよつと贅沢な部類に入る施設である。示の小遣いでは、少々、心許ない。

「姿子さんと……行くの？」

「お前らが行かねえならな」

示は、目をぱちくりさせた。

「もらつて……いいのかい？」

「おうよ。ツテで手に入つたからよ、祝いの印にくれてやらあ。ま、俺ア水着より刺激的な」

「鷹仁ッ！」

感涙しながらチケットごと両手を握りしめられて、鷹仁は少し、引いた。

「おれは、今日ほど、きみと友達でいてよかったと思つたことはない！」

「……お前、そりゃ、あんまりじゃねえか……？」

プールのチケット以下の扱いだつた。

「まあいい。ほれ。失くすなよ」

「ありがとう、ありがとう……。じゃあ、さっそく」

携帯電話を取り出し、眠くなりそうな速度でメールを打ち始めた示を、鷹仁はじとついた目で眺める。

「いや、メアド聞き出せたのはよかったけどよ、それっくらいの用事、直接言いに行つたらどうなんだ……？」

誰に気を遣っているのか知らないが。



そんな鷹仁の心配をよそに、示はルンルン気分でメールを送信した。

『明日、一緒に葛ヶ丘マリナランドに行きませんか？』

「ところでお前、水着持つてんのかよ。男の水着なんざどうでもいいが、にしたって学校指定はありえねえぜ？」

「あ、あああ、危ないところだった。そうだね、買いに行かないと」「なんならよ、逆咲と一緒にいったらいいじゃねえか。二人で水着選びもオツなもんさ」

「ええっ！ い、いいのかな、そんな……」

「いいんだよ、彼氏の特権だ。ついでに、そいつも言ってみたらどうだ」

「うん……あ、返信来た」

携帯電話を開いた示が、かちん、と硬直した。

「あんだよ……げ」

画面を覗き込んだ鷹仁も、同様の表情になる。

返信の文面は簡潔だった。

『やだ』

男どもは、冷や汗を垂らしながら、顔を見合わせる。

「……鷹仁……」

「……あ、あー。えーっと、なんだ」

昨日の事件の発端ともなったように、青は水泳の授業には出ているわけで、全く泳げないとか、水が怖いわけもない。あまりにあっさりした拒絶に、示は硬直した。

「腹回りでも、気にしてんじゃねえの……？ 多分……」

「あの……体型で？」

「う……そりゃ……」

青をスレンダーと評するか、幼児体型と評するかはともかく、これ以上痩せる必要がないのは間違いないだろう。

「だったら、バストアップ体操でもするんだろっよ。まあ、アレだ。もう、この程度のこと、イチイチ落ち込まねえほうがいいと思う

ぜ……」

「あ、ははは……そうだね……」

はあ、と二人は同時に溜息を吐いた。

「そうだ……これ、返すよ」

「いや、持っつけ。なんなら、辿ちゃんでも連れてってやればいいさ。喜ぶぜ、きつと」

「そ、そうだね……はは……」

結果的には、このときの判断が、功を奏することになる。

紫乃には、この数日、ずっと気になっていることがある。

青が、この週末、“あの男”とどこかに出かけるのか、ということだ。

思い返せば、青が“あの男”の告白を受け入れた、あの朝の会話が伏線だった。

『ぼく、予定あるから』

『たぶんね』

そして、放課後。

『週末』

『予定、空くかも』

青は、あの時点では、“あの男”を、すぐに振るつもりだったのかもしれない。

しかし、今のところ 一緒に昼食を取る以外、それらしいこともしていないようだ、関係は継続している。

どれだけ執念深く観察しても、それ以上のことはまったくわからなかった。

そもそも、詩乃は男性全般が嫌いなのだ。がさつで、無神経で、鈍感で、なにより 女の子を汚けがすものだから。

同性愛者かなにかでない限り、その点に限って誰も違いはなく、その一事をもつてして、紫乃にとっては宿敵といえる。その宿敵との争点の一つが、まさに明日。

紫乃は、覚悟を決めた。後ろの席の青に振り返る。

「ねえ青、土日、なにか予定は」  
「待って」

そのとき、青の携帯電話がメール着信を告げた。

青は、メールを確認し、すぐ携帯電話を閉じと、そのまま宙を見つめ、考えに沈んだ。

まさか 紫乃は、ゴクリと唾を飲み込む。

学校の中ならまだいい。いや、よくはないが、そうそうおかしなことはされないだろうし、させもしない。しかし、一緒に外に出かけるとなれば、なにが起きるかわからないではないか。

青が、再び携帯電話を開いた。

ぼち（返信メール作成）。ぼちぼちぼち（入力）。ぼち（確定）。  
ぼち（送信）。ぱたん（閉じる）。

（短ツ！？ ケータイで三回押しだから…… 『は』、『い』！？

『はい』なのツ！？）

再び息を呑む紫乃に、青は、冷然と告げた。

「土日、予定入った」

「そ……そう……」

紫乃は、一人決意する。

（決して危ない目には遭わせないわよ、青！）

紫乃は毎朝、青の部屋を訪れる。この一年あまりというものの、その習慣が崩れたことはただの一日もない。雨の日も風の日も雪の日も、台風の日すら例外ではなかった。

合い鍵で部屋に入ると、足音を忍ばせてベッドに近寄る。寝る前と全く同じ体勢で眠る青は、穏やかな寝息のほかは、蠅人形めいて機能を停止している。

「かわいいなあ……」

他人に見られたら通報間違いなしの、紫乃の表情だった。

照明を点けないまま、紫乃は朝食の支度を始める。メニューはトースト中心で簡単に。その代わり、サラダはオリーブやらミニトマトやら、量の割に多彩な中身で、パンは自家製（これは紫乃の作）、ドレッシングも（これも紫乃の作）ヨーグルトも（これは紫乃の母の作）自家製。紅茶は皇室御用達茶葉＋牧場直売牛乳＋厳選白ざら糖、渾身の煮沸 細心の抽出 懸命の調味。

ひと仕事終えて息を吐く紫乃の前に、部屋のランクをぶつちぎりに超越した、リッツカールトンあたりで最高のメイドが完璧な笑顔と共に供すべき朝食が出現した。

しかし、紫乃はそこに留まらない。遠い潮騒のような寝息を立てる青にきらきらした瞳を向けると、あえて瞼を閉じた。瞬間、紫乃の脳内に、古くは六歳時から、新しきは昨日に至るまで、『人間の条件』全編に匹敵する『逆咲青ベストコレクション』たつぷり魅せます十二時間！究極美少女・青ちゃんのオイシイところ全部！〜デイレクターズ・カット版（責任編集：麻倉紫乃）』が走馬燈のように流れ、それにより、いわゆる最高の調味料が調合された。

「ん~~~~~ちゅっ？」

そして、それを投げキッスにして朝食に振りかける。

午前六時半。紫乃は、満足げにひたいの汗を拭った。

「青、起きてー！ 朝ご飯、できてるわよー！」

起き出してきた青は、いつも通り、チョーカー以外、なにも身に付けていなかった。

青白い肌と、ほのかな桃色に色づいた部分とのコントラストが、朝日の中に眩しい。

紫乃は、噴き出しそうな鼻血を必死に堪え、鋼鉄の笑顔で、下着を差し出した。いつも通りの、白のコットン。

「はい、着替え」

「ん……」

青には、髪を完全に乾かさずに寝る癖があるのだが、恐ろしいことに、寝癖の一つもついていない。下着を身につけ、部屋着のカッ

トソーとシヨートパンツに袖を通すと、それでちゃんとした美少女になる。ちなみに、紫乃はシンプルなカットソーとブルージーンズ。「いただきます」

「はい、いただきます」

紫乃は、朝食を口に運ぶ青を眺める。小鳥が餌を啄むのを、スロ―モーションにしたような仕草が実に可愛らしい。

思わずだらしなない笑みを浮かべる紫乃に、青の一言が刺さった。

「九時ごろには、出かけるから」

ついてくるな、と言わんばかりだった。

「……ええ、わかったわ」

知ったこつちやございませんと聞こえたかどうか。

皿洗いに簡単な掃除、洗濯を済ませて、八時ごろには、紫乃は青の部屋をあとにした。

そして、帰り道の途中で足を止める。慎重に周囲を確認しその姿が、ふ、とかき消えた。

次の瞬間には、アパートを一望できる、近くのマンションの屋上に、紫乃はいた。

双眼鏡も持たず、じつ、と目を凝らす。青が姿を現したのは、宣言通り、九時ごろだった。

服装は、単色のパーカーに七分丈のカジュアルパンツ。紫乃の見る限り、思わず頬が緩みそうなほどキュートだが、デートに行くには、地味な格好とも言えた。

「どうするつもりかしら……？」

青を追う紫乃が辿り着いたのは、ショッピングモールだった。

有名な待ち合わせスポットであるシーサー像に目もくれず、青は店内に入ってゆく。上りエスカレーターで淡々と運ばれて、六階、スポーツ用品エリアで降りた。ついに立ち止まったのは、水着コーナーだ。

実に、看過しがたい行動だ。もちろん、青だって私用の水着くらい持っている。今、新調する理由とくれば、一つしか思い当たらない

かった。

「あの男”の ためつてわけ……？」

「ごごごごご、と紫乃の背後に炎が燃え上がり、噛み締められたハシカチが悲鳴を上げる。声をかけようとした店員が、そそくさと去っていった。」

一方、青は、誰にも気付かれることなく、人里に迷い込んできた妖精めいて、ふらふらと柵の間を歩き来している。

そして、ひまわり柄のパレオタイプを手に取った。

「アリね！」

花の精のような可憐さに、紫乃は遠くからサムアップを送った。胸元のフリルが、ポリウム感のなさを補うだろう。が、しかし。

「守りの選択ではあるわね」

紫乃は首を傾げた。同感だったのか、青は、手に取った水着を柵に戻す。

そして、あっさりと水着コーナーを立ち去った。あとを追いつつ、紫乃は一人ごちた。

「これは、長期戦になりそう……」

それから、青は、総計十一店舗。たつぷり八時間以上、水着ショップをハシゴした。時刻は夕方六時を回っている。合わせてみた水着が六十以上、ことごとくボツにしていた。

そして、十二店舗め。商店街のスポーツショップで、青は引き続き、水着を物色している。

「なかなか、納得のいくものがないわね……」

正直、紫乃は、なんでも似合うと思うのだが、それでは素材の素晴らしさに甘えている。少女らしい繊細さと可憐さは完璧に具えているとはいえ、盛り上がり欠ける体型と、活発さのかけらも感じさせない容姿で、勝負をかけるための攻めのコーディネートとなると、とたんに悩ましくなるのが事実だった。

紫乃は、腕組みして唸り始めた。

「あんまり派手なのはよくないのよ。パレオとか、柄物とかはちょ

つとね。素材の良さを活かすなら、やはりシンプルに限るわ。でも、ただ大胆に布を削ったところで、なんだか痛々しくなっちゃうのよねえ……。どうしたものかな……」

いつの間にか、一緒に頭を悩ませている紫乃だった。

「基本はモノトーンよね。そこは間違いない。色は……白か黒かなあ。初デートからいきなりキャピキャピやるより、清楚で押ししたほうがいいでしょ、キャラ的に。そこで、どうやって違いを生み出すか、それは困難な課題といえるわ。ああ、急ぎだったら、サイズがあるかどうか問題だわ。ちよつと、胸が、ねえ……」

青が、ぺたぺた、と自分の胸を触っていた。紫乃も、溜息を吐く。「もう、いつそスク水で……いやいや、相手の趣味も知れないうちから冒険しすぎだって。丸一日潰した意味がなんにもないし……あら？」

青が、棚の一角に目を留めていた。

たつたかたか、と早足で近付き、一着を手に取って、姿見の前に立った。

「お、おおっ？ こ、これは……」

くるり、くるり、と体をひねり、前から後ろから水着を合わせた。それから、店員に声をかける。二十分も青に気付いていなかった店員は、突然のソプラノに、びくり、と飛び跳ねた。

試着室に消えた青を見送って、紫乃は、脳裏に浮かぶ青の裸体と、その水着をコラーージュしてみた。たちまち、紫乃の顔が耳まで真っ赤になる。

「あれ……ッ？ なかなか、悪くないんじゃないかしらッ……？」

約三分後、青は試着室から出てきた。そのまま、レジに向かっていく。紫乃は、裂け目の入ったハンカチで、滂沱の涙を拭いた。

「いいわ……ッ。いいわよ青！ あなたの苦労は報われた！ その水着なら、どんな男だろうとイチコロのワンパンク、〇……」

シャドーボクシング中、紫乃は、数時間ぶりに我に返った。

「やっぱ」

青は、買い物袋を抱え、メールを打ちながら、心なしか、満足げに店を出た。

翌日、午前九時半。駅前立った騎馬像の前、示は、落ち着かない様子で青を待っていた。ちなみに、七時半には到着していた。

『明日、プール行ける？』

というメールが、土曜の夕方に届いたときには、無意識のうちに『行けます』と返信していたのだが、改めて考えてみれば、おおごと大事だった。

なにせ、プール。もちろん、水着だ。

慌ててショッピングモールに走り、自分の水着（当たり前障りのないトランクスタイル）は購入できたものの、問題は一個も解決していないのだ。

青の、水着姿なのだ。それが見たくて誘ったとか、そういう問題でもない。

（犯罪では……なかるうか……）

心の準備をしようにも、どんな水着を用意してくるやら、完全に想像の埒外だ。いや、色は黒ではないか、という気はしているのだが。なにしろ先日の印象が強い。

先日の　脳裏に浮かんだ不埒な回想を、示は頭を振って追い出した。

待ち合わせの時刻は、すでに過ぎている。多少の遅刻は気にしない質たちの示だが、相手が青となると、なにかと不安になってくる。

ポケットの中のチケットを握りしめて、不安をやり過こす示は、五分遅れで到着した青に、全く気付かなかった。

「待った？」

「ひ、ひええええッ！」

青は、名前通りにブルーのキャミソールに、カーディガンを羽織り、黒のデニムミニスカートという姿だった。足下は、これまた黒



のタイツに、足首までのブーツ。

初めて見る私服、それも初夏らしく爽やかで、なかなか似合っているそれにドギマギして、示はつい、正直に答えてしまった。

「に、二時間ほどー!」

「……ばかなの?」

のっけから、酷い会話だった。

「ば……馬鹿です……」

しゅん、と落ち込む示を、興味なさげに、青は無視した。

それから、カーデイガンの肩を、ちょい、とつまむ。

「……どう?」

「あ、あ、うん。その、いい……です、とつても」

「そう」

青は、ぷい、と顔を逸らした。

「じゃ、行こうか」

示を置いて、青は歩き出す。

「ま、待って……?」

そのとき、青の様子に、示は若干の違和感を覚えたのだが、それはまだ、形にならなかった。

「まあ、待ち合わせ場所に早く着いていたのはよしとしましょう」  
もちろん、紫乃は尾行してきていた。

今日は、後ろ髪を背中の中の辺りでゴムバンドで留めている。上はジャケットに薄手のインナー、下はグレーのデニムレギンス、足下はウェッジソールと、マニッシュながら垢抜けた装いだった。デートスポットだけに、地味な格好は却って目立つのだ。

結局、日本人離れた腰の高さだけで、充分すぎるほど人目を引いているのだが。

「くう……いつも可愛いけど、おめかししてるとなんて破壊力……」

! こんな状況でさえなければ……もうっ!」

騒音に紛れる会話を、なんとか聞き取ろうと耳を澄ましていると、

青が服の肩口をつまむのが目に入った。阿呆面を晒す男に、紫乃の殺意が放たれる。

「自分から服を褒めなかったわね!? ばっっつかじゃないのかしら! 基本がなってない!」

憤然としつつ、示の服装をチェックする紫乃だったが、チェックポイントすらろくにない。

「あつきた……。パーカー、ジーンズ、スニーカー、全部三千元未満じゃない。それで通るのは美人だけだっていうのよ。やる気があるわけ? せめて髪型くらい、普段と変えなさいよね、まったく!」

やる気はともかく、お洒落にかける予算が、示にはないのだった。青が食べるケーキの材料だって、安くないのだ。

「いや……根本的に、貧乏なのか。問題外ね」  
容赦がなかった。

「あ、動いた。移動は、バスよね……。まあ、ふつうに走って付いていけばいいか」

そんなこんなで、バスに揺られて、到着した。

入り口でチケットを提示し、更衣室で男女別に別れる。

男の着替えは一瞬だ。そそくさと更衣室を出て、示は、出口で青を待った。同じように女性陣を待っているらしい男たちが、期待に満ちて、周囲にたむろしている。

「だ、大丈夫かな……」

なにがあるはずもないが。落ち着かない気分のまま、じりじりとした時間が過ぎる。

鷹仁に忠告された通り、女の子の着替えは、神秘的なまでに長い。ガラス張りの天井を突き抜けて、初夏の日差しが降り注いでいた。示が、ちらり、と時計に目をやった瞬間だった。

「待った?」

「わっひゃあああああ!」

またしても、青がすぐ近くに　　あまりにも危険な距離に、出現していた。

青の水着は、予感の通りに黒く、そしてタイトだった。

競泳水着を基調とするシルエツトが、膨らみが皆無に近い体をびったりと包み込んで、流麗かつ繊細なボディラインを、過不足なく表現していた。

腰の左右に入った白いラインが、意外ほど女性らしい、くびれた腰を強調する。

青が、ぬるいコンクリを踏みしめて示の前を通り過ぎる。白日の下に晒される、小柄なりに長い手足が、袖や靴下がないだけで、二倍も三倍も目に沁みる。小さな素足の爪までも、綺麗に整えられている。

しかし、問題は、むしろ背中だった。

開いていた。

あまりにも、大胆に開いていた。

ここだけは普段と変わらないチョーカーの下で、肩に細いひもが引っかかっており、その下は、まさに、全開、といえた。

肩胛骨から背筋まで、なに一つ隠れたところはなく、お尻の直上までも、完全に剥き出しとなっていた。

ほんの少しでも胸肉があったなら、脇からはみ出していただろう。わずかでもお尻が盛り上がっていたら、その線が出てしまっていただろう。それでは、装いとして下品に過ぎる。

贅肉を完全に削ぎ落とした、巧緻かつ簡潔な肢体だからこそ成立する　危うく扇情的でありながら、どこまでも清楚な姿。

これ以上なくギリギリの、限界まで攻め抜いたこのコーディネートこそ、誰の力も借りず、青一人で成し遂げた、一つの成果だった。

「やつば……！」

青と入れ違いに着替えてきた紫乃は、通路の陰でうずくまった。想像通りに危険であり、リアルの破壊力はそれ以上だった。

ぶるぶる震えながら、青の後ろ姿を凝視する。

ちなみに、紫乃の水着は、布面積少なめの、真っ赤なビキニだった。伸びやかな手足と、メリハリのある体によく映える。

なにをどう考えても、目立ちすぎ以外のなにものでもなかったが、青との“デート”のために用意した水着を無駄にできず、つついっ持つてきてしまったのだった。

「ま、まずいわよこれ……。この場で押し倒されてもおかしくないわ……！」

一番それをやらかしそうなのは、紫乃自身だったが。

「ぼかーん、と青の後ろ姿を眺める示に、青が振り返った。

「どうしたの？」

示は、それでも呆けたままだった。青は、一瞬だけ口ごもり、繰り返す。

「どうしたの？」

それで、示はようやく我に返った。

「あ？ あ、ななな、なんでもないです！」

「……そう」

その声は、真夏を先取りしたような装いに似合わず、淡く響いた。また黙って歩き出す青を、示は慌てて追いかける。

「ま、待って！」

「……で、なにをしてるのかしらね……」

なんとかかまともに戻った紫乃は、引き続き、二人の行動を観察していた。

青と示は、概ね、なにもしていなかった。

流れるプールで、一緒にぶかぶか浮いていたり、示が披露する雑な泳ぎを、青がぼーっと眺めていたり。

青はカナヅチではないし、むしろ泳ぎは上手いのだが、いかんせん体力がないので、相手が紫乃でもこんな感じではある。

水泳の授業でもなし、なにも一生懸命泳ぐ必要はないが、この二人、ろくに会話を交わす様子もない。ジューズやらフランクやらを買ってくるのかなどに、ぼつり、ぼつり、と口を開くくらいだ。

「なにか、こう……なにかあるでしょ！ もうちよつと！」

一方、紫乃は、近くの百メートルプールで、猛然とクロールすること、モヤモヤを発散していた。

あまりの激しさに、すわ国体選手か、いや人魚か、いや鮫か、と噂されている。ついでに、一部男性陣からは、ブラが脱げるのを期待されていた。

「ぶはっ」

期待を裏切りつつ、紫乃はかすかに上がった息を整え、改めてデート中の二人を見やる。

青は、無表情でチエアに横たわり、示は、戸惑ったような、なんだけがよくわからない表情でふらふらしていた。

「……まったくもう！」

紫乃は、バタフライを始めた。

チエアに寝そべった青を、隅から隅までねつとりぐつちやり眺め回したい気持ちをどうにか抑え、示は青を観察した。

やはり、様子がおかしい気がするのだ。無表情かつ無気力に見えるのはいつも通り。しかし、どうも目に力がなく、ほんとうに、ぼーっとしているようだ。フランクを買って帰ってきた示にも反応しない。

ほんのわずかな違いが、だからこそ気になって、示の背を押した。青の目に、片手をかぶせる。

初めて触れる青の肌は、すべすべで、温かった。

「示………？」

青が、目隠しされたまま、ごく小さな声を出す。

「うん」

「そこに、いる？」

「うん、いるよ」

「そう……」

青は、それつきり、黙り込んだ。

示は、今日初めて、微笑みを浮かべた。

遠い潮騒のような寝息を、青は恋人に聞かせていた。

「はあああああーっ？ 信じらんない！」

バタフライで千メートルを泳ぎきった紫乃は、改めて二人の様子を伺うと、青は、熟睡していた。

「どういうこと……？ デートで彼女を熟睡させちゃうって、どお  
おおおいうことよ……？ これは酷い……。酷すぎる初デートの思  
い出……。ここ、この落とし前、どうやって」

当然のように矛先を示だけに向ける紫乃だったが、ふと険をゆる  
めた。

「まあいいわ。さすがに、これで青も愛想尽かすでしょ。ありえな  
いもんね、退屈すぎて寝ちゃうデートなんて。映画じゃないのよ、  
プールよ、プール。ははーん、これは、終わったわね。はっはーん  
？」

紫乃は、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「ま、どうせ、なにをする度胸もないでしょう」

今度のクロールは、優美な航跡を描いた。

空がオレンジ色に染まって、閉園のアナウンスが鳴る頃、青は目  
を開いた。体には、タオルがかけられていた。

身を起こす青を見て、示は声をかけた。

「おはよう」

「……おはよう」

青は、時計を見た。紛うことなき、タイムアップだった。

示は、にへっ、と気弱げな笑みを浮かべる。

「帰ろうか」

「……………うん」

青は、小さく溜息を吐いた。

それぞれに着替え。

込み合ったバスに乗り。

最後に、なにごとか言い交わして、駅前で、二人は別れた。

紫乃はそれを、遠くから見張っている。

「んふふ？ もうーこれは、ナイわね。終わった終わった！ ようやく安心できるわね！ さあって！ あとは、青を家まで見送って終わり！ いやー？ 長かったわー？ 退屈なデートに付き合わせて……………んっふ？ 青はちょっとかわいそうだけど、自業自得ね」言葉通り、紫乃は、青の部屋までついていき、明かりが点いたのを確認して、その場をあとにした。

数十分後、青は、再び家を出た。

永久の遠さと刹那の近さ・前（後書き）

初デート・昏編。 童話・伝説モチーフシリーズ第三弾ですが、その登場は後編に。

前回のエピソードでも、似たような作戦準備があったのでしよう。女の子は女の子で忙しいのです。



永久の遠さと刹那の近さ・後（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## 永久の遠さと刹那の近さ・後

「一緒に、行ってほしいところが、あるんだ」

そう、示は、別れる直前、青に言ったのだ。暖かく、肌を出さないような格好で、とも。

ずいぶんと長くなった六月の太陽も、すっかりと落ちた午後七時。青の服装は、長袖のジャンパーの下に七分袖のカットソー、タイトなチノパンにスニーカーで、夏用の手袋とニット帽まで身に付けていた。もちろん、お決まりのチョーカーも。

示は、パーカーの代わりにがっちりしたジャケットを羽織って、それ以外は、昼と変わらない格好だった。

待ち合わせ場所で、青に声をかけられても、珍しく示は驚かなかった。

「待った？」

「ううん……。今、来たところ」

ようやくの、それらしい会話。といっても、今回はほんとうに来たばかりだったが。

「……行こうか？」

昼とは違って、示が前を歩いた。確信に満ちた、それでいて確かめるような足取りに、青は大人しく付いていく。

道のりは、無駄が多かった。裏道を通って遠回り、ぐねぐね曲がった進路を往き、坂を上っては下り、人目を避けて忍ぶように二人は歩いた。

そして、林に開けた獣道に突き当たる。

「ごめん、道がきついかも……」

「別にいい」

示が初めて聞くような、素直すぎるほどの響きだった。

「うん……」

示は、逡巡の末、片手を差し出す。

ややあつて。そこに、手袋をした小さな手が重なった。

二人は、獣道に踏み込んだ。枝葉の庇ひさしをくぐり、根を乗り越えて進んでゆく。示は、枝を払い、慎重に足下を探りつつ、青の手を引いた。ゆっくりと。思いのほか力強く。青は、肌を傷付けたり、転んだりすることを、ほとんど心配しなくてよかった。

誰の目にも付かず、どこかに辿り着くためよりも、なにかに向かうための時間を共有するために、選ばれたような道だった。

会話もなく。目も合わせず。土と木のおいだけを共にして。

唐突に明るい場所に出る。丘の頂上だった。右手には伐り開かれた路地がある。もつと楽に来る方法はいくらでもあるのだろう。そうしないことに意味があるのかもしれない。

満月と星が、木立に切り取られて、星図めいてよく映える。

朽ちた木杭がいくつつか、頭だけを見せている。

「おつかれさま」

示は、にへっ、と気弱げに微笑む。

「うん」

答えるともなしにつばやくと、青は空を見上げた。

「座ろうか」

示が抱えてきたビニールシートに、二人並んで腰を下ろす。高校生が並んで座るには、それは少し小さかった。真っ赤になった示の頬を、星の光が青白く照らす。

「そんなに、高いわけでもないんだけど……けっこつ、星がきれいに見えるんだ」

ベッドタウンの初夏、しかも満月となれば、満天の星空とはいかない。頭上の観測窓から見える星の数は、二人の両手で数え上げられる程度のもの。

「天の川がね……あのへんに、いい感じにかかるんだよ」

一心に夜空を見上げていた青の口から、不意に言葉がこぼれる。

「七夕に」

「……うん」

「来たこと、あるの？」

今度は、答えるのに時間がかかった。

「うん」

「そう」

「秘密基地、だったんだ。子供のころ。十年くらい前」

その言葉からは、埃っぽい思い出のおいがした。

それは、四方に穿たれた杭の跡 “二人の王国” の残骸だけでなく、ここに至るまでの道程の全てから、長い時間の重みを伴って、炊いた香のように立ち上っていた。

「今は、おれしか知らないよ」

示は、青の横顔に笑いかけた。

三途の川が、天の川。

もう織姫は、やってこない。

夜空に目を戻しても、今はアルタイルもベガもない。

「そう」

それきり、二人とも口をつぐむ。

胸苦しく、穏やかな沈黙の中、青の肩が、示の肩に触れた。

ニット帽をかぶった頭が、こてん、ともたせかけられる。

示の心臓が大きく脈打って、それから、平常より少し上のリズムを刻む。

こんなにも近くにいるのに、触れ合う部分はほんの少し。だから示は、恐ろしい衝動に狂うことなく、ただ、青のことが好きでいられた。

天の川が見られないね、と青が言い。

次は見られるよ、と示が言った。

二人は、ずいぶんと長い間、そのままだった。

携帯電話で、腹が減ったと辿が騒ぐので、そろそろお開きにしよう、ということになった。

示は、帰り道に遊歩道を選んだ。青も、素直に従った。

「う、ごめんね、遠くまで付き合わせちゃって……」

「それは、いい」

恋人の手を握りながら、青が答える。

「その、疲れたり、してるのかなーと、思ってた……」

じつとりと手のひらに汗をかきながら（そして、手袋のおかげで、それが相手に伝わらないことに少しだけ安堵しながら）示は続けた。表面上は平常に戻っている青の横顔から、なにかのサインを見出そうとする。

まつげが長くて、伏し目がちな表情が、ぞくつとするほど色づippedかった。

「いやいやいや……」

すぐ色ボケる頭を振って反省を促す示を、青は横目で一瞥する。

ふっ、と小さく息を吐いた。

「今日はすこし、体調が悪かった」

「ああ、ごめんね、ほんと、無理させて……」

「それは、いい」

青は、強調するように、同じ台詞を繰り返す。

「ただの寝不足だし」

そう聞いて、示は少し安心した。

「そうだったんだ……テレビでも観てたの？」

そう言ってみるものの、示にとっては、未だに青の私生活は謎だ。

「物音がうるさくて、寝付けなかった」

「今夜は……大丈夫？」

「大丈夫。運動したし」

「うん……」

それでも心配げな示から目を逸らし、青は言った。

「あのね」

「うん」

「プール」

前を見据えたまま、示の手を、少しだけ強く握る。

「退屈じゃ……なかつたよ」

「……うん」

熟睡していたことを言っているらしかった。示としては、むしろ、寝顔が見られて嬉しかったくらいなのだが。

安心してくれた、ということだろうし。

「示は？」

「え？ あ、もちろん、おれも」

「ぼくの水着、どうだった……？」

「あ、み、みじゅ、水着ね、そ、それは、もう……」

すぐ手に取れる浅さに置いてある記憶が、速やかに示の頬を真っ赤に染めた。

髪先から滴る水滴。

艶めかしく浮き上がるボディライン。

太陽と照明混じりの光の下、青白く映える背中。

「素晴らしい……としか……」

「そう」

素っ気なく。

聞きようによっては、照れ隠しめいて。

青は、ほんの少し、歩調を早めた。

青の、六畳のアパートに、水音が響く。

シャワーで軽く汚れを落とし、青は、素肌を晒したまま狭い浴室を出る。ぺたぺたと、床にほんのり濡れた足跡を残して歩きながら、水滴を拭う。

バスタオルを物干しにかけると、髪もろくに乾かないまま、青は姿見の前に立った。

一糸まとわぬ、完全な裸身が、鏡に映る。

いや、漆黒のチョーカーだけが、片腕に引っかけられていた。青

は、それを手早く身につける。首筋だけが、シルクの生地に覆われた。

照明が落とされ、そのままベッドに潜り込むと、ほどなく、穏やかな寝息が聞こえてくる。

しばし、青の寝息以外、なにも聞こえない時間が流れた。

部屋の主がすっかり寝入ったことを確信したようなタイミングで、かすかな羽撃きの音が起こった。

どこに隠れていたのか、それはベッドの上を慎重に周回してから、そっと毛布の上　青の胸のあたりに着陸した。

そして、青の顔を覗き込もうとする。

瞬間、自然に布団から出されていた青の右手が、一切の予備動作なく閃くように動き、有無を言わず闖入者を捕らえていた。

きい、きい、と哀れっぽい鳴き声を上げたのは、小さな蝙蝠だ。

上体を起こした青は、晒された胸先を隠すこともなく、眠そうに蝙蝠を見つめた。蝙蝠は、イタズラを誤魔化す子供のように、せわしく首を回転させる。

あくびを一つ。

青は、ぽい、と窓から蝙蝠を放ち、しっかりと施錠すると、今度こそ、安らかな眠りについた。

投げ捨てられた蝙蝠は、未練がましく窓にまとわりつき、それから、アパートの周りをぐるぐると飛び回った。

ついには、諦めたのか、真っ黒な夜空に登っていき、どこかを目指して、飛び去った。

## 永久の遠さと刹那の近さ・後（後書き）

初デート・夜編でした。今回のモチーフは、七夕伝説です。

本編に登場しないのでここに書いておきますと、示くんの幼馴染の少女の名は、茜ちゃんといいます。作中の色々な出来事に関わっている人物です。

ここまでが序盤／日常編。ようやく紫乃ちゃんのウォーミングアップが終了です。



エスケイプ・フロム・ホーリーランド(前書き)

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## エスケイプ・フロム・ホーリーランド

紫乃は、時刻を確認した。午前八時を回ったところ。

気が付けば、教室にいた。

いや。わかつている。テレポーション瞬間移動でも、タイムトラベル時間旅行でも、ましてや記

憶喪失でもない。わかつてはいる。ただの、現実逃避なのだ。

青が座るはずの、紫乃の真後ろの席は、空になっている。

いやいや。わかつているのだ。いつも青と一緒に登校するはずの

紫乃自身が、一人でやってきたのだから、青がそこにいるはずもない。

ほんの、一・二時間前までは、一緒にいたのに。

いられたのに。

どうしてこうなった、と紫乃は思う。

青の寝顔に幸せをもらいながら、朝食の支度をしたところまでは、まったくもっていつも通りの朝だった。そう、それこそは、“あの男”に浸食されていない、紫乃に残された、最後の樂園だった。

いやいやいや。それだつてわかつている。あの一言がまずかった。まずかったけれども、言わずにはいられなかったのだ。

紫乃は、いつも通り、青と朝食を取っていた。

青は、出されたものに対して、おいしいだの、辛いだのしょっぱいだの、感想を述べることはほとんどない。それは、興味がないからではなく、文句がないからだ、と、紫乃は知っていた。

今でこそ、店を持てる腕前の紫乃ではあるが、最初から達人だったわけでもない。最初は、微妙な食卓を拵えては、青に微妙な顔をされたものだ。

淡々と料理を口に運ぶ青を見て、紫乃は思う。自分は強くなった、と。

まだ、大人じゃないし、迷っているけれど、沢山のことが、できるようになった。

すべて、青のために。

「シノ」

「なに、青」

「見てたでしょ、ぼくたちのデート」

なのに青は、“あの男”の話をするのだ。

もちろん見ていた。気付かれていたとは意外だが　あの結果は意外でもなんでもない。

あの程度の男に、青を満足させられるはずがない。

自分は、ちがう。  
なのに。

「ええ。あまり、楽しんでたようには見えなかったわね」

「そう。そう見えたんだ」

どうでもいい、と。自分がわかっていればいい、とでも言いたげに。

なにもかもがおかしかった。終わったはずのものが、紫乃の知らないところで続いていて、青と紫乃の世界が区切られて、紫乃が入り込めない場所ができていく。

紫乃は、青が心配で。

心配すぎて　青のことすら目に入らなくて。

「いいよ。昨日のことは」

ああ　そうだ。最初に、許せないことを言ったのは、青のほうだ。

「ぼくと示だけの　秘密だからね」  
越えている。

紫乃が許せる範囲を　紫乃が青を護りきれぬ領域を、飛び越えている。

「ねえ、青、わかっているかしら。五歳や十歳の子供じゃないのよ？」

「そうだね。そろそろ、パパやママやお姉ちゃんに言えないことが、  
できてもいい頃合かな」

そう、このときだ。

スイッチが、入った。

秘密を抱え込む苦しみも知らないくせに！

「ねえ、青」

紫乃は、自分の顔が、自動的に笑みに象られるのを感じる。

それは、いわゆる“魔が差した”という現象だった。確かに自分の意志だったのに、制御不能で、後悔しか残さないとわかつているのに、どこか望み通りでもあった。

「もういいでしょう？」

「なにが？」

青が、紫乃を見ていた。

「あなたが危ないし、飽きたでしょう？ もうやめましょう」

言葉が、口から逃げ出した。

「あの男で 遊ぶのは」

（ ああ、青 ）

そのときの青の表情は、彼女が一週間にしゃべる言葉を全部合わせたよりも、ずっとずっと雄弁だった。

黒耀石の瞳に、氷点下の炎が、あかあかと燃えている。

（ あなたはどうして、そんな顔ですら ）

透けるように美しく、水底に隠されたものを、あからさまに覗かせる。

ゾクゾクするほど。

「シノは……どうして……」

青は顔を伏せ、そして玄関を指さした。

「出て行って」

その後、教室に辿り着いて腰を下ろすまで、つまり、たった今の

今まで、紫乃は放心していたわけだ。習慣的に鞆から荷物を取り出しつつ、紫乃は思う。

(どうして、こんなことに……)

十年前、母親が、両親を喪った青を連れて来てから、青は紫乃のすべてだった。

青との出会いは劇的で、青との生活は幸福だった。青のために費す人生は充実していたし、その時々<sup>時々</sup>の限界の中で、やれることはすべてやってきた。

ずっと、ずっと、二人で生きていけると思っていた。

なのに、教室に、青の姿はない。

そのとき青は、校舎裏にいて、示を呼び出していたからだ。

青に呼び出されてロクな目に遭ったことのないはずの示だが、非常にイイ感じになったデートの余韻によるものか、メールを見るや否や、ふわふわと飛ぶような足取りで駆けつけてきた。

「お、おはよう、逆咲さん」

そこで示は、おや、と思う。

いつもは感情という感情を一切表に出さない青が、しっかと目を見開き、唇を噛み締め、見るも明らかかな決意の表情で、彼を待ち受けていたからだ。

それから青が口にしたのは、二人が付き合い始めてから、これまで、一度たりとも聞かれたことのない言葉だった。

「お願い」

## エスケイプ・フロム・ホーリーランド（後書き）

『竹取物語』の「五つの試練」は続いています。童話・伝説モチーフは終了です。都合四つ目の試練は、麻倉紫乃攻略。あるいは、「お義父さん、娘さんを僕にください！」

サブタイトルは、某ヤンキー狩りと、関係ないこともないです。

**R o u n d 1 女子御手洗攻防戦・前（前書き）**

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## Round 1 女子御手洗攻防戦・前

担任教諭から、青の欠席の理由を尋ねられた紫乃は、大きな屈辱を伴って答えた。

「わかりません」

一限目の休み時間になっても、青は教室に姿を見せなかった。

紫乃は考える。今日は来ないのだろうか。

紫乃は考える。明日も来ないのだろうか。

紫乃は考える。青は戻ってくるのだろうか。

紫乃は考える。これ以上考えてはいけない。

紫乃はそれでも考える。閉鎖された脳の中で、圧縮された恐怖が渦を巻く。

紫乃は考える。もしかして、彼女は、青は、私を、私より。

ドアが開く音が、終わりのない思考を中断した。有象無象のエキストラでは、紫乃の頭に入り込めない。それができる登場人物は、たった二人しかいなかった。

そのうちの一人は、すなわち、紫乃が求める都合のいい救いは、今日現れることはない。

しかして、現れた人物は、紫乃にとっての、都合のいい敵だった。隣のクラスに入るといって、たったそれだけの行為にオドオドと躊躇を表しつつも、その脚を止めることはなく、明確な目的意識を伴って紫乃に向かってくる。

たちまちのうちに、紫乃の恐怖は怒りに塗りつぶされる。

東堂示が、顔に決意を滲ませて、机に視線を落とす紫乃の前に立った。

「……あの、」

示が切り出した瞬間、紫乃はバネ仕掛けの勢いで立ち上がった。相手の一瞬の戸惑いを衝いて、すたすたとその場から歩き去る。

示は慌ててあとを追う。



「ま、待つ」

その目の前で、ぴしゃり、とドアが閉まる。廊下に身を乗り出した頃には、紫乃はすでに手の届かない距離にいる。

「あ、麻倉さん！」

さらに速度を増す紫乃を追いかける。すたすたすたと、氷の上を滑るように加速していく紫乃を見て、示はついに走り出した。

「待ってよ、あさく……」

示は、目の前で閉ざされ、勢いのままにぶらぶらと揺れるドアを、今度は開けることができなかった。

紫乃は、女子トイレに入ってしまった。

一息吐いた紫乃は、パンツを足首まで下ろすと、ひざ丈のスカートを両手で丁寧<sup>ニゼン</sup>に保持し、小用を足し始めた。

“あの男”を撒くために入ったトイレではあったが、ふと気が緩んだ瞬間に、蒸発していた尿意が蘇ったのだ。

仮に紫乃が、示が女装して女子更衣室に侵入したことを知っていたら、シヨーツを脱ぐことすらできなかっただろうが……ともあれ、いるだけで心をかき乱す“あの男”から離れて、紫乃は安堵した。

機械的に紙を使い、シヨーツを穿き、ハンカチを啜<sup>すす</sup>えて手を洗い、軽く身繕いをしてから、廊下に出ようとしたとき、取っ手を握った手が止まった。

紫乃は、人より優れた感覚を、ドアの向こうに集中する。

女子トイレの前に、岩のように居座っている人間の気配が一つ。

どう考えても、示だった。

思わず奥の壁際までバックステップする紫乃。

「この、変態が……っ！」

シェルター避難壕<sup>シェルター</sup>だったはずの女子トイレが、脱出不能の棺桶と化していた。袋の鼠、ならぬ、トイレの紫乃さん。

「ていうか、青まで変な目で見られたらどうしてくれるのよ……っ！」  
予鈴が鳴った。紫乃は、壁に張り付いたまま動けない。示は、動

かない。トイレの中までは踏み込んでこない代わりに、紫乃も相手をどかすことができない。膠着状態だった。

腕時計をちらりと見る。残り三分。授業が始まれば、さすがに示は帰るだろう。

しかし。

（この麻倉紫乃が、こんなところに押し込められて、身動きも取れないまま、相手が引き上げるのを待っただけですって!?!）

紫乃は、ゆっくりと息を吐き、首をコキコキ慣らし、それから、窓際に移動した。窓を開ける。風が、細いリボンで括られた長髪をなびかせる。

二年生の教室は三階にある。地面までの高さは十メートル弱。空気抵抗を考えなければ、自由落下時間は約一・四秒。時速五十キロメートル弱でコンタクト。

特に問題はない。紫乃は、窓から宙に踏み出した。

脚を振る。前方宙返り。校舎の白壁が高速で目の前を通り過ぎる。ピンクのショーツが大回転。地上メートルで背筋を伸ばし、つま先から衝突。足首、膝、股間、腰と、各関節に衝撃を分散する。さしたる音も立てず着地成功。スカートがお尻に覆い被さると同時、紫乃はすつくと立ち上がり、両手を平行に伸ばした。

十．、十．、十．、十．。

中庭でサッカーボールを蹴っていた男子共の表情が、採点を物語っていた。ちなみに彼ら、新体操の採点法が変わったのを知らないらしい。オッサン臭い高校生だった。

ばさり、と長髪をかき上げて。

紫乃は、努めて落ち着いた歩調で、昇降口に回り、そのへんにあった雑巾で靴底を拭い、滑るように廊下を抜け、階段を登り、無事、教室に帰り着いた。

「……あつ、嘘っ……あれ　ッ!?!」

示の叫び声を聞きつつ、紫乃は優等生らしく着席し、教科書とノートを取り出した。

一限目休み時間

ひとまず、勝者、麻倉紫乃。

## Round 1 女子御手洗攻防戦・前（後書き）

この章では一部あたりの文量が少ないです。  
サブタイトルは、蓬萊学園シリーズより。

**R o u n d 2 女子御手洗攻防戦・後（前書き）**

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## Round 2 女子御手洗攻防戦・後

(そもそも)

紫乃は考える。“あの男”は、どうして。青に興味を持ったのか、と。

まずはそこが問題なのだ。青は確かに(紫乃が思うには、彼女自身よりもずっと上の)美少女だが、それでも、誰か異性に発見されたことは、これまで一度もない。

青に 性的な意味で 目を付けることは、普通の人間には不可能だ。それは、趣味嗜好の問題で片付けられるレベルの特性ではない。

青が告白に応えたこと以上に、“あの男”が青に告白したことが、不自然極まる。

(お母様は、どうして“あの男”を放置しているのか) 確かめる必要がある。知る必要がある。青を護るためには、そうする必要はある。

しかし、それらすべてが 余計な世話に過ぎなかったとしたら？ なんと答えも出ないまま、二限目が終わる。

青はどうしているだろうか。

チャイムが鳴る。紫乃は、すぐに席を立った。まっすぐ教室のドアに向かう。外からドアが開かれた。

東堂示がそこにいた。

「あさ」

紫乃はドアを閉めようとする。示は抵抗する。さらに力を込める。示は隙間に左足を差し込んだ。一切構わず、思いつ切りドアを閉めた。

「くらっっ」

示がひるんだ隙に、紫乃は逆にドアを開けた。バランスを崩した示の胸を軽く突き、よろけて後退した示の襟首を掴んだ。

「待って、話を」

左足を払う。サンドイッチ直後に足払い、ただでも滑りやすい床で、示は踏ん張れずにバランスを崩した。そこを片手で振り回し、体を入れ替える。片足立ちの示がよたよたする隙に、紫乃は猛然とダッシュした。

「麻倉さんっ！」

示も紫乃の向かう先はわかっている。そうはさせじと追いかけるが、猛烈に駆け回る姿から、一部で『南高のイナズマ』と呼ばれる紫乃が相手だ。崩れた体勢で、追いつけるはずもない。

あつという間に、紫乃は女子トイレに逃げ込んだ。

「ああああ……」

情けない声を漏らした示だが、顔を引き締めると、両手で頬を張る。

パンパン、という音を聞いた紫乃は、示に諦めるつもりがないことを理解した。

「往生際の悪い……」

つぶやいた紫乃は、ふと、鏡を見る。

一人きりの少女が映っていた。

示は、女子トイレの前で、気弱げな顔で仁王立ち、という器用な状態を保ちつつ、ひたすら、紫乃が出てくるのを待っていた。

なんとしても、紫乃と話すつもりだった。伝えなければならぬことがあった。

紫乃には、きつと迷惑で 端から見れば、不審者だけでも。

「あ、あのう……」

「ひゃいっ!？」

三つ編み、眼鏡の見知らぬ女子が、手と足をそれぞれにもじつかせ、おずおずと話しかけてきて、示は跳び上がった。

「そこにいられると、とっても、入りづらんだけど……」

「う、う……」

それは、そうだろう。示だって、男子トイレの前に女子が仁王立ちしていたら、さすがにちよつと、入りづらい。

全くもって、言い訳も申し開きもないのだが、しかし、今は退けない理由がある。そこに紫乃がいるのだから。

「よく……わかります」

示は、重々しく頷いた。

「だ、だよ。だから、ちよつとそこを……」

「しかし」

苦渋の表情で、内股気味に震える女子の訴えを遮る。

「今は、ここを動くわけには、いかないんです」

「な、なんでえ……？」

「待っている人が、いるから」

聞く者の涙を誘うような、情感のこもった台詞だったが、こんな残念な状況では、違う意味で涙目になるばかりだった。

「じよ、女子トイレの前で？」

「じよ、女子トイレの前で……。だ、だから、気にしないで、通ってください。後ろ、向いてるから……」

「そ、そういう問題じゃあ……」

そういう問題ではないのだが、実際問題として我慢も限界だったのか、不幸な女生徒は、顔を赤らめながらも、トイレに駆け込んでいった。

洗面台に腰掛けた紫乃は、脇目もふらずに個室に駆け込む女子を見て、口もとを笑みに釣り上げていた。彼女に、投げキッスの一つもしたい気分だった。

そう。なにも、自分が直接“あの男”を追い払わなくてもいいのだ。

状況はすでに構築されている。手駒もある。

紫乃の携帯電話から、反撃を告げるメールが放たれる。



示は、見知らぬ女子の心の平安を祈りつつ、相変わらず、おろおろと立ちはだかつていた。

先の休み時間のように、いつの間にか抜けられてしまわないように、貫かんばかりの眼光で、脂汗を流しながら、ドアを睨み付ける。過剰なまでの集中力だった。

そのために、今度は、かけられた声に気付くのが遅れた。

「ちよつと、東堂！ 無視しないでよ！」

「へ？ あ、あつ、ごつ、ごめんなさつ」

そして、新たに現れた女生徒の腕章を見て硬直する。

『風紀委員』。

「あのねー、なんの用事か知らないけど、そこに突っ立ってるのやめてくれない？ 苦情が来てるのよ」

「わつ、わわつ」

もちろん紫乃がチクつたのだが、示にそれを知る術すべはない。

「それとも、なに？ そういうシユミでもあるわけ？」

「そつ、そのようなことは、決して！」

「じゃあどいてよ」

「そ、それは、そういうわけには……」

風紀委員の口もとが、ひくひく、と引き攣った。

「あーもー、めんどくさくなってきちやったなー。ぶつ飛ばしちゃうかなー内申に響くけどいっかなーやっちゃおっかなー」

示が、怯えながら 一歩も退かず、目を閉じ、歯を食いしばった、そのときだった。

「ちーつす少年！ やってるかい！」

背後からどやしつけられて、前につんのめりそうになる。

「し 姿子さん！」

「よつ！ で、なんで怒られてんだい？」

示の肩に手を回しつつ、ちらりと視線を寄越す姿子に、風紀委員は答える。

「男子の分際でこんなところに突っ立ってるからです！」

「そらあんだ、あたしがここに呼び出したからさね」

姿子は、至極真面目な顔で、平然と出任せをのたまった。

「え、あ、姿子さ」

「んで、話つつうのがさあ……」

示の言葉を遮って、姿子は弟分の耳に口を寄せて、囁いた。

「ちよいと水臭いんじゃないのかい？ もっとお姉さんに頼りなつて。ここは、あたしらが助太刀してやるよ」

目をぱちくりさせる示に、姿子は、バチン、とウインクを返す。

「よーし、確かに伝えたからね！」

もひとつ、示をバシンと叩き、姿子は、風紀委員に向き合った。

「つつわけなんだよ、悪かったね？ そうだ、なんか奢るからさ、勘弁しとくんなよ、な？ な？」

「ちよ、ちよつと先輩？ あーもういーです、いーですってばもうー！」

「まあまあまあ！ 堅いことは言いつこなしてな？ 一杯付き合つとくれよ。それとも、あたしの酒が飲めんてかー！」

「時代遅れのパワハラ上司か！ だいたい学校「いんたう」にアルコール売つてるわけないでしょーが！」

「そらあ、保健室にやエチル、理科室にやメチルつてな」

「死ぬわ！ アンタちゃんと化学取つてんの！？」

ガーガー言い合いつつ、なし崩しに風紀委員を引きずっていった姿子に、示は、深々と頭を下げた。

その脇を、不審げな顔で、すんでのところで決壊を免れた、三つ編み眼鏡が通り過ぎる。

「ちイツ……！！」

紫乃は舌打ちした。相手も手駒を動かしてくるとは想定外 いや、聞けば、勝手に動いたということだが。

「いつまでも、幸運が続くと思うな……。あんたに友達が少ないのは知っているわよ……！！」

示だつて、全く友達がない紫乃に言われたくはないだろうが、ともあれ。

「次弾は　すでに、放たれている」

着弾の音をドア越しに聞き、紫乃は、優雅に脚を組み替えた。洗面台の上で。

「東堂、なにしてんだ」

「す、鈴木、先生……！」

示の背に、戦慄が走る。

この四十がらみの男は、その面倒見の良さと、時代錯誤の鉄拳制裁で知られている。ちなみに、剣道柔道空手、合計十五段。生活指導担当にして、柔道部顧問である。尊敬に値する先生ではあるが、今はまずい。

「女子がなあ、困ってるっていうんで、俺のところに来てるんだよ」  
当然、これまた紫乃の差し金だ。

「お前に邪な気持ちがあると思ってるわけではないが、そこはどいてもらうぞ」

「くうっ……」

示は呻いた。この生真面目かつ昔気質な男に通用するような、気の利いた言い訳など、示の頭から出てくるはずもなかった。

「さあ、東堂」

ならば、もとより　正面突破以外、道はない。

「……いいえ、先生。おれは今、ここから動くわけにはいきません」  
「なぜだ。待ち合わせか？」

断固とした口調に、示は事実のみで答える。

「勝手に、待っています」

「誰をだ」

「この、中にいる人をです」

鈴木教諭は、難しい顔になった。

「それは、セクハラだろう。逆の立場で考えてみる」

「そうかもしれ……あ、いや、完全に、そうですが……」

「じゃあ、やめろ」

「やめ、ません」

吹き付けるプレッシャーに、示は耐える。

「緊急の用件なのか」

「緊急、では、ないのかもしれませんが……。重要な、つまり、おれと、彼女と、おれの、その、彼女　三人にとって、重要な用件です」

「　お前、彼女いたのか」

「自分でも……信じられない、ことながら……」

あまりの意外さに、話がずれていた。

「いや、まあそれはいい。なら、機会を改めろ」

「それも、できません」

いよいよ無茶な言い分だが、示は続ける。本心だった。

「今日が、今が、話を聞いてもらえる、最後の機会かもしれないんです」

「転校でもするのか」

「おれは、しません。彼女も、たぶん……でも、わからない、ですから。なにがあるか」

命が木っ端同然の兵士じみた声色で、当然のように、示は言う。

「おれの、できる限り……待ち続けます」

鈴木教諭は、溜息を吐いた。

「子供なら、明日できることは明日やれ。悪いが、どかすぞ」

そう言い、示の腕を掴んで、引っ張った。

示は、動かない。

「ム……」

さらに力を込めても、示は、根が生えたように動かない。やむを得ず、制服の襟を取って、全力で引っ張った。

「ぐう……っ……！」

示は、脚を踏ん張って、岩のように、一歩たりとも動かなかつた。

「東堂、お前……」

傍若無人。示は、女子トイレのドアを見据え、中の人間に宣言するよつに、呟いた。

「……おれは、諦めない……！」

「頭おかしいんじゃないの、こいつ……！」

紫乃は、携帯電話を、ポケットに突っ込んだ。

認めざるを得なかった。紫乃以外の誰が現れようと、示は決して動かない。

ドアの前からどかすこともできはしない、と。

「……もういいッ」

向こうから入ってくることはない以上、わざわざ正面から出ていかなければいいだけの話だ。紫乃は、窓の下を覗き込む。

「んなツ……？」

眼下では、鷹仁が、壁にもたれて、素知らぬ顔で居眠りのフリなんぞをしていた。

逃走経路を読まれたのか。確かに、常人でも、壁を伝って降りるくらい、できないこともないだろうが、そんな薄い可能性のために、わざわざ張り込んでいるとは。

「どいつも、こいつも……！」

そんなに、そんなに、**“あの男”**がいいのか。

(青、も……？)

休み時間が終わりにかけても、頑として動かない示を前に、鈴木教諭は、通りすがりの女生徒を捕まえて、念のため、中を確認させることにした。

閉ざされたドアが開く。

女生徒は、すぐに戻ってきた。

「中、誰もいませんよー？」

「えええつ、嘘、また……？」

示は、がっくりと肩を落とす。

「お前、幽霊でも待ってたのか？」

鈴木教諭は、首を傾げた。

そして紫乃は、屋上にいた。

そこまで、追い詰められていた。

「このままじゃ……」

二限目休み時間 麻倉紫乃、辛勝。

## Round 2 女子御手洗攻防戦・後（後書き）

限界ギリギリな少女は、執筆中めがほむと呼ばれていました。ちなみに、姿子さんのはるっこ先輩と呼ばれていました。眼鏡っ娘は正義決壊したためがほむと恋が始まるルートが、構想されていたとかいなかったとか。

### Round3 ダックイン(前書き)

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。



### Round 3 ダックイン

紫乃は、チャイムと同時に教室に滑り込んだ。  
もついいだらう、と思った。  
我慢しなくても。

授業の終了とともに、紫乃は席を立ち、教室を出た。  
廊下で、懲りずに走ってくる示を迎える。

「あ、麻倉さん……？」

逃げも隠れもせず、堂々と現れた紫乃に、示は困惑する。

紫乃は、顔面に神経を張り巡らせると 実に自然に、申し訳な  
さそうな笑顔を作った。

「ごめんなさい」

「えっ？ えっ？」

戸惑う示をよそに、紫乃は続ける。

「だいたいなんの話かわかるわ。青のことでしょう？」

「う、うん」

紫乃と示の間に、それ以外の話があるはずもない。

「知ってるかもしれないけど、今、青とちよっと、揉めてるから…

…その話、したくなかったの。でも、いいわ。私も、覚悟決めた」

「麻倉さん……ありがとう！」

土下座せんばかりの勢いで頭を下げる示に、紫乃の笑みが、さら  
に温度を下げた。

「でも、ここじゃちよっと、ね。付いてきてくれる？」

「も、もちろん！ どこでも行くよ……！！」

紫乃は、先導して歩き始めた。そのあとに、踊るような足取りで、  
示が続く。

二人して歩くうち、紫乃の中で、なにかが固まり、水面へ浮かび  
上がっていった。

示が、逸ったように喋り始める。

「け、今朝、逆咲さんから、麻倉さんのこと、聞いたんだ」

それを聞いて、ますます、紫乃の想いは膨れ上がる。

紫乃は、どこにも向かつてはいない。ただ、ある場所を通過しようとしていた。

「これは、逆咲さんの、ためだけど……でも、それだけじゃなくて……」

そこは、人目のない曲がり角。紫乃が先行して、壁の向こうに消える。

示が、そのあとを追って、曲がり角に差し掛かった。

「おれも、麻倉さんと、話したいことが」

素早く反転した紫乃の視界に、無防備な示の横顔が入る。肩口に構えた手の先に。

軸足の蹴り。背筋の緊縮。愛しむように伸ばされた手が、触れる瞬間に握り込まれて、拳銃弾のようなジャブが、あご先の硬い感触を捉える。

衝撃が存分に示の脳を揺らし、脚に至る神経を切断した。

「あ　？」

示の膝が、折れる。紫乃の目が、勢いそのまま倒れ込む示の目と合った。

この、困惑した表情！

笑いがこみあげてくる。

示は、糸の切れた人形のように、床に落下し、両手をだらしなく広げた。

「あ、ははは……」

うつ伏せに倒れ伏したまま動かない示の姿が、笑いの衝動を煽る。「う、ふ。まさか、本当に私が、あんたの話なんか聞くと聞いたの？　み、身の程を知らないさいな。あ、はは……」

おかしくて腹がよじれる。紫乃は、右手で腹を押さえ、まだ打撃の感触が残る左手で自分の胸もとを握りしめる。自分自身を抱き締

めるように。」

「あは……ははは……」

実に爽快だ。ずつとこうしてやりたかったのだ。誰が話なんか聞いてやるものか。だって、こんな諦めの悪い男に、邪魔者扱いでもされたら、ほんとうに、どうしていいのかわからなくなってしまうから。

「はは……青は、誰にも、渡さない……」

示は、答えない。

「……もう、私に近付くな」

そんなことすら正面からは言えなくて、それ以上そこにいたくなくて、紫乃は、示の体をまたぎ越そうとする。

その足首を、後ろから示の手が掴んだ。

紫乃の顔が、隠しようもない恐怖に、歪む。

「あ……さ、く」

「うるさい！」

掴まれていない足を振り上げる。紫乃の踏み付けが示の頭スタンプに降り落ちる。頭蓋骨が立てる音に怖気が走る。

「うるさい！ うるさいうるさい！ うるさいのよ！」

もうとつくに喋らない示に、スネアドラムを叩くような勢いで、かかと蹴りが振るわれる。リノリウムに、なんだかよくわからない血が飛沫しぶいて、それでも、示は手を放さない。

「 放してッ！」

紫乃にはもう、自制心は残っていなかった。上履きの底が、示の手首にめり込んだ。

生理的反應によって、手指が開く。支えを失って、紫乃は転倒した。

「はあつ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、」

示は、動かない。

「は ー」

紫乃は、逃げ出した。

三限目休み時間。勝者は……？

### Round 3 ダックイン(後書き)

まっくのうち！ まっくのうち！

殴打シーンは、板垣恵介的脳震盪イメージでお楽しみください。  
次回から、挑戦者の反撃開始。

**I n t e r v a l    マイクパフォーマンス（前書き）**

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## Interval マイクパフォーマンス

気付いたら授業が終わっていた。

無意識に取っていた、見やすく綺麗なノートを見て、紫乃は自嘲する。

昼休み。

“あの男”はやって来ない。

紫乃は、青の部屋に置いてきた弁当のことを思い出すこともなく、席に鎮座したままでいた。

ふと、示の血のにおいを感じて、皮肉な笑みがますます深まる。

その元は、靴底に付着した血痕だ。示は来ない。

青はいない。

「どうしろって、いうのよ……」

呟いた言葉は、誰の耳にも届かない。

昼休みの屋上に、人気ひとけはない。ただ、風が遠い談笑を運ぶだけ。

いや。声も、音もなく、誰に気取られることもなく、小さな影法師がそこにいた。

逆咲青が、そこにいた。

青は、弁当を食べている。朝、紫乃が青の部屋に、置き忘れていたものだった。

作った者は忘れても、贈られた者は、忘れなかった。自分を形作る一部として、変わらずにそこにあるものを。

欠けている物はおやつだけで、欠けている者は二人。

紫乃の分の、弁当の蓋を開ける。

三人が初めて交わった場所で、孤独に耐えて、青は、紫乃の気持ちを受け止める。

「お願い」

朝、顔を合わせるや否や、切り出した青に、示は問うた。

「麻倉さんの、こと……？」

青は、少しだけ、驚いた顔を見せ、それから、こくり、と頷いた。

「シノは、示と付き合うな、って言ってる」

「うん」

「ぼくは、シノに認めてもらわないと、いや」

「うん」

「……シノに、ぼくたちのこと」

「わかった」

青はまた少し、目をぱちくりさせ、示は、逆に頭を垂れた。

「ごめんね」

困惑する青に目を合わせ、示はまた謝罪を口にする。

「おれから言うべきだった。だから、ごめん」

青は、なにも、言えなかった。

「おれが間に入ったせいで、麻倉さんとうまくいってないのは、なんとなくわかった。つらかった、よね……」

「示のせいじゃない」

「でも、おれの問題だよ。麻倉さんと、話さなきゃいけないことも、わかってた……。でも、おれなんか、ひっかき回していいことなのかって……。関係ないわけ、ないのにな」

「……うん」

「おれも、麻倉さんに認めてほしい。いや……必ず、認めてもらうよ。約束する。じ、自信、ぜんぜんないけど……はは」

示は、気弱げに 強い意志を表に出すことなく、微笑んだ。

青は、制服の胸もとを掴み、口をつぐんだ。ひどく迷って、言葉を探しているようだった。

彼女が正しい言葉を見つけ出すまで、示は待った。

「信じてる」



そして示は、保健室のベッドに寝かされていた。

まずは軽度の脳震盪。ひたいを切り、鼻も口内も血塗れ。右手首にはひびが入っているかもしれない。なかつた。

示を引きずってきた鷹仁（これっきりにしてほしいもんだぜ、とぼやいていた）が、怒り狂う養護教諭をなだめすかし、駆けつけてきた教頭を、養護教諭がしぶしぶながら説得し（ほとんど、口論になりかけた）、示はなんとか、病院に搬送されずに済んでいた。

示は、紫乃のことをほとんど知らないが、青のことなら少しは知っていた。

青が、自分を通して、いつも紫乃を想っていることを。

共感。

紫乃に殴られ、蹴られている間じゅう、示は、痛みを感じていた。胸にぽっかりと開いた穴から、止めどなく吹き込んでくる冷たい風。

示は、紫乃のことをほとんど知らないが、それはよく知っていた。手首が、頭が、口の中が、目の奥が、胸の奥が、ひどく痛んだ。

温度。

凍えそうな感覚が和らいで、星空の下、手袋越しに繋いだ、青の手を思い出した。

示は孤独ではなかつた。妹がいたし、親友もいた。多くはないが、大切な人たちがいた。

それでも、失ったものは大きくて、十年程度の時間なんか、なにも癒してはいなかつた。

焚き火の熱を浴びて初めて、凍えていたことに気付いたような気持ち。

だから、それはよく知っている、と思つたのだ。

なくしてはいけなないと、信じたのだ。

覚醒　温かい夢からの。

昨晚の記憶が遠ざかる。手が、室温の冷たさに取り残される。充分だつた。

誰もいない保健室で、示は目を覚ました。  
包帯の巻かれた手を、握り締める。  
この痛みがあれば、理由は充分だ。

五限目の休み時間も、示は、紫乃のところに現れなかった。  
彼がどこにいるのか、紫乃は、確かめなかった。そうするのが怖  
かった。

(これで 終わった?)

それを望んでいるのか、自分でもわからなかった。  
青が考えていることも、示が思っていることも、なにもかも不明  
で無明。

紫乃は、静かな混沌に包まれたまま、放課後を迎えた。  
立ち上がり、歩き出しても、思考はぐるぐる、同じところを  
回り続ける。

聞きたい／言わないで／来てほしい／入り込まないで／変わった  
い／否定しないで。

わからない。示は来ない。もう逃げる必要もないのに、気持ちは  
逃げ続けている。向かい合えないでいる。

階段を降りる／曲がる／回る。

示は来ない。

わからない。出口はない。答えはあるはず。すぐそこに、手の届  
くところに。示は来ない。東堂示が一番わからない。

答えはあるはず。

示は来ない。

上履きを脱いだ。外靴を手に取る。示は来ない。かがみ込む。靴  
のつま先を地面に触れる。かかとをゆっくりと置く。

示は来ない。

外を見る。開けている。人がたくさん、たくさん、紛れる。外に

出たら、見つからない。追いつかれない。示は来ない。たくさんの人の中にただ一人、たくさんの人の中に自分は一人、まがいもの自分がたった一人。

示は来ない。

右足を入れる。示は来ない。

左足を入れる。示は来ない。

とんとん、とんとん、靴を履き直す。示は来ない。

目を閉じる。一秒だけ。

示は、来ない。

一秒経った。目を開ける。示は、とうとう。

きいん！

天井に取り付けられたスピーカーから突如響いたノイズに、紫乃は、猛然と振り向いた。

ざわめきを裂いて、声流れ出す。

『おれは、二年C組の、東堂です。B組の麻倉さんにメッセージを届けるために、この放送を、行っています。ごっこ、ごめんなさい』  
ざわめきが大きくなる。いくつかの視線が集まるけれど、紫乃はそれを気にも留めず、託宣を受ける巫女めいて、示の言葉を待っていた。

『おれは、麻倉さんに、聞いてほしい話があります。おれと、麻倉さんと　逆咲青さん。三人についての、話です』

示は、一拍、間を置いた。

『……それは、麻倉さんも、わかっていて……。おれなんかの話を聞きたくないんだと、思います。それは　わかると、思います。それでも、おれは、どうしても、あなたに聞いてほしいから、これは、“お願い”です』

紫乃の中に、沸き上がってくるものがある。

『おれの、ワガママで……。いろんな人に、迷惑をかけて……。それでも、お願いします。おれの話、聞いてください。聞いてくれるまで、おれは、決して、諦めません』

やかましい鼓動に身を任せて、紫乃は、外へと飛び出した。放り捨てた鞆も忘れて。

『……待……くだ……願……』

放送が途切れる。校舎の脇を駆け抜け、花壇を跳び越え、紫乃は校庭に降り立った。

振り返り、砂埃にまみれた校舎を一望。十秒、大きく息を吸い込んで。

「東堂おおおおおおッ、示ううううううううううう！！！」  
紫乃は叫んだ。

放送に負けないくらいの大音声が、放送室で、鈴木教諭と揉み合っていた示にも、届く。

「お願いオネガイって、あんた馬鹿じゃないの！ 嫌なものは嫌に決まってるでしょう！ 甘ったれんじゃないわよーッ！ 私はッ！ 何度来たって、絶対！ 素直に話なんか聞いてやらないんだからあああああッ！」

注目が集まる。なにも気にならない。気にしてもらえない。ほかに気を散らしてられる相手じゃない。

示がどんなに馬鹿正直でも、紫乃には、言えないことばかりなのだから。

「私は、逃げるッ！ 何度でも、どこまでだつてね！」

せめて、このくらいの本音は言わせてほしい。

「それでも！ どおおおおおしても！ 私と話したいって言うのならッ！」

こんなこと、青には絶対、言えないのだから。

「追いかけて、捕まえて、無理矢理にでも聞かせることね！ 言うておくれど、私は速いし、強いわよッ！」

なにを叫んでいるのやら、もう自分でも全然わからなくて、それでも、きつと“あの男”は、聞いていると思った。

「根性、見せてみるおおおおおおおおおおお！」

静寂。

昇降口に押し寄せるとよめきに、紫乃の鼓動が、どきん、と打つた。

示が、有象無象を引き連れ、昇降口から飛び出して来る。

鼻血で真っ赤に染まった脱脂綿をポケットに突っ込み、あちこち腫らした顔もそのままに、あちこち痛む体も意に介さず。

「オラツ、行つちまえ!」 「うまくやるんだよ!」

背中を押され、彼はやって来る。怒りも苛立ちも憎しみもない目で、痛々しいほど懸命に。

「あんたなんか……」

示が走ってくる。血が騒がしくて心臓が壊れそう。

青の顔が、紫乃の脳裏をよぎった。

「大ッ……嫌いなよ!」

言い放ち。

紫乃は振り向き、逃げ出した。

Interval マイクパフォーマンス（後書き）

最後の鬼ごっこ、開始。

青という人は、なにもしていないようであり、実際ほとんどなにもししていないのですが、それでも頭の中では常にグルグルしています。

ちなみに、作者は沖方丁先生をリスペクトしています。

**F i n a l R o u n d ヲトイーン・ザ・セロンド(前書き)**

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## Final Round ビトイン・ザ・セコンド

葛ヶ丘市の、城下町の色合いを残す旧市街の一角に、その邸宅は存在する。

枳殻からたちの垣根に囲われた敷地は、サッカーコートほどもあるだろうか。裏手の森が落ち着いた雰囲気を醸し出す立地に、やや周囲から浮いた洋館が鎮座している。実際には戦後の建物だが、東欧あたりで中世から時を重ねた物件を、引っこ抜いて持ち込んだような風格があった。

逆咲青は、慣れた様子で、威圧するようにそそり立つ門を潜った。真鍮の両開きドアの脇に、申し訳なさに佇んでいるボタンを押すと、ピンポン、と実に平凡なチャイムが鳴る。

応える声も、出迎えの人もないままに、ひとりでにドアが開いた。青は、平静を保ったまま、邸内に侵入する。

迷うことなく、確かめるような足取りで、シャンデリアの輝くホールを通り過ぎ、いくつもの部屋をやりすごし、巨大な窓からさんさんと日の降る、社交室サロンに辿り着いた。

中央にぼつんと置かれたテーブルには、輝くような美女が腰掛けられている。

「おかえりい〜」

卓上には、湯気を立てるティーセット。

「お茶、入ってるわよお……?」

「ただいま、ママ」

青は、ほんの少しだけ、微笑んだ。

紫乃は走る。陸上部がひっくり返るような速度に、上履きのまま追ってきた示はぐんぐん引き離された。

かき立てられ、せき立てられるまま、紫乃は突っ走り、一切足を



緩めずに背後を振り向いた。

示が顔をゆがめる。歯を食いしばり、それでもペースが落ちていく。ノックアウト直後のボクサー並、コンディションは最初から最悪だ。

紫乃も歯を食い縛る。逃げ続ける。示が視界から消える。前を見る。規則正しく最大効率、スピードは緩めない。緩められない。もう自分では止まらない。

背後でどよめきが上がる。紫乃はまた振り返る。また示の姿が見える。少しずつ近付いてくる。顔も見える。

歯を噛み砕きそうなほど力みかえって、真っ赤な目で、めちゃくちゃなフォームで、真後ろに唾液の糸を引きながら、追いつがり、追いついてくる。

紫乃の鼓動が爆発する。体はまっすぐに驀進しながら、心は渦を巻いて螺旋を描く。怖くて、怖くて、怖くて、怖くて、いまだ逃げ続けていて、逃げ続けているのに、どうしようもなく距離が縮まっていく。

わけもわからず、涙がにじむ目を拭いて、紫乃はまだ、走り続ける。

麻倉紫乃の母、エリザは、有り体に言って美人だった。それも、アングロサクソン白人特有の、ナイフのように切れる硬質な美貌だ。

やり手の女社長か、名づけての舞台女優か。それとも、童話の女王様か。

冷たい威厳を湛えたかんばせは、しかし、日光をたっぷり浴びた綿毛のように緩んでいて。

「けっこう、久しぶりよねえ……三日ぶり？ ……くらい？」

「その、九倍くらい」

「あらあ……………」

そこから出てくるのは、神秘性とはかけ離れた、まことにぼやぼ

やした声なのだった。

「早いものです」

「うん」

「あっちゃんがうちに来てから、もう五年も経つのねえ……」

「その、二倍くらい」

「あらあ……」

青は、エリザのペースがわかっているのか、戸惑うことなく話を合わせた。

「二人とも、大きくなりました。特にしーちゃん。あの子ったら、もう、ママよりおっぱい大きいのよ？ 知ってた？」

「知ってる」

「大きいだけがいいおっぱいではありませんけれどね。その点は安心して大丈夫よ……。あっちゃん、とお……っても、可愛いからねえ……」

「ありがとう」

二人して、紅茶をすする。青は焦らない。エリザが、はぐらかすつもりでこんな話をしているのではないことくらい、青にはわかっている。

「彼氏ができたんですって？」

「うん」

「あっちゃんにねえ……」

エリザは、ゆっくりと目を閉じた。十年分の記憶を思い出すには、いささか長すぎる間、そうしていた。

「昔、ママ、言ったわよね」

「うん」

「あなたは、たぶん一生、男の子にはモテない、って」

「……うん」

優しい口調にも、控えめな言葉面にもそぐわず、それは、ギロチンのように断定的なフレーズだった。

「ママ、隠し事はたあ……つくさん、ありますけれど……。あっち

やんにウソをついたことは、一度もありません」

「信じてる」

「ありがとう……」

エリザは、糸のように目を細めた。

「だから、東堂示くん？ 彼は、おかしいわ」

初めて、青は口を噤んだ。

「彼のことで、しーちゃんとケンカしてるのよね？」

「うん」

青は、ごく素直に答える。

「ママのこと、信じてるのね？」

「うん」

「しーちゃんのことも、信じてるのね？」

「うん」

「示くんのことも、信じてるのね？」

「……うん」

「示くん、とお……っても、いい子なのねえ……」

エリザはまた、深く、深く微笑んだ。

青は、くすくすしたそうに身をよじる。

「とても、素晴らしいことです」

宙に言葉を投げ、エリザはまた、カップを傾けた。

「ママ、あなたのママとして、示くんとお付き合いすることは、おすすめできません」

青は答えない。

「けれど、一人の女として、あなたの恋を邪魔することも、できません」

青は、やはり答えない。

「うふふ……。ママが、しーちゃんのパパとお付き合いすることになったときもねえ……。それはそれは、みんなに反対されたものよ……」

エリザは、太陽を、まぶしげに見上げた。

「そろそろ、しーちゃんが、示くんに追い付かれるころねえ……」  
青は、驚かなかった。

この件について、紫乃はもちろんのこと、エリザに相談した覚えだつて、青にはない。

しかしその程度、エリザにとっては、今の天気よりたやすく知れること。

ママは、なんでもお見通しなのだ。

走つて、走つて、走つて。

擦り切れて、地面の染みになりそうなほど、示を引きずり回し。

川べりの、橋脚の麓。

二人の鬼ごっこは、ついに決着する。

夕焼けの川原で、いくつかのことが同時に起こつた。

まず、紫乃が背後を振り返つた。示の、ちよつと人としてどうかという頑張りすぎ顔が、手が届きそうな距離にまで迫っていた。ちよつとその瞬間、示が小石に躓いた。とうに限界を迎えていた示は耐えられず、猛烈な勢いで前方に投げ出され、結果としてそれが奏功した。全力疾走中の紫乃は、突然のタックルに対応できず、腰に組み付かれる形で倒れた。

「ああっ！」

紫乃は、一瞬つぶっていた目を開ける。尻餅を付いた彼女の上で、示が潰れていた。紫乃の下腹部に顔をつっ込んで、ゼーヒーゼーヒー荒い息を吐きかけながら。

生温かい感触に、紫乃の頬が真っ赤に染まる。

「この 変態野郎があああアアア！」

紫乃はブリッジの要領で示を跳ね上げると、両手で襟を掴み、水月に蹴りを突き上げ、容赦ない巴投げを掛ける。

示は、宙を舞つた。受け身を取る余力もなく、脳天から地面に墜落した。

「ぐはあっ」

そのまま、示はうつ伏せに倒れた。打ち捨てられたずた袋のようになつた少年を、息を乱したまま、紫乃は見つめる。

逃げようと思えば逃げられよう。しかしできなかつた。触られてしまったのは、いかにもまずかつた。体が限界を迎えるより先に、鬼ごつこの敗けを、心が認めてしまった。

紫乃は、追い付かれたのだ。もう逃げられない。

示は、ゴール後のマラソンランナーよりなお酷い状態だつた。時折ビクンビクンと波打っては、ゲエーツホゲホゲホ、のどが破れそうな空咳をし、少し落ち着いては、ひび割れた笛のようにビュウビュウ気管を鳴らす、その繰り返しだつた。

地面に両手を突き、ひざを立てようとする。足が震え、すべり、また崩れ落ちる。何度でも繰り返した。

「ぜえ……ぜつ、ぜええ……」

両腕に渾身の力を込める。傷ついた手首からビキビキ音がしそう。土下座めいた姿勢で、しかし示は、立ち向かっている。

戦わず、立ち向かっている。

乾ききつた咳も止まらないまま、かすかな体力を寄せ集め、なめくじの這うよりなお遅く、ストライキの大合唱をがなり立てる体に鞭を入れ、まっすぐ紫乃の目を見つめて、気が遠くなるほどの時間をかけ、示はついに、立ち上がった。

「来るな」

紫乃は請う。無駄なのはわかっている。じりじりと後ずさり、橋脚に背が触れた。示は、全身を引きずるようにして、それでも確実に近付いてくる。

互い、間合いに入る。

「あさく」

「近寄るなアッ！」

紫乃の長い脚が跳ね上がる。見事な弧を描いた足の甲が、示のほほにめり込み、彼を地面に叩き伏せた。

「かはっ……ア……」

絶息。示の疲労困憊した全身に、止めの衝撃が染み渡った。

「はあっ……はあっ……」

これで終わりだ。立てる理由も、立つべき根拠さえない。示にとつては赤の他人の紫乃を相手に、どうしてもそこまで意地を張ることがあるだろうか。

なのに紫乃は、壁に背を押し付けたまま、動けない。

ブルブル震える示の右手が持ち上げられる。草の伸びるほうがまだしもましな速度で、突き上げ、体を左に転がし、四つん這いになり、開いた鼻と口の傷から流血しながら、両手をひざに突き、紫乃の目をしつかと見つめながら、立ち上がる。

何度でも、決して諦めることなく。紫乃と話す、それだけのために。

「麻倉、さん……」

激情のままに、紫乃の全身が震えた。

「もう、諦めなさいよ！　なんで諦めないのよ！　な、なんて言われようが、私は絶対認めないんだから！」

噴出する。

「そうよ……認めるわけじゃないでしょう！　わ、私は、青と出会ってからずっと、青のためだけに生きてきたのよ！　私は、青を護らなきゃいけないの！　そうだし、そう決めたの！　私の役目なのよ！」

示は血を流し、紫乃は涙を流す。

「それを、あ、あんだなんか、なんにも知らない！　大した能力もない！　か、覚悟もない！　ポツと出の、どこの馬の骨とも知れない男なんか、任せろだなんて！」

前髪の奥に隠れた瞳から、落ちる滴が地面を濡らした。

「な、なんで……そんな、酷いこと、言うの……？」

示のゼイゼイいう吐息と、紫乃のすすり泣きの声だけが、しばし響いた。

両手で顔を覆った紫乃に、示の声が届く。

「……おれは」

血の香る声に、紫乃は、ぐしゃぐしゃにゆがんだ顔を上げる。

「最初は……ただ、ドキドキしてたんだ」

学ランの左胸を握りしめて、示は呟く。

それで紫乃には、示が恋をしていることが、伝わった。

それが苦しいことを、知っているから。

「彼女が、あんまりきれいだったから……」

示は、踏み出した。棒きれのようになった脚を突いて、前に進めるならなんでもいと、苦痛だけを共連れに、さびしい気持ちを指針にして、胸に灯った炎を導<sup>しる</sup>に。

もつともつと、紫乃のそばへ。

「おれは、彼女のことをなんにも知らない。取り柄もない。覚悟もなかった。今でも、麻倉さんに比べたら、きつとおれには、なにもない」

そして、ようやく辿り着く。紫乃の心に手が届く、そのための地点まで。

「でも……まだ理由はわからないけど、彼女に、いい、って言うってもらって……。一緒に過ごして、思ったんだ。幸せでいてほしいって。そのために、なにかしたいって」

示は、両手でしっかりと、紫乃を捕まえた。

「きつと、麻倉さんも同じ気持ちだと思うんだ」

ぎゅうつと、紫乃が縮こまる。胸に食い込んだ言葉に、抵抗する。

「違う！ 違う違う違う！ あ、あんたと一緒にしないで！ あん

たは、あの子が何者か知らないのよ！ 青は私の特別だから、私が

私は、護らなきゃいけないの！ あんたは違うじゃない！ あ

んたは、ただ」

紫乃は、引き絞られる胸をかき抱く。

「あの子が好きなら、だけじゃない……」

示は、ふるふると首を振る。

「違う……ないよ……」

「違うわよ!」

「違う……!」

示の両手に力がこもる。紫乃は、ビクリと引きつった。

「おれは知らない……けど、わかる。麻倉さんにとって、逆咲さんがどれだけ特別か……逆咲さんにとって、麻倉さんがどれだけ大切か」

「それこそ違うわよ!」

紫乃は、両手で示の胸を叩く。

唇の触れ合いそんな距離で、紫乃の荒れ狂う胸の裡が、開かれていた。

「だ、だって、青はあんたを選んだのよ! 私より、あんたのほうを選んだじゃない! 今日のことだって、青に言われて来たんでしょ……!」

紫乃の涙が飛び散って、夕日にキラキラ輝くのを、きれいだな、と示は思った。

「あ、あんたが、私から青を奪ったんだ!」

叫びとともに両手が振り下ろされ。

示の手に、がちりと掴まれる。

「きみの作ったものを、食べるのに?」

紫乃の動きが止まり、大粒の涙を湛えた両目が見開かれる。

「それは……」

「逆咲さんは、おれにデザートを作らせるけど、弁当を作らせたとはいない……。一緒にいないときだって、君を忘れたことはない……」

……。今日だって、食べてるはずだよ。麻倉さんの作ったものだけを「示が、紫乃の手首を握りしめる。

強い力ではなかった。痛くはなかった。包帯が巻かれたままの示の手首のほづが痛いはずだった。振りほどこうとすればできるはずだった。

紫乃は、振りほどきたいとも思わなかった。

「おれのことを好きになってくれたとしても、君を嫌ったことはな



い……。そんなこと、あるはず、ないんだ……」

なにを言われるとしても　どんなに、胸が痛くても。

「一番の、たった一人の、友達なんだから」

紫乃は、唇を噛みしめる。

自分の、血の味がした。

「君が必要なんだ……おれだけじゃ駄目なんだ。君がいないと駄目なんだ。おれたちには、君が絶対、必要なんだよ……」

紫乃は、赤く濡れた唇を開く。

「どうしろって……言っつのおよ……」

「おれを受け入れてよ……君たちの関係に<sup>セカイ</sup>」

にへっ、と示は気弱げに微笑む。

「おれも、麻倉さんと同じように、逆咲さんが好きだ。おれも、麻倉さんと同じように　一緒に、逆咲さんを、大切にしたい」

そして、ついに示は、言いたかった一言を、唇に乗せる。

「　おれと、逆咲さんの関係を、認めてください」

放たれた言葉を、紫乃は受け止めた。

受け止めてしまった。

「おれも、逆咲さんの幸せのために、生きさせて」

ぐらり、と示の体が傾ぐ。

「そして……おれが、彼女を……傷付けるだけの、存在<sup>モノ</sup>になったら

……」

足下を失う。

「おれを……」

最後の言葉は、血の味の中に溶けて。

示は、紫乃の胸に顔をうずめて、気を失った。

## Final Round ビトイン・ザ・セコンド（後書き）

鬼ごっこ、決着。四回戦ボクサーというわけで、まだまだヤングなふたりです。

ひっそりと、お母様ことエリザさんが登場しています。本作の一面を象徴する人物です。わたし……残酷ですわよ。

## ビトイーン・ザ・チャンピオン（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## ピトーン・ザ・チャンピオン

夕日に染まった社交室<sup>サロン</sup>で、エリザは微笑んだ。

「なんとかなつたみたいよお〜」

青は、しばし瞑目し、一言。

「そう」

「四丁目の、橋のところねえ……………」

「ぼく、行ってくるね」

青は立ち上がる。

「行ってらっしゃあ〜い」

「お茶、ごちそうさま」

「おそまつさまあ……………」

夕日がぷつりと地平線に消え、闇がかすかに顔を出す。

「あっちゃん」

心なしか、足早に歩む青は、エリザの声に振り向いた。

「しーちゃんは、弱い子です」

「うん」

「耐えることしか、知らない子……………。つらいことを抱えたままに  
たつて、いいことなんか一つも、ないのにねえ……………」

「そうだね」

「教えられるものではないのよお……………。あの子が大人になるのに  
は、まだ少し、時間がかかります」

「うん」

「それまで……………あの子を、よろしくねえ……………」

青は、こくりとうなずいた。

「わかってる」

「ありがとお……………」

またね、とエリザは手を振り。

ばいばい、と青は手を振り返し。

血の繋がらない母娘は、それで別れた。

むぎゅっ、という感触で、示は目を覚ました。

慌てて身を起こす。紫乃を探すと、すぐ側に座っていた。

腫れぼったくなつた瞼と、示の血に染まつた胸もと以外、決闘の余韻を残すものはない。

紫乃は、すつくと立ち上がった。

「負けたわ」

「あ、いやその、勝ちとか負けとかの話じゃ……」

もごもごと反論する示に、紫乃は、きつと目を剥いた。

「私がそれで納得したんだからいいの！ もう、うじうじとごぢりたい、細かい、弱い、しつこい、諦めが悪い！」

「ご、ごめんなさい……」

しゅんとする。

「……はあ……」

紫乃は、スカートについた草きれを払う、そのついでのように、ぼろりと言った。

「いいわよ」

「えと、その……」

「認めてあげる、って言ってるの」

示は、勢い込んで立ち上がった。ぐらぐら揺れる。

「あ、麻倉さ」

「あーやめて、『ありがとう』『も』『ごめんなさい』『も』『愛してる！』もらわないわ」

「いや、最後のは別に……」

さつきまで青春真っ盛りだったせいか、示の突っ込みに加減が利いていなかった。

「うるっさいわねー！ わかるでしょー！」

憤然と言い返しざま、紫乃は、目を逸らす。

「言葉の……綾よ」

「う、うん……」

なんとも、微妙な空気になった。

ごまかすように視線をさまよわせて、示はようやく、自分の体に絆創膏がベタベタ貼られているのに気付いた。手首の包帯も新しくなっている。

「あの、これは……」

「ん？ ああ、そんなもの、いつでも持ち歩いてるわ。骨とか内臓が傷んでもわかんないから、一応病院には行きなさいよ」

紫乃は、ふん、と殊更強く言い捨てた。

それで、鈍ちゃんの示にもぴんとくる。紫乃に、転んでひざを擦りむくような可愛げがあるはずもない。熊と闘っても勝ちそうだし。

全部、青のために、持ち歩いているのだろう。

自分でボコボコにしておいて手当てするのでは、完全にマッチポンプだったが。

「ありがとう」

「やめてって、言ったでしょ」

「それでも……ありがとう」  
「へっ。」

「ふん」

今度は、そう、強い調子にはならなかった。

ぶらぶらしている手首の鈍痛を思い出して、涙目になっている示に、紫乃は向き直った。

「さ、帰んなさいな」

「え……一人で帰るのは危ないよ、送ってくよ」

「私より弱い男に言われたくない」

「うう……」

それを言われては形がない。

「心配ないわよ。ていうか空気読みなさいよ、一人になりたいんだってば。とっとと帰って」

「う、うん……」

後ろ髪を引かれる様子ながら、えっちらおっちら歩きだした示の背中に、紫乃の声が届く。

「安心していいわよ」

大きくはないが、はっきり聞こえる声だった。

「あんたが、私たちを裏切ったときには」

振り向いた示を、紫乃は笑顔で迎えた。

「きつちり 殺してあげる」

今度は、言葉の綾ではなさそうだった。

示は、深く、頭を下げる。

そのまま、脚を引きずるようにして、帰っていった。

後ろ姿が夜闇の向こうに消えてから、紫乃はやっと、一息吐いた。

「ふん、大げさなのよ」

とは言つものの、どこまで手心が残っていたものか 全力ではなくとも、本気は出してしまった気が、紫乃にはした。

流血沙汰にした時点で、遠慮も手加減もあつたものではないが。

紫乃は、制服にべっとりついた血を見て、においをかぐ。乾きかけの、錆びた鉄のにおい。

「どうすんのよこれ、洗っても落ちないのよ……」

さすがに脱ぐわけにもいかず、ジャージを持ってくるんだつた、と益体もないことを思う。

思い出してしまつ。

胸のクッションの上に、示が倒れ込んできた瞬間だ。とつさのことで、思い切り吸い込んでしまった。鼻腔に、新鮮で濃厚な血の香り。

クラクラした。

唇に歯を立てる。ふさがりかけた傷が破れる。舌がぬるぬると傷口を這う。自分の血の味にすがりつく。

ごくり、と赤混じりの唾を飲み込む。冷たさがほしくて、息を止めて星を見上げた。

紫乃の影が、星明かりに薄く延べられる。

闇に紛れそうな、細く儂い影が、いつしか二つ。

紫乃は、溜息を吐いた。

「ほんつとに……空気が読めない」

「ぼくが示に訊いたの」

「ただの愚痴よ」

ふらりと現れた青は、紫乃の隣に並んだ。テストの点数を確かめるような、神妙な顔で。

二人の少女が、月下に寄り添う。

「青の彼氏」

そう、口に出して、目は合わせないまま、紫乃は続けた。

「私の好みじゃないわね」

「……そう」

青は、紫乃と指を絡めた。

「ぼく、まだ……あのひとをどうしていいか、わからない」

「……ええ」

「だから、見せて。一緒に」

紫乃は努めて、明るい顔を作る。

「仕方ないわね。青の頼みは、断れないもの」

「……うん」

紫乃の指が、握り返す。

「隠していること……いつか、全部……話すから……」

「……うん」

血の繋がらない姉妹は、闇に溶ける。

麻倉家の社交室<sup>サロン</sup>に、明かりは灯らない。

夜の闇に浸食される空間に、エリザは一人、凝然と佇む。

朔の空よりなお暗く、十五夜月より輝かしく。



夜の女王めいて、まさしく、玉座に復帰した支配者の風情。

「さあ……って……」

聞く者としてない声流れる。

「ずるくてかっこいい、妹さん……。おさなくおろかな、お姉さん……。かわいいかわいい、女の子たち……」

「つよくてやさしい……。なんにもしらない、男の子……」

蝙蝠がはばたく。野犬がほえる。草木がざわめく。月がささやき、星がなく。

「誰かさん……。いとつむさん……。めかくしさん……。かくれんぼ……」

真夜中の音楽。

「狼さん……。だあくれだあく……?」

その声に、答える者もなく。夜はただ、真つ暗に更けてゆく。

## ビトイン・ザ・チャンピオン（後書き）

地獄の義姉妹、和解。紫乃攻略編、終了です。

ところで、「ビトイン」といえば歯ブラシでございます。

「歯と歯の間にピタッ！で歯と歯の間がスッキリみがけるハブラシ」  
（ライオン株式会社 製品紹介）

この章が一番苦労しました。ここに限った話ではありませんが、鷹仁&姿子カップルがいなければどうなっていたことか。

どっかい、示くんの苦難はここからが本番。次章も、示とさらなる地獄に付き合っていたきます。

マイ・フェア・レディズ（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## マイ・フェア・レディズ

さすがに、翌日、示は学校を休んだ。

高熱を出したのだ。町医者によれば、軽度の骨折による発熱、ということだった。

安静を言いつけられた示は、十二畳のアパートで、大人しく横になっっていた。

「別に、おれ一人でもよかったのに……」

「いいってことよ、兄ちゃん。こういうときは気い使いつこなしだつて」

迪は、示の看護という名目で、学校を休んでいた。ほかに面倒を見る者もないので、やむをえない話ではあるのだが。

「おまえは、学校サボりたいだけだろ……」

「たはー、バレた？」

示は、溜息を吐いた。

「……まあ、助かるよ。洗濯物とか、溜まっちゃうし……」

「やだなあ兄ちゃん、あたしが洗濯なんかするわけないじゃん。したこともないし」

「……確かに……」

迪の大雑把な性根では、適量の洗剤を入れられるかまず怪しい。

干したり畳んだり望むべくもなかった。果たしてこの妹に、自分にはなにをしてもらえばよいのか。

「……おまえ、じゃあ、一体、なにを……?」

「『あーん?』とか?」

「その、食事は、どこから……」

「兄ちゃん作つてよ」

兄妹は、顔を見合わせて押し黙った。

「……今日はメシ抜きかなー!」

「買い物にくらい、行ってくれ……頼むから……」

実際に『あーん?』でおかゆ(インスタント)を食べさせてやったり、心温まるシーンもありつつ、基本的にはふたりでゴロゴロしているだけで半日が過ぎ去った。

学校が終わるころ、日暮れより随分早く、両手にスーパーの袋を携えて、木苺が訪ねてきた。

「お、お邪魔、しますう……」

「おいーっす、きいちゃん!」

「こ、こんにちは、お兄さん」

示にも声をかけてくる。熱を出している示より、なお赤い顔色で。

「こんにちは、木苺ちゃん」

にへっ、と示が笑顔を返すと、逃げ腰になりつつも、恐る恐る室内に入ってきた。

「あ、あの、ころ、転んで、ケガ、したって聞いて」

「やつほーきいちゃん、待ってたよー! 兄ちゃんつてば、寝てばっかだからタイクツでさー。洗濯もしてくんないし」

「思いやりの心がないのか、おまえは……」

「あ、あのっ!」

珍しい木苺の大声に、兄妹は揃って、きよとん、とする。

ひどく視線をさまよわせながら、木苺は必死に言い募った。

「あのっ……たどちゃん、お兄さんのこと、ほんとに、心配してました、から……」

「な、なんだよー、あたしは別に」

「ほんとに、ほんとに、心配してましたからっ!」

畳を見つめて、さらに真っ赤っかになった木苺に、示は、できる限り優しい声で答えた。

「うん、わかってるよ。……ごめんね。辿も、ごめんな」

「わ、わわ、わりゃ、わたしのことは、いい、ですから、だいじょぶですから」

「な、なんだよー。あたしだって、別にさ、なんともさー」

顔の前で手をパタパタさせる木苺を、優しい子だな、と示は思っ。ふてくされたように唇をとがらせている辿だつて、こんな性格だが、本当のところ、誰よりも自分を氣遣つてくれていることだつて、示にはよくわかつている。

それでも、可愛い妹たちに申し訳ないほど、示には、なんの後悔もなかった。

「たどちゃん……。そろそろ、その、パンツを、お兄さんに洗ってもらうのは、やめたほうがいいよ……。もう高校生なんだし……」

「えー、いいじゃん。だつて兄ちゃんだよ？」

「だからだよ……。ひゃっ、ひゃう……」

「あ、それ兄ちゃんのパンツね」

「わ、わかるよ、それくらい」

丸二日分溜まった（ついさつき脱いだ寝間着も含む）洗濯物をやっつけてくれる、木苺の声を聞いて、示はようやく、落ち着いて休むことができた。

だいぶ、痛みも熱も引いてきていて、それが、なんとなく惜しく思えてくるほどの、満足感があつた。

ほんとうに青の役に立てた、という実感があつた。

たぶん、ほんの一週間くらいの示との付き合いなんかより、紫乃との関係のほうが、青にとってはよほど重要なことだろう。根深く、永く、彼女の人生を大きく左右するような。

それはそれでかまわなかつた。なにかをしてあげられたことが嬉しかった。

わけのわからない衝動に流されるままだった自分にも、青の傍らにいる資格があるかもしれない、と思えたのだ。

微笑みを浮かべ、まどろむ示を、なにかをこらえるように、木苺が見つめていた。

夕食は、起き上がって食べることができた。

木苺の料理は、素朴な味わいで、示の好みに合った。その通り伝えると、木苺は、実に微妙な表情で、いえ、とだけ言った。

三人での夕食を終え、家に帰る木苺を、示は玄関先まで送っていた。

「ちょっと……」

そう言っつて、袖を引く木苺に従って、示はサンダルを突っかけ、廊下に出た。

木苺と向かい合う。

ご近所の、妹の親友である少女は、緊張と、それ以外の入り乱れる感情に顔をこわばらせながら、それでも、示が初めて聞く、はっきりした声で、言った。

「わたしのことは、いいです」

小さく息を吸って、続ける。

「ただちゃんと、お兄さん自身を、大切にしてください」

正直なところ。

示に、この言葉に込められた、木苺の本心はわからない。

わかるには、二人は共に不器用で、壁を乗り越える勇気も足りなかったが、それでも、重みだけは伝わった。

「ごめん……。おれ、あんまり、頭、良くないし……。いつつも、なにか、取りこぼしてばかりな気がするんだ。だから、ちゃんと守れるか、約束できない。ごめん。だけど」

しっかり、目を見て。

「絶対、忘れない。ずっと、覚えておく」

その言葉を聞いて、木苺は、初めて、示にほのかな笑顔を見せた。「それで、いいです。わたし、それで、じゅうぶんです……」

木苺を見送った示は、妹の待つ部屋に戻る。

これは、青がいなかった一日の出来事。

示に与えられた、たった一日の、休息の時間。

それ自体が、運命の暗示。  
物語はもう、動き始めている。  
傷を得よ。血を流せ。



## マイ・フェア・レディズ（後書き）

執筆の助けになってくれたのが鷹仁&姿子なら、救いになってくれたのはたどちゃん&きいちゃんでした。可愛い妹たちとイチヤイチヤするプロットに、何度逃げかけたことか……。きいちゃんの初恋は、まだ終わっていません。彼女の根性は、この程度では折れないのです。

さよならなんて云えないよ(前書き)

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

さよならなんて云えないよ

そして示は、二日ぶりに登校した。道々、鷹仁と合流する。

「しっかしお前、タフだよなあ。熱出したっつうことはお前、骨イ  
つてたんだろ？ もう出てきていいのかよ」

「うん。もう熱も引いたし、痛みも大したことないし、問題ないよ」  
「ありえねー」

鷹仁は、天を仰いだ。

「まあ、逆咲は見舞いなんぞ、来そうもねえしな」

「えっ？ えっ？」

隣を歩く示に振り返り、付け加える。

「早く会いたかったんだろ？」

「えっ？ えーつと……まあ……」

「つか、やつぱ来なかったのかよ」

照れる示に、呆れる鷹仁。噛み合わなくて気にしない二人だった。

「俺ア、麻倉のほうがいいと思うがな」

「麻倉さんは、そんなんじゃないよ」

これは、きつぱり、示は言った。

「友達、っていうか……仲間、とか、そういう感じ」

「ほおー。助さん格さんってか。それとも、関羽と張飛か？ こり

や、配役がキマらねえな」

「なんで、男ばつかりの例を……」

「仕方ねえだろ、お前らがヘンなんだよ」

「そ、そうかな？」

否定はできない示だった。

「おっと、黄門様のお出ましかよ」

青が、いつも通り、紫乃に連れられて 紫乃を従えて、朝の空

気の中を歩いていた。

紫乃と別れ、校門前に佇む青に、示の顔がほころぶ。

「じゃあな、先行くぜ」

微笑みかけた示に、青のひんやりと心地良い声が届く。

「話が、あるの」

それはまさに、いつも通り、定番の切り出しだったから、示が、二日ぶりの恋人の声に、ただ浮かれていても、無理はなかっただろう。

ちょうど、二日前の朝と同じように、校舎裏で、示と青は向かい合った。

「まずは、シノのこと。ありがとう」

「うん……麻倉さんと、うまくいつてるなら、おれも嬉しいよ」

示は、心底そう思った。まだかすかに疼く怪我などは、どうでもよかった。

「シノは」

よく考えてきた、という感じの口調で、青は話した。

「きつと、ぼくになにか、負い目があるんだと思う。だから、過保護になったり、縛りたがったりする。ぼくは、それが、つらかったシノのこと、大切だから」

「……うん」

大事なことを話してくれている、と示は思う。今の自分が、それだけの存在になったことを、素直に喜ぶことができた。

「だからこそ、ぼくだけじゃ、どうにもできなかった。きつと、シノを傷付けるだけで終わってた。すくなくとも、ぼくはそう思った」

「おれは、そんなこと、ないと思うけどね……」

「だから、示を利用した」

「……あ、」

それは。

わかっていたはずのことだった。

それでもいいと、思っていたはずのことだった。

「屋上で、示に告白されたとき」

なのに、その響きは、鳥肌が立つほど冷たくて。

「わけがわからない、と思った。示のこと、なんにも知らなかったし。どうでもよかったし、応えるつもりなんかなかった。けど」  
空っ風のような吐息。

「シノが駆け込んできたとき、使える、と思った」  
そもそもが、おかしな話だった。

「一晩、考えた。受け入れるリスク。どうやってシノとの関係を変えていくか」

全くもって、ありえない話だった。

「ぼくは、きみを受け入れた。利用するために。そして、きみがシノの心を動かせるだけの人間かどうか、試し続けた」  
むしろ、納得のいくことだ。

「そして、思った通りきみは、シノを壊してくれた。ありがとう。きみは、とても役に立った」

だったら、なにを、悔いることがあるだろう。

「きみにしてもらったことは、もうないよ」  
喜ばしい、ことのはずだ。

「恋人ごっこは、もう、おしまい」  
それつきり。

青は、なんにも言わなかった。

示は、なんにも言えなかった。

青の、澄んだ瞳が、凍えたように震える示を映していた。  
痙攣するように、示の口が開く。

「そう、か。そ、そう、だ、よね。おれ、おれ、なんか、なんで、受け入れて、もらったのか、わからなかったけど、そういうことなら、うん、わかる。おれ、認めて、もらった、って、こと、だよ。ね。やるべきことを、全部、やれた、って、ことだ、よね。おれ、役に立てたんだよ、ね」

「うん」

青の返答は、それ以上の会話を拒絶するかのよう。

「そ、それなら、よかった。おれに、後悔は、ない。おれは、ちゃ

んと、ちゃんと、最後まで、きみのために、いられたんなら、それで、いいんだ」

笑みに凝り固まった示の顔が、ぐしょぐしょに濡れていても。

「それじゃあ、そういうことで」

示は目を見開く。どうしてか視界が歪んで、青の姿がよく見えな  
い。

目に焼き付けておかないとならないのに。

「いろいろお世話になりました。ありがとうございます」

青は、深々と腰を折る。

「さようなら」

それが、最後の言葉だった。

鷹仁は、叩き割りそうな勢いで、隣の教室のドアを開いた。

糸繰り人形のような動きで戻ってきた示を問い詰めて、どうにか  
肝心な部分だけ聞き出した彼が、真っ先にしたことは、それだった。

「鷹仁、待って……！」

奇妙に歪んだ声で制止する示を振り切って、鷹仁はズカズカ、隅  
っこの席に向かう。

蠟人形ロウのように、窓の外を向いて設置された青の席に。

「おい」

無言で、紫乃が立ち塞がる。

「鷹仁」

「そいつに話がある。どけ麻倉」

「断る」

紫乃は、豊かな胸の下で腕組みし、微動だにせず答えた。

「他人事ひたごとぶってんじゃねえぞ逆咲イ！」

両隣の教室まで、全員が震え上がるような鷹仁の大音声にも、青  
は、無感動そのものの瞳を動かもしない。

「手前テメエじゃ話にならねえ。どけ麻倉」

「あんたは冷静じゃない。断るわ」

「手前は関係ねえから冷静だつてかア？」

目を血走らせる鷹仁を、紫乃は言下に切つて捨てる。

「今唯一関係ないのがあんたよ」

「クソニア……」

拳を握りしめた鷹仁に、示は必死に食い下がる。痛々しいほど。

「鷹仁、もう……！」

哀れを催すような声に、鷹仁は親友の胸ぐらを掴み上げた。

「頭ア湧いてんのか示ッ！ 無神経か手前は、あア!？」

「おれは、鷹仁……」

「惚れた女に使い捨てられて納得なワケねえだろうがッ！」

「そうなの？」

唐突な青の声に、周囲が静まり返る。

青の言葉は、示に向けられていた。

示だけに。

「イヤだったの？」

鷹仁が、紫乃が、青が、一斉に、示を見た。

示は。

笑みを、返す。

「そんなこと、ないよ」

ボロボロに崩れ落ちていても。

青は、すっ、と息を吸った。

「そう」

そして、視線を校庭に戻した。なにもかも、どうしてもよそそくに。

「そういうことよ、志沢くん」

紫乃は、冷徹に立ちはだかる。

示は。

示は、ただ。

痛みを、こらえて。

すつつ、と鷹仁の体から力が抜けた。

「手前から全員 イカれてやがる」

振り返りざまだった。鷹仁が、近くにあつた机を蹴り飛ばした。それは、まっすぐ壁まで吹き飛んでいき、すさまじい激突音を響かせた。

高速道路なみに開いた人波を、憤懣のあまりふらつく歩調で踏みしだき、鷹仁はそのまま、出ていった。

“キレた”少年が去ったフロアを、次第にざわめきが支配する。

泣き出す女子、携帯電話を操作する音、駆けつけてくる教諭の気配、遠巻きに刺さる好奇の視線が嵐となる。紫乃は、蹴り飛ばされた机に歩み寄り、謝罪と賠償と遺憾の意を対空放火なみに振りまきつつ、すれ違いざま、示に耳打ちした。

「あんた、あとで顔貸しなさい」

青は、動揺する人々の中にあつて、いかなる感情も表すことはない。命のないもののように、ただ、そこに在り続けている。

示には、もう、なにもできなかった。



さよならなんて云えないよ（後書き）

五つ目の試練、開始です。サブタイトルは、小沢健二より。

「オツケーよ」なんて 強がりばかりをみんな言いながら「

（小沢健二「さよならなんて云えないよ」）

クロスカッティング・お姉さま（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## クロスカッティング・お姉さま

青とは破局し、鷹仁はあのまま学校をフケた。

こうなると、示には、一緒に昼飯を食べる相手がいなかった。食欲だつてなかったが。

「と、う、ど、う、くん！」

そんな昼休みに、場違いな声。

「お昼ごはん、一緒にたべよ？」

最高に意地悪な笑みを携えて、紫乃は弁当の包みを揺らす。

同時刻。

青は、朝の出来事の余韻が残る教室で、一人、なにをすることもなく、ぼうつ、と座っていた。

誰も、彼女に声をかけなかった。ただ一人、学校一変わり者の上級生を除いて。

「いよう」

ぼん、と肩を叩く手。

「ちよいと、面貸<sup>ツツ</sup>しておくれよ」

気さくな笑みを構えて、“姿子さん”が青に切り込む。

「ぼん」

示を引きずって和室にやってきた紫乃は、パックの牛乳を投げつけた。

額に命中して、ぼとり、と床に落ちた。

「……あの」

「どうせ食べないでしょ？ それくらい飲みなさいよ」

自分はトマトジュースのパックにストローを刺して、紫乃は勝手に食べ始めた。

示は、ふらふら座り込み、どうにかこうにか、牛乳をすすり始め

た。

片や、茶道の家元もかくやという完璧な正座。片や、水揚げされた蛸なみに力の抜けた女の子座り。対座する紫乃と示には、釣り合いというものがなかった。

示が毎日見ていた、青の弁当と同じ、適切な栄養バランス+まっとうな素材+丁寧な調理で構成された弁当を、紫乃は、健啖そのものの様子で平らげていく。

半分かた片付いたころ、紫乃は唐突に声を上げた。

「しかし、こないだの件で、私もほとほと思い知らされたわよ」  
のたり、と首を傾げる示に、紫乃は言い募る。

「青のこと！ あーんな可愛い顔して、中身はとんだ腹黒の食わせ者よ。自分の手は一切汚さずに、私をキリキリ踊らせるんだもの。おっそろしいわー。見た目は可愛いけど。ほんとに」

美しい所作のまま、ヤケ喰いじみた勢いで弁当をかき込んでいく。  
「いま思えば、あの地獄の蓋を開けたくなくて、私は腰が引けてたのよね。そしたら、お互い溜め込んでたものが爆発してごろんの有様よ。あの子が最初から本性剥き出しだったら、正直といてたわ、私」

「それは……」

ようやく、示の口が会話に追いついた。

「さすがに、言い過ぎ……じゃないかな」

「あら、否定はしないのね」

「いや、まあ、その……」

きろっ、と急に視線を合わせる紫乃に、示は少し、後込みする。

「あんたもよくやってたものよ。どうせ私の件に限らず、西に東に走り回らされてたんでしょ。いやいや、よく我慢したわねーほんと。で」

ズコーっとトマトジュースを啜り。

「フラれたんだって？」

紫乃は、実に見事な笑顔を振りまいた。

屋上では、姿子と青が、膝を突き合わせていた。

もちろん、すんなりこうなるはずもない。青はまず、声をかけた姿子を完全に無視したのだが、今度ばかりは、相手が悪かった。

「まあまあまあ、そうつれなくしなさんな」

背けた視線の先に回り込み、姿子は続けた。

「可愛い弟分のことさ？ アタシだって、話くらい聞きたくなるってもんじゃないのさ」

そして、締めにはこう言い放ったのだ。

「それとも、逃げるのかい？」

これに乗ってくるあたり、青も単純といえなくもない。

それとも、あるいは。

ともあれ、青を連れ出した姿子は、総菜パンの袋を破るや否や、前置き一切なしで切り出した。

「で？ うちの弟分の、一体なにが気に食わなかったってんだい？」

「話す必要、ない」

当然、青は答えない。

「おいおい、そいつの一点張りっこじゃあ、ちいとも話が進まないじゃないかい」

青は、紙でも食べるように、弁当を口に運ぶ。

残されたものに縋って。

しかし、姿子の辞書に、遠慮の二文字は載っていない。

「ついこないだまで仲良くやってたのに、今日の今日にやこの様ささま。なにがあつたんだって、気になるのが人情ってもんだろ？ お姉さんお姉さんに一つ、教えておくんよ」

「示から、聞けばいい」

目を合わせないまま放たれた、青の無機質な返答に、しかし姿子は、にやりと笑みを深くする。

「そいつがねえ、少年とくりゃ、アンタとは終わりだって、それ以外は貝んなっちまって、なーんも喋っちゃくれないのさあ。ただ

肩を竦め、口角吊り上げて、姿子は青の扉をノックする。

「おれが悪い、つてそんだけさ。一体なにをやらかしゃ、あんな死人みたいな面ツラあ晒す羽目になるのかね？」

青の、手が止まる。

「……別に。示は、なにも」

姿子は、次の袋を開ける。

「そうかい。ま、男と女、袖が擦り合ってくつつくこともありゃあ、尻がぶつかって別れることもあらあな」

そして、まるでパンを食べるついでのように、口をもぐもぐさせながら、言い放った。

「そいじゃあ、少年はアタシが食っちまおうかねえ」

青の、堅い殻の中で燃えていた炎が、ちらり、と覗いた。

満面の笑みで生傷を抉られ、示は思わず硬直した。

「これがまさに、元の鞘に収まる、というやつよね。もう邪魔者もないっ！ 安心したわー、結局、青がいなきや生きていけないもの、私」

そして、示に勝ち誇った流し目一つ。

「あんたは元通り、寂しい独り身ねー。ああ可哀想。がんばってねー？」

幸せそのもののニコニコ顔ニコニコで焼売シユーマイを噛みしめる紫乃に、示は返す言葉もない。

「まあ、これは当然の結果なのよ」

うんうん、と紫乃はひとりごちた。その確信に満ちた姿に、示の、ある欲求が反応する。

「……それは」

答え合わせが、したかった。

「逆咲さんが、おれのこと、好きでもなんでも、なかったから……？」

「は？ なに言ってるんの、違いますうー」  
それを、紫乃はあっさり切り捨てる。

「え……？」

箸で示をビシ、と指し、紫乃は続ける。

「あんたさー、鬱陶しいくらい青にベタ惚れのくせに、青が自分に興味ないって、ずーっと、本気で思ってたわけ？」

示は、俯いて黙り込む。

「はあー。それじゃ青は、ぜんぜんどーでもいい男に私の説得を任せたんだ。あーん、私ってその程度の女？ ひどーい。傷付いちやうなー」

しくしく、泣き真似をする紫乃に、示はつい、かっとなる。それだけは肯定できなかった。

「そ、そんなわけないよー！」

「わけないんじゃない」

またもあっさり切り捨てられて、示が絶句する間、紫乃は自分の弁当を平らげて、ずちゅー、とトマトジュースを一気飲みした。

「それ、いらぬならもうわよ」

よっこいしょ、と身を乗り出し、紫乃は示の脇に置かれたままの弁当箱をかつさらった。

答えも聞かず、あつというまに包みをほどくと、そのまま、ぱくぱく食べ始める。

「ふーん、悪くはないのね。でも、お醤油くらい、もうちよつとマシなの買いなさいよ。もー、包丁の研ぎが足りないじゃない。あと、横着して切り身を買わないで。佃煮、お砂糖多すぎ。舌が寝呆けるんじゃないの？ 里芋のぬめりも取りきれないし、唐揚げの衣は分厚すぎ。なにより、炊飯器が最悪！ いまどきマイコン式なんてありえない！」

一通り、好き放題に品評し終わると、紫乃は、急に話を戻した。

「根本的にさ。あんた、青に好かれてなくなってもいいのよね。青の役に立ってさえいれば、それで満足なんでしょ？」

これは、答えなければいけない質問だった。

「そ……そうだよ。麻倉さんだって、そうじゃないの？」  
共有できるはずの答えだった。

「私はイヤよ。同じくらい好かれてないと」

紫乃は、焼き鮭を頬張りながら、至極、真面目な顔で返した。

「……なんだって？」

姿子の、話の筋を無視した宣言に、青は妙に低い声で答えた。

「あ？ 決まってんじゃないのさ。セックスさあ、セックス」

姿子が繰り出す、描写が憚られる下品なジェスチャーに、青は、思わず箸を取り落とした。

「ん、なっ……」

「前々からねえ、ちよいと少年の童貞、切ってやろうかとは思ってたんさ？ つつても、相手は惚れた娘に越したこたないからねえ。遠慮してたんだけど、こつもキツパリ振られつちまやあ仕方ねえ。このアタシが、一肌脱いでやらなあね」

諸肌脱ぎかねない姿子の勢いに、青はすっかり慌てた。

「な、なんでそんな話になるの」

「それこそ嬢ちゃんにや関係ないわな。男と女、目が絡んだ拍子にくんずほぐれつすることも」

「付き合ってる男がいるくせに……!!」

「それはそれ！ これはこれ！」

あまりにあんまりな言い種だった。

「そんな、簡単な……」

青の困惑を、姿子は鼻で笑い飛ばす。

「かーんたんさあ。減るもんでなし、ああ、未通女おぼこちゃんなら減るけども。したいからする。そんだけの話さあね」

「だって……!!」

それでも、青は必死に言い募る。

「だって、示は、ぼくの……」



「嬢ちゃんの？ なんだつたつけ？」

もはや、なんでもないはずなのに。

自分で、そうしたはずなのに。

「やめてよ……」

青には、それは、許せない。

「女の子はね」

こくり、と示の弁当を飲み込んで、紫乃は言う。

「少なくとも、私は」

豊満な胸に手を当てて。

「好きな人には、自分を好きでいてほしい。私が好きでいるだけじゃ、ぜんぜん足りないわ」

それが、青と紫乃が喧嘩した理由で、仲直りできた理由でもあった。釣り合いが取れなくて、それでも互いを求めていた。

「なあ……んにもしてほしくありません。なんにもいません。犬みたいに、奴隷みたいにあなたに尽くします」

オペラ歌手のように歌い上げられるその心は、示にとっては、誇りだったかもしれない。

なのに、紫乃の流し目は冷たくて。

「そんなのって……私なら、自分が本当に愛されてるのか、不安になっちゃうな……」

紫乃の言葉が、剣のように、ぐさり、と刺さる。

「で？ 尽くすだけ尽くして、女同士の痴話喧嘩の仲裁に使われて？ 用が済んだらハイサヨナラ、って言われて納得するんだ。ふざけんじゃないわよ」

相変わらず、容赦というものがない。

「反省しなさい、このヘタレ。鈍感。朴念仁。単純バカ。意地っ張り」

痛みがあつて、後悔があつて、今朝のショックからだって立ち直れてはいなくつて、示はほんとうにきつかったのだけれども。

「嘘つき」

目の前の少女には、感謝しなかった。それも口にはしない。紫乃が求めているのは、そんなことではないから、示は、必要なことだけを伝えることにした。

「麻倉さん。おれ、行くよ」

「安心したよ。少年が、まだ飽きられてないみたいでさ?」

姿子は、青に微笑みかける。こぼれる涙には、見ない振りをした。「悪いね、試すようなことして。ま、実際、少年に興味がないことないけど」

青は、剣呑な目で年上の少女を睨み付ける。

「おっと、怖い怖い」

姿子は、ひよいと身を退いた。

「ま、偉そうなこと言ったって、アタシも彼氏と喧嘩するなんざしよっちゆうさ。けどねえ」

苦笑しつつも、姿子の声は、至って真剣。

「決まり文句になっちまうけどさ。本音ぶつけないきゃ、なんの答えも出やしないよ」

「……聞きたくない答えだって、あるもん」

「そら、そうさね」

拗ねたようにこぼす青に、姿子の笑みは力強く 厳しい。

「あんたにゃ、口も付いてりゃ手も付いてる。目えだって付いてんだ。文句言つて、引っぱたいて、泣き落としてもなんでもしちまいなよ」

青には、素直に頷くことなんか、できないけれど。

「なあに、付き合ってるモン同士うまくいかないなんざあ、男が悪いつて相場が決まってるあ」

納得なんか、してないけれど。

「それでも、あんたの惚れた男だろう?」

そのことだけは、間違いなかった。

「信じてやんなよ」

青の胸に、焼けっぱち気味の熱が沸き上がる。  
いいだろう。やってやるとも。

誰もかれも善人ぶって、こっちの事情も知らないくせに、心配するばかりで、本当の望みも口にしないなら。

逆咲青がどついう女なのか、イヤになるほど見せつけてやる。

示と青の携帯電話が、揃ってメールの着信を告げる。凶ったように、全く同じ文面だった。

『放課後に、屋上で』

前もって必要な言葉はそれだけ。本当に伝えたい言葉は胸に秘め、二人は、それぞれに携帯電話を握り締める。

「敵に塩を送る、かあ……」

そして紫乃は、示の去った和室で一人、空になった座布団を見つめ、口中、言葉を転がした。

「それでも……人間は、奴隷であつては、いけないの……」  
今はまだ、その言葉の意味を、知る者はない。

## クロスカッティング・お姉さま（後書き）

身近な人だからこそ、言えないことや、言っても意味がないこともあるんじゃないかなあ。

やたらと食事シーンが多い本作。一緒にごはんを食べるといふ行為は、日常を形成する中核ともいえましよう。きつと、この事件がなければ、この日の昼食は示・青・紫乃の三人でとったのでしょいうね。

さよならなんて云わないで (前書き)

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

さよならなんて云わないで

放課後、示は屋上に立った。二人の物語が始まった場所に。あれから、彼女に応えられるだけのものを、手に入れたのか。かつての光景の再生めいて、重い鉄扉がゆっくりと開いた。

現れた少女は、確かめるように、コンクリートの地面を踏み締める。

二十歩。

そして、かつての恋人同士は、ただの東堂示と、ただの逆咲青として、対峙した。

いまさら、とか。

どうして、とか。

厄体もない言葉の群は、示の口を出る前に、今、青の瞳に宿る、燃え盛るなにかに焼き尽くされた。

多くのことがあやふやで、確かなことがほんの少しだからこそ、言うべきことは、わずかしかなかった。

「おれは……」

それを、示は形にする。

「まだ、逆咲さんと、一緒にいたい……」

それが、示がほんとうに言いたかった、たった一つのこと。

吹き寄せた風に目を細め、青もまた、たった一つ、言いたかったことを舌に乗せる。

「どうして？」

それがつまり、根本的な問いだった。

あまりにも単純で、どうしようもなく重くて、痛々しいほど懸命な一言だった。

苦しい。

それでも、示は、答えなければならなかった。応えられる自分で、ありたいと願った。

二人の間に積み重なった時間が、それを叶えてくれると信じた。

「おれ、ここで、言ったよね」

めちゃくちゃで、みっともなく、それでも本気だった、告白の日。

「おれ、どうして、逆咲さんのことが気になるのか、わからなかった。一日中、きみのことを思っ、それでも、なにも……。だから、きみに教えてほしくて、きみに、すがった」

それが真実。

「今でも……。わからないよ。逆咲さんは、すてきな女の子だ。髪がさらさらなのも、まつげが長いのも、肌が白いのも、肩が細いのも、全部かわいくてドキドキする」

それもまた、事実。

「神秘的で、どんな気持ちでいるのか、いつでも知りたいと思う。麻倉さんを大切にしているのも、素敵だと思う。いつもピンと張りつめて、一秒だって、なおざりに生きてないようなところも、とても綺麗だと思う……」

それは、ただの現実。

向けられる視線の熱さを、青だっ、とうに知っている。しかし。

「でも、そういうことじゃ、ないんだ……。どれも、理由じゃないんだ。きみを好きになってよかったと思う。けど、好きなのは、ただ好きだからだ」

それこそが、本質。

たった一つ、青が、恋人として、示に教えたことだった。

「おれにとって本当なのは、きみを好きだっ、ことだけだ。一緒にいたっ、ことだけだ。だから」

結局のところ、示が証し立てられるのは、身勝手なその願いだっ、で。

「一緒にいてほしい」

受け止めた青を、苦しくさせる。

「どうして……？」

青にはわからない。

「どうして、そんなこと言えるの……？」

誰が見たって青に夢中で、どこから見たって青に本気で、大好きな目の前の少年を、彼女は信じられない。

確実にそこに存在し、謎に満ちた、恋という事象を、持て余す。

「ぼくは、示のこと好きでもなんでもなかったのに、恋人になった。最初から、利用することしか考えてなかったんだよ」

「利用してくれればいい」

だって、そんなの、自分なら耐えられないのに。

「シノへの当てつけだった」

「それでもかまわない」

自分なら許せないのに。

「ぼくを好きになる男の子だっているんだって、見せつけたかっただけ……」

「おれの気持ちを受け入れてくれただけで、おれもうれしい」

自分なら信じられないのに。

「示は、ぼくのどんな言葉だって、真剣に応えてくれたのに、ぼくは示を、ずっと試してた」

「君が、真剣におれを試してたことくらい、おれにだってわかる。自分だけが身勝手だと、思っていたのに。」

「シノとのことも、全部押し付けた……」

「おれが望んだことだし、全部きみたち自身のおかげだ」

吊り合うなんて、思えないのに。

「ぼくは、ズルいし、臆病だ……」

「それが嫌だったことなんかない」

二人は、こんなにも違っているのに。

「いつか、嫌になるかもしれない……！」

「……かもしれない」

はっ、と顔を上げた青の目に、示の笑顔が焼き付いた。見慣れた



はずの、気弱げな笑み。

あの夜、星見の丘で垣間見た、絶望的なまでの不信が、そこにある。

「明日気持ちが変わらないかどうか、明後日ちゃんと生きてるかどうか、おれには……約束なんか、できないよ」

示は、知っていた。誰も、人は、命は、永遠ではありえないと。会えなくなつた織姫に　幼なじみに、刻み込まれていた。

「だけど」

それでも、限りある今に、示は、悲しみの裏側を覗き込む。

二人は、確かに幸せだった。

「今、君がおれを嫌いでも、おれは君と一緒にいたい」

「ぼくは、ずっと一緒にいたいよ……！」

だからこそ、青の恐怖は消えない。

「一緒にいたいよ、離れたくないよ……！　嫌われるのも飽きられるのも捨てられるのも蔑まれるのも憎まれるのも、ぼくは、怖い……」

悪魔の証明。幸福の存在は証明できても、不幸の不在は証明できない。

それは、世界の、不確定性という原理の中で、乗り越えなければならぬ、試練だった。

「……信じて、ほしい……」

残酷すぎる願いが、青に悲鳴を上げさせる。

「信じさせてよ！　ぼくが示を要らなくなるまで、ずっとぼくの側からいなくならないって、安心、させてよ……！」

示を、恐ろしい誘惑が襲った。

青の涙を止めるのは簡単だ。青を安心させてあげることが、いともしも簡単なことだった。

嘘を吐けばいい。

それでも。

「……おれを、信じてくれ……！」

初めて、示に願いを踏みにじられたという事実が、ゆっくりと青の胸に染み通った。

こんなにも近くで、見つめ合っているのに。

示が見ているのは青で、青が見ているのは示だから。

二人が、同じものを見ることは、ないのだ。

小さなシートで、肩を寄せ合って見た星空は、儚い幻。

孤独だった。それに、耐えたかった。

「……わかった……」

けれど、耐えられるほど、青は強くなかった。

「“試練”を、しよう」

そのためには、杖が必要だった。

「ぼくたちの、最後の“試練”を……」

決して、この恋はなくならないと。

示が吐いてくれない嘘を、自分に信じさせるための、言い訳がほしかったのだ。

「ぼくの部屋で、ぼくを全部、ちゃんと見て」

二人は、手を繋いで、寄り添いながら、学校をあとにした。そこだけ見れば、すっかり寄りを戻したように見える。

しかし、青の表情は、緊張と不安に凝り固まっていた。

示は、それを気遣わしげに見つめていた。

星を見た夜と同じに、二人は目も合わせず、会話もしなかった。

けれど、縮まった距離を噛みしめるように、ゆっくり歩いたあのときとは違って、せわしく進む歩調が、今の二人の心を表しているようだった。

近付きすぎた距離に怯えたみたいに。

二人はあんまり真剣すぎて、しっかりと握り合わせた、初めての手の感触に、浮き立つ余裕もありはしなかった。

アパートを見上げもせず、足早に階段を上る。青は、古びた鉄扉

の鍵を開け、二人して中に入ると、すかさず内側から施錠し直した。誰も入って来ないように。

示も、自分も、出られないように。

飾り気のない部屋だった。小さな筆筒スツールと本棚、勉強机と、白物家電のほか、余分な物はなに一つ存在しない。

冷蔵庫に貼られたメモにだけ、かすかに紫乃の残り香があった。

シチュー有 お母様の

しかし、どれもこれも、狭い窓から覗く夕日に照らされた部屋の  
中で、暗闇に沈んで、はつきり見えなかった。

浮かび上がるのは、二人の姿だけ。

青は、結び合った手をそっとほどくと、部屋の中心に進み出た。

影法師のようなその姿は、真つ赤な逆光に照らされて、痛ましい  
ほどくつきりと、周囲の暗がりから切り取られている。

小さな小さなお城の、小さな小さな女王様。

示はそれを、ひどく眩しいような気分で仰ぎ見る。

「来て……」

言われるがまま、示はふらふらと、青に歩み寄った。

沈みかけた太陽に照らされたそこは祭壇で、存在を許されるのは  
二人だけ。

青は、片手を首筋に伸ばした。そこには、二人が出会う前からず  
っと、変わることなく、漆黒の、シルクのチョーカーが巻かれてい  
る。

秘密めいて。

「これは このチョーカーは、お洒落で付けてるわけじゃないの」  
青の密やかな声が、熱と冷ややかさが同居した空気を震わせる。

「子供の頃からずっと、ママとシノと ほんとうのパパとママの  
前以外で、外したこと、ないの……」

青が首の後ろに回そうとした両手が、ぴたりと止まった。

一言一句聞き逃すまいと、どんな小さなことも見逃すまいと、硬  
く身構える示を、青はじつと見上げる。

そして、両手を下ろし、腰の後ろで組んだ。

「……外して」

「えっ……」

青は、かすれた声で繰り返す。

「示が、外して……」

羞恥と恐怖と信頼と、それ以外のなにかがこもった声だった。

示は目をつぶり、ごくり、と唾を飲み込んだ。恐ろしかった。

「わかった」

かたかたと、小さく震えながら、示の両手が青の首に伸ばされる。示の目には、とろりと濡れた青の瞳が映っている。触れた青の首は細すぎて、握り潰してしまわないか心配になりながら、指先がそつとシルクの表面をなぞる。ぞくり、と青が震える。

示の指先が、純金の留め具に触れた。それは、示がほんの少し力を加えただけで、あっさり和外れた。全くの無抵抗だった。

青の体が、がちがちに硬くなる。それでも、目だけは、その先を促していた。

示は、細心の注意を払って、布を取り除けた。

青は、頭を傾けて、左の首筋をさらけ出した。

時が止まる。

青の首筋には ステム 細い脚に、豊かな体を持つ、サカスキ 盃を模した、しるし 徴があった。

刺青ではない。見た目としては、アザか、もしくは 烙印のようだった。それは、あまりに綺麗に整っていて、何者かの手によって刻まれたとしか、思えなかった。

青は、全身をこわばらせたまま、逃げ出しそうになる心を必死に抑えて、はっ、はっ、と切れ切れの息をこぼしながら、消えかけた夕日の中に、首筋をむき出していた。

「豚の、焼き印みたいでしょ？」

そう、自分から口にする。

「生まれたときから、あつたんだって。ほんとうのママもそうだった

た。家の外では、絶対に見せなかった。ぼくも、そう教えられて、そうしてた。麻倉のママも、誰にも見せちゃダメだって　シノにも、できるだけ見せないように、って　」

青は、エリザと初めて面会したときのことを思い出した。

エリザの、優しくて　容赦ない目を。

「ママはたぶん、この徴の意味を知ってた。孤児になったぼくを引き取ったのも、そのせいなんだと思う。ママは、そう　かわいそうだけど、どうにもならないって感じて、ぼくを見てた。それでぼくは、なにか、自分じゃどうにもできないところで、運命を決められてるんだって、わかったんだ」

後ろで組んだ両手を、ぎゅっと握る。

「ぼくは、奴隷なんだって。ママは、ぼくをほんとうの娘みたいに育ててくれたし、シノはぼくを誰より大事にしてくれる。不幸だと思っただことなんか、一度もない。けどぼくは、なにかを、諦めてた　」

そして、エリザは言ったのだ。

『あなたは、たぶん一生、男の子にはモテないわね』

「恋なんかできないって……。男の子に興味も湧かなかった。可愛いって、素敵だって言われたって、信じられないよ。けど、それでも　ぼくの全部を知っても、示がぼくのこと、ほしって言うなら、ぼくは　」

示は、なにも言わなかった。

「示……？」

青は、横目に示を見た。はっ、はっ、と荒い息のまま　同じように、苦しげに息を荒げる示を見た。

示は、食い入るように、青に刻まれた徴を、見つめている。

どくん。青の心臓が波打つ。それがどうい感情によるものか、考えたくなかった。どくん。どくん。痛いほどの鼓動。示と共鳴するリズム。

どくどくどくどく、際限なく加速していく。

いつの間にか、示の両手が青の肩を掴んでいた。爪が肌に食い込んだ。

「痛っ……」

とっさにはねのけようとした。その行為に自分で怯えたが、がつちり捕らえられて離れなかった。示を傷付けることは別の恐怖が、青を襲った。

閉鎖された部屋に二人きり。誰も来ない。誰も逃れられない。

血走った示の視線が、青の首筋に縫い止められている。

青の脚が、みっともなく震える。

示が、唇を噛み締めた。

「うづうづう……」

ギリギリ鳴る牙の間から、低い唸り声キバが漏れる。

示に突き飛ばされ、青はよろよると、壁まで後ずさった。

灰色混じりの夕焼けに、示一人が浮かび上がる。

泣きそうな顔で。

（ どうして？）

「うづうづ……がああああッ！」

獣じみた叫びに、青は身を竦ませる。

しかし、青が恐れた通りにはならなかった。

示は、凄まじい勢いで出口に走った。体当たり、すさまじい衝突音の残響が青の耳に届く。蝶番が壊れ、ドアがごとり、と落下した。ドアを鍵ごとこじ開けて、示は走り去った。

いつしか夕日が切れ、部屋が闇に包まれる。

開け放された暗い部屋の中に、へたり込んだ青だけが残された。

それっきり。

東堂示は、姿を消した。

さよならなんて云わないで（後書き）

サブタイトルは、岡崎友紀より。

「愛する人に背を向けて すねてみたいのわけもなく

悪い噂もあるけれど 私にだけはいい人と

たえてたえているのよ わかるでしょう

さよならなんて云わないで」

（岡崎友紀「さよならなんて云わないで」）

五つ目の試練は、青にとつての試練でもあります。

試練が人を成長させるなら、女の子だって、試練を必要とする瞬間があるでしょう。時間が解決してくれる問題だとしても、いつも充分な時間があるとは限らないのですから。

次章は、そんな女の子の戦い。

約束はその場所で（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。



## 約束はその場所で

『先に行ってる』

メールで紫乃にそう伝え、日の出より早く、青は学校に向かった。いつも通り、首筋にチョーカーを巻いて。

一睡もしていなかった。

校門前で、なにをするでもなく過ごす。

用務員がやってきて 驚いた様子で 門を開けてくれた。

一年生の教室の前で、また青は立ち尽くす。

運動部の朝練組が登校してきて、めいめいに出ていった。誰も、青に気付かなかった。

朝練が終わるころ、憔悴した様子で、二人組の女子がやってきた。辿と木苺だった。

「東堂、辿さん？」

青が声をかけると、二人はようやく、見慣れない人物に気付いた。スカーフは二年生の黄色。辿が慌てて問いかける。

「ね、ねえ、ひよつとして逆咲センパイ？ 兄ちゃんは、センパイんちには」

青は、首を横に振る。

「昨日、来た。夜に出て行って、それっきり」

辿は、あからさまに肩を落とす。

「そ、つか……。ああ、昨日、帰ってこなくてさ。そっぴや、晩メシ食い損ねたな」。たはは……」

生気の抜けた笑い声。木苺は、じつ、と青を睨んだ。

「昨日、なにがあっただんですか」

「あ、いやいや、きいちゃん」

「なにかあったんでしよう。教えてください。お兄さんは、連絡もなしに外泊するような人じゃありません。知ってるんだから……！」

「きいちゃんつてば」

「たどちゃんは黙っててッ！」

木苺の剣幕に、凧はたじろぐ。

青は、ふっ、と笑った。

「なにが、あつたんだらうね……」

「あなた」

「ケンカした。仲直りしようとした。途中で出ていった。それだけ。それ以上は、きみには関係、ない」

木苺は、押し黙った。

その肩を、そつと凧が叩く。

「ま、ガッコ来るかもしれないし、ウチ帰ってきたら教えるよ。セ  
ンパイ、ケー番聞いていい？ って、ありゃ、ケータイ持ってない  
や」

「わたし、持つてる」

木苺は、奇妙に平静な声で答えて、携帯電話を取り出す。電話番号を交換すると、凧の手を引っ張って、教室に入っていった。

凧は、兄によく似た、痛みを押し殺した笑顔で、青に手を振った。

青は、黙って二人を見送る。

自分の教室に入ると、紫乃が待っていた。

「青？」

答えない青に、紫乃は続けた。

「場所、変えましょうか」

紫乃と連れ立って、人通りの少ない廊下の隅に行つて　そして

青は、すべてを白状していた。隠したかったことも全部。

「そう……」

紫乃は、一切の感情を、表に出さなかった。

「心当たり、ある？」

青はまた、首を横に振る。紫乃は即断した。

「私が探しに行くわ。あなたは探しちゃダメよ。学校か、できれば

お母様のところにいて。いい、絶対に探さないで。わかった？」

「こくり、と頷いた青と、紫乃の視線が、しばし交差する。

「……信じるわ」

野暮用があるので帰ります、と堂々言い放った紫乃を追って、担任教諭が飛び出していったが、彼女に追いつけるはずもないだろう。

示の教室には、鷹仁がいた。近付くと、目が合った。

「迪ちゃんから聞いてる。俺アなんも知らねえし、知ってたところで」

「そこまで言って、鷹仁は急に口ごもった。

青の無表情になんを見たのか、視線を逸らし、大げさに舌打ちしてから、続ける。

「アテにやなんねえが、野郎の行きそうなところは、見回ってやらあ」

青が会釈すると、鷹仁はまた、小さく舌打ちを返した。

「今にもくたばりそうな面アしやがって、どいつもこいつも……」  
そんな呟きを、青は背中で聞いた。

和室を訪れる。

中には誰もおらず、食事風景はなく、よそよそしい空気だけが流れていた。

青はただ、そこに立ち尽くした。丸一日近くなにも食べていながっが、どうでもよかった。

屋上に行ってみる。

太陽がまぶしかった。

マリンランドは、外から眺めるだけにした。

紫乃からの連絡はない。

そして、太陽が顔を隠した。  
かつて二人で歩いた道を、誰とも手をつなぐに、青は進む。  
丘を登る道を。

張り巡らされた枝々が行く手を阻み、服を引っかけ、肌を搔いた。  
飛び出した木の根につまずき、でこぼこの地面に足を取られた。急  
峻な道のりが、やつれた体から、容赦なく体力を奪い取った。暗さ  
とうそ寒さが、なににも遮られずに突き刺さった。

それでも青は、誰の手も借りずに、登りきった。

頭上が開けた丘の上。空の上の者だけが見守る舞台。ほかに知る  
者としてない、秘密の場所。

いつか、星を見た。

いつか、再び来ようと約束した。

たった一つ残った約束の場所。消えた少年は、そこにいた。

ひざを抱え、うずくまり、なにかから目を閉ざし、両手で耳をふ  
さぎ、荒い息を押し殺して。

胸の中のものに縋るようにして。

孤独に、耐えていた。

「示」

青の声に、示は目を剥いた。

見るも明らかかな、怯えの表情。

青が歩を進める。示は動かない。

前後から同時に引つ張られているように、動けない。

「示」

「くるな」

ひび割れてた拒絶の声に、青は一瞬、立ち竦む。

それでも再び、歩み始める。

青もまた、どうにもならない衝動にとりつかれて、止まることな  
どできはしなかった。

「示」

「こないで……」

「示……」

青は、喘いだ。疲れのせいもあった。それ以上に胸が苦しかった。示、示、示。言いたいことが多すぎて、それしか口に出せなくて、それでも。

「いなくならないで」

「……あ……」

示の顔が歪む。引き裂かれる。その中で荒れ狂う情念が覗く。肉体も精神も叩き壊し焼き尽くし灰となり蘇り、自分が自分でなくなるほどの絶望と歓喜。

もはやそこに、青の知る示の表情はない。

人らしさの残滓すらない。

それでも。

「ぼくから……逃げないで……」

青の瞳から一滴、こぼれた涙が、少年の魂を穿った。

「あああああああああー……ッ！」

示は立ち上がり、自らの喉笛に、その爪を押し当てた。

処刑人の刃めいて。

青は絶叫し、駆け寄ろうとする。

示の目が、ぎらりと光った。

疾る爪が 制服とカッターシャツを引き裂く。

青の目に映ったのは、みるみるうちに一分厚い体毛に多い尽くされてゆく《……………》、示の素肌だった。

衝撃に足が止まる。

示の体が痙攣し、針のような毛がこすれてザワザワ、骨がねじ曲がってゴキゴキ、耳障りな音を撒き散らす。

早送りしたように爪が伸び、筋肉が膨れ上がり、増加した体重が地面を凹ませる。

気弱げな笑みは記憶の彼方。

耳の付け根まで裂けた口から、ぞろりと牙が覗き、遠吠えが進つ

た。

「G O O O O O O O O O H  
H ! ! !」

青の体を、外と内、両面からの震えが襲った。

決して人類ヒトではありえない、存在ごと違えた叫び声。

狩りの始まりを告げる音。

もはや、そこにいたのは、青の知る少年ではない。

ハンター  
プレデター  
狩猟者にして捕食者。

人外にして埒外。

気弱げな表情にすべてを隠していた、裏切り者。

今やその正体を露わにした  
ウェアヴォルフ  
人狼だった。

青は、恐怖に凍り付いていた。

目の前の現実を拒否していた。

ありえない希望に縋っていた。

「し、めす？」

人狼に、手を伸ばそうとする。

人狼が、その首を青に向ける。

青の顔に、安堵が浮かびかける。

それを、獣の咆哮が打ち砕いた。

理解は不可能だと、交流はありえないと、これから行われるのは

ただただ一方的な略奪だと 本能に叩き付けられて、青は人狼に

背を向け、駆け出した。

示から、逃げ出した。

（ どうして？）

約束はその場所で（後書き）

五つの試練、第二局面。ようやくプロローグに戻ってきました。  
次回、決着です。

ホールド・ミー・バイト（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。



## ホールド・ミー・バイト

そして、青はどこまでも走った。

小さな丘のはずなのに、示と一緒にここに来て、思い出を持って帰ったのに、どこにも出口が見えなかった。

人狼が吠えるたび、青の脚がもつれた。

襲い来る巨体が、でたらめに破壊される木々が、青の精神を削り取った。

「あつ……！」

そして、鬼ごっこは終わる。

木の根に足を捕られ、青は倒れる。その上に、人狼がのしかかった。

爪が、制服の上着ごと、チョーカーを引き裂いた。

青の、一番隠したい部分が、人狼の眼に晒される。

「……………っ！」

徴を隠そうとする腕は押さえられ、そこを、人狼の舌が、存分に犯した。

思い出が。

信頼が。

穢されてゆく。

別のなにかに変わってゆく。

「OH、OH HHHHHHHHHHHHHHHH!!」

感極まった人狼の遠吠え。

それに応える、声があった。

「青……………ッ!!!」

少女の声が割って入った。青と人狼は麓に目を向ける。人狼は、大きく口を開き、威嚇の叫び声を放つ。そう見えた瞬間には、声の主はすでに、人狼の鼻先に出現していた。

人類に実現しうる速度を、遙かに超えて。

「うるさい」

人狼がそれと気付いた直後、大砲のような後ろ回し蹴りが、その巨体を十メートルも吹き飛ばし、立木に叩き付けていた。

衝撃で、生木が音を立てて倒壊する。

「シノ……………」

あるいは、人狼以上の怪物性を見せ付けた、華奢な少女　麻倉

紫乃は、青に問いかける。

「あれは、東堂示ね？」

青は答えない。答えられない。

しかし、涙に濡れた顔が、すべてを物語っていた。

紫乃は、倒れたまま起きあがれない青の前に跪く。制服のスカートを抜くと　奇妙に平静な手つきで、青の首筋に巻いた。

「青、聞いて」

人狼に背を向けたまま、紫乃は語る。

「あなたの首筋の徴は、吸血鬼にとってのみ意味を持つもの。それが、麻倉があなたを保護した理由なの」

青は、表情をなくしたまま、問い返す。

「ぼくは、なんなの？」

青の魂に絡み付いた問いを。

紫乃は、感情のすべてを殺したまま。

「吸血鬼ヴァンピールに血を提供するために、特別に調整された一族。吸血鬼の奴隷として作られた血族。その末裔が、あなた。それが、私にとって、あなたが特別である理由よ、青」

その告白が、意味することは。

「あなたを連れてきた日、お母様は仰ったわ。この子を護りなさいと。それは、私たちの義務だと。私は、喜んで受け入れた」

青に、指一本触れず。ただ目を合わせて、紫乃は語り続ける。

「あなたを好きになつたから。お母様に言いつけられたからでも、一族の責務としてでもなく、私の意志で、あなたを護ると決めたく。人間を夫とした、お母様と同じように」

紫乃は、目を伏せた。

「いつか、話すつもりだった。私が臆病だったせいで、きつとずいぶん、あなたを苦しめたでしょう。裏切り者と呼ばれても仕方ない。許してくれとは、言わないわ」

背後では、微塵のダメージも感じさせず、人狼がむくりと起き上がっている。

「ただ、これだけは信じてほしいの。私は、誰からも、私自身からも、必ずあなたを護る」

決意。

ほかのすべてを擲つほどの。

それでも、痛みは消えなくて。

「私のこと、嫌いになってもいいから……それだけは……信じて」  
その儚い笑顔には、真つ赤に染まった瞳が輝き。

その口もとには、皮膚を食い破り、血を啜るための、長く伸びた犬歯があった。

青は、呆然とそれを見つめる。

護るべき少女に背を向け、紫乃は立ち上がった。

細いリボンが千切れ飛び、解けて背筋を流れ落ちる長髪が、瞬く間に黄金色に変わっていく。母、エリザと同じ色に。

制服の背を内側から膨れ上がらせ、布地を突き破って現れた蝙蝠の翼が、背後を護る壁のように、大きく広がった。

それはまさしく、伝承として語られる、吸血鬼の姿にほかならない。

はらはらはら、ぼろ布きれと化した制服が舞う中、紫乃は人狼と向かい合う。

「いつか話す決めていた……こんな風に、青を傷付ける形じゃない……私の意志で話すと……あのとき、決めたのに……」

これは、誰に語るでもない紫乃の心。

「バケモノの……人喰いの姿なんて見られなくなかった……」  
青には見せられない、紫乃の本音。



宙を舞い、拳を蹴りを人狼に撃ち込んでゆく。

人狼が血をまき散らして吠える。それは青の心胆を寒からしめるが、相手にはなんの影響も及ぼさない。むしろ少女はその隙に、がら空きの胴体に、遠慮仮借のない打撃を加えてゆく。

もはや、鬨の趨勢は明らかだった。

まったく停滞せず、雷のごとき速さで動き回る少女にさんざん翻弄されて、人狼はいいように叩きのめされる。隠しようのないダメージを抱えて、ますます勢いを増すような少女に、完全に圧倒された。

あらぬ方向に爪牙を振り回しては、手痛い反撃を受けるのみとなつた人狼は、目的であるはずの青のことすら、眼中になくなつてしまつたようだ。

紫乃は勝つだろう。

人狼を殺すだろう。

だが、そんなことはただの前提だ。

シヨックは、シヨックだった。

親友と信じる相手にとって、自分が餌だったということは悲しい。自分に対して、あらぬ欲望を向けられていたことには、裏切られた気持ちになる。いかに見た目が美しかろうと、化け物じみた力を見せ付けられては恐怖を覚えるし、自分の存在が、そんな化け物の家畜であつたときは、屈辱ここに極まれりというものだった。

泣きたかつたし、傷ついていた。

だが、成程、と青は思う。

紫乃の語つたことは、それまでの紫乃の不自然さの、ほとんどを説明するもので、そう考えるとまた泣きたくなってくるのだが、それでも、それは、青と紫乃のこれまでを、否定するものではなかつた。

紫乃は子供っぽくて馬鹿で過干渉ぎみで自己中心的で高飛車で鈍感だけれども、その愛情も決意も、青にとっては、いまさら確認するにも、疑うにも値しなかつた。

つまり、紫乃は必ず勝つ。そんなことは、彼女が青の目の前に立った瞬間から、わかりきったことだった。

わからないことは、ほかにある。

危機に際した青の脳は、ただ呆然として見える表面の裏で、これまでにない必死さで猛然と回転し、その“わからないこと”を考察している。

走馬灯とは、危機的状况に対処する術を記憶から探る、無意識の働きであるという。今、青が見ているものこそ、それだった。

破壊／騒音／恐怖／逃走／救出／告白／激突／旋風。

目にも留まらぬ速さ。

闘いとも言えぬ、一方的な暴虐。

目の前の現実で、人狼が膝を突く。

紫乃が垂直に着地する。自分で破き散らした上着だけでなく、スカートも下着もボロボロになっていたが、その肌にはいくつかのかすり傷があるばかりだった。

吸血鬼は、腰を落とし、低く構えた。その爪が、刃のように鋭く伸び、異形の翼が広がる。

紫乃は、ゆっくりと息を吐く。迷いとためらいを、もろともに吐き出す。

大きく息を吸ったとき、その深紅の瞳には、感情の色は残されていなかった。

決着の瞬間。

「待ってえッ！」

青は、駆け出した。

石のように色を失っていた紫乃の顔に、動揺が走る。

「青、来てはダメッ！」

「殺さないで！」

愕然とする紫乃の前に、青が立ちはだかった。

人狼は、切れ切れの息を漏らすのみで、動かない。

「どいて、青……」

「どかない」

封じ込められた激情が、堰を切る。

「私だつてッ」

「どうして、シノは間に合ったの？」

その言葉が、紫乃を寸前で思い留まらせた。

「……それは、あれだけ大きな音がしたら、私の耳には、」

「示が、木を倒したからだ」

紫乃は、息を飲む。

「シノと闘つてるときの示は、ものすごい速さだった。ぼくには見えもしなかった。なのに、ぼくはシノが来るまで逃げ切れた。どうして？」

「それは」

青の背後で、人狼が蠢く。荒げた息が青の制服を揺らす。その両手が、ぴくり、ぴくりと痙攣する。動こうとしている。紫乃の意識が、青を失う恐怖に塗り潰されかける。

青は、微動だにしない。

「あれだけの闘いで、シノはほとんど無傷だった。それは、ただシノが強いから？ 襲いかかる前に、必ず大声を上げるのは、ただ相手を怯えさせるため？ ぼくが、自分で転んだ以外、ケガ一つなかったのはなぜ？ 最初、ぼくが逃げようとしなかったとき、

示は吠えて、ぼくを威嚇した。それでぼくは逃げ出した」

都合のいい、妄想かもしれない。

「ぼくが示を探してここに来たとき、示はぼくを追い返そうとした。

ぼくが示に徴しほを見せたとき、示はぼくから離れようとした」

「青、あなた」

青は人狼に向き直る。

「示、そこにいるんでしょ？」

人狼は、答えない。

暴走しそうな肉体と、発狂しそうな意志が均衡して、危うい平行棒の上に立ち続ける。青がそこにいる限り。

「誰かに操られていたとしても、ぼくを奪うために近付いてきたんだとしても　ぼくを逃がそうとして、ぼくを助けるために、シノを呼び寄せようとしたんでしょ？」

もはや青は、示の意思を　青を護ろうとする意思の存在を、疑いはしない。満身創痍となった人狼に、手を差し伸べる。

「青、お願いやめ　」

「そして、シノに殺されようとしたんだ」

伸ばされた手が、人狼の胸ぐらを掴んだ。

「ちよっ　」

「ぼくと一緒にいたいって、言ったよね。それって、この程度の覚悟？」

一見、いつもと変わらぬ無表情に、氷点下の炎が宿る。誰より激しさを秘める少女の、本気の怒りが。

「勝手にズカズカ踏み込んできて、さんざんぼくたちを引っかき回して、いざとなったら勝手に死んでサヨウナラ？　ふざけるな　！」

人狼の体が震える。紫乃は割って入れない。青の言葉に、口を挟めない。細い手が、分厚い胸ぐらを引き寄せる。

「示は、ぼくのものだ！」

口づけの距離で、燃える瞳を叩き付ける。

「ぼくのが勝手になくなるのは、許せない……！　そんなんじや、ぼくはぜんぜん納得しない！」

結んだ視線を頼りに、示を引っ張り出そうとする。

「天の川を見に来るって、約束したじゃないか……！」

暗闇の中、まぶしいほどに瞳がきらめく。

「ぼくの男なら、吸血鬼だろうがなんだろうが振り切って、ぼくのところへ、帰ってきてよ！」

寸秒。

「グウ……」

人狼が、唸る。



紫乃が、青を引き離そうとする。

「ア……ア、ア、ア、アアアあああああああつ！」  
牙だらけの、真っ赤に裂けた口から、叫び声が迸った。

獣じみてひび割れた、しかし確かに、人間の声が。

人狼の肉体が蠢く。さっきの光景の逆再生のように、筋肉が縮み、骨が組み変わり体毛がざわめき、鋭い爪を牙を持つ、毛むくじやらの半獣人めいた姿となり、そこで止まった。

「ご、めん……ごめん、な、さい……」

血塗れでボロボロの、人とも獣ともつかない体から、紛れもない人類の言葉が、流れ出す。

「示うっ！」

「うそ……」

青の眼から、涙が溢れ出した。

しかし示には、それを拭うことができない。

「ダ、メだ……、この、血が、体を……勝手に、動、かして……おれには、どうする、ことも……！ だ、から、麻倉、さん……！」

黄色く濁ったままの、しかし真摯な視線を向けられ、紫乃はびくりと身を引いた。示を殺す覚悟など、一滴も残っていないかった。

「ダメツ！ 逃がさない！」

青が、示の顔を無理矢理自分に向き直させる。その顔が、耐えがたい苦痛に歪んだ。

「ダメ、なんだ……あのとき、噛まれてから……自分が、自分で、なくなつて……」

「そうか」

紫乃の無意識のつぶやきに、首が折れそうな勢いで、青が振り向いた。

「お母様の結界を抜けた方法……眷族化ではなく、血液で作った使ガシオンい魔を、体内に撃ち込んで……？ 肉体や意識は操作されていても、ア霊体レベルではまだ」

「シノ！？」

青の剣幕に、紫乃はたじろいだ。

「あつ、うん　恐ろしく高度な魔術だけど、理論上は、アガシオン 使い魔を  
駆逐すれば……でもそんなの、お母様でも　」

そこでまた、紫乃は、はっ、と顔をこわばらせる。

示は、杭のような牙を食い縛り、口を噛み裂きながら、必死に自分を保とうとしている。

「シノ、思い付いたことは全部言って！」

「　そいつを私の眷族にすれば、排他効果で、アガシオン 使い魔を駆逐できるかも……だけど」

「シノー！」

紫乃は、生まれて初めて、ほんとうに青を恐ろしいと思った。

妹ともいうべき少女の中に、これほどの鮮烈なものが潜んでいたなんて、知らなかった。

「示は、ぼくのものだ！　ぼくを護るって、安全な囲いの中に入れるだけのこと！？　それなら、食べられないだけの、家畜と変わらないー！」

「わ、私はそんな、」

青は、決然と言い放つ。

「だったら、ぼくの一大事なものを全部奪り返して《……………》……」

これほどまでに、自分に与えられた牙を呪わしく感じたことは、紫乃にはなかった。

牙ゆえに青と出会い、愛し、人生を捧げ　そして今、彼女の愛する男の命を、この牙に託されるなんて。

そして。

「で、でも、私まだ、誰の血も吸ったことなく、だから、はじめ  
ては、その」

「麻、倉、さん……」

示の苦しげな声に、紫乃は身を竦ませる。

「もう、抑えられない……これ以上、誰も、傷付けたく……なにも、

奪いたくない……！」

「そ、そんなこと、私に言われても……！」

血の香り。闘いの緊張と興奮の中でも、紫乃の意識に滑り込もうとしたこの香り。

「麻倉さん……！」

成程、と紫乃は恐慌をきたした頭で思う。

「あああああーッもうッ！」

こんな、一事が万事で命懸けの目を向けられて、この男を無視するなんて、青にだろぅが誰にだろぅが、できようはずもなかったのだ。

「わかったわよ！ やればいいんでしょぅ、やれば！ やってやるわよ！ 青！」

やけっぱちに睨み付けられ、青も、涙に濡れた瞳で睨み返す。

「こいつを、私の僕シモヘにするからね！ いいわね！」

「よくない！」

「我慢しなさいッ！ ワガママばかり言うんじゃないの！」

ますます危険に眼光を尖らせる青を無視して、紫乃は示に振り向く。

「東堂くん！」

示は、なにを返す余裕もない。

「今までなんてメじゃないくらい、すつつつごく痛いわよ！ たぶん！ 泣いても許さないんだからね！」

示は頷いた。迷いはなかった。青の涙を止められるなら、どんな苦痛も望外だ。

「死ぬかもしれない……！」

紫乃の言葉を受け止めて、青は、示を抱き締めた。

「示」

そして、ふたりは見つめ合う。

「一帰ってこなかったらばくが殺す……」

《

》

示は、にへつ、と。

強靱な、決して折れない、何物にも曲がることのない、愛する少女のために地獄から蘇った、鋼鉄の意志を乗せた笑みを返す。

「それは……困るな……！」

もうなにを感じたらいいのかもわからず、紫乃はただ、ぶるぶると痙攣した。

なんの整理も付かないまま、示の背後に回り込む。

大きく、息を吸い込んで。

「いいわね！　いくわよ！　ほんとにやるわよ！　後悔しないでよね！　覚悟決めなさいよ！　どうなっても知らないからね！　わ」

「……は、早く」「しろオッ！」

示も青も、とつくに限界を通り越している。

「わ、わかつてるわよ！　せ、せえー……のっ！」

紫乃は、示の首筋に、顔を寄せる。

頸動脈を覆う皮膚に、唇が触れた。

舌が触れた。

牙の先端が触れた。

あごに力が籠もり、牙が皮膚を貫いた。

「ぐ……」

吸血牙がその機能に従い、示の血を吸い上げ、詩乃の頬が紅潮し。

紫乃の血が、撃ち込まれた。

その、瞬間。

「ぎ」

示の全身が硬直し、その口から、絶叫が迸った。

「ぎいいいい　　やああああああああああああああああああ

ああああああ！！」

「示っ！？」

叫びを上げ続ける示を、青はさらに強く抱き締める。

紫乃は、目覚めた本能に従って、さらに容赦なく、己の血液を注そそ

ぎ込む。

示の体内に侵入した血液は、示自身の血液を貪るように食い、同化しながら、その中に混じる使い魔アガシオンを探し出し 周囲の組織を盛大に破壊しながら、激烈な闘争を開始した。

止めどもなくのどを枯らし、苦痛に耐える硬直のために自ら筋肉を捻じ切り、体内に全組織をガリガリ削られる感触と、前後に二人の少女の体温を感じながら、成程、と示は思う。

これは確かに、これまでの苦痛とはひと味違う。すぐ手の届くところに自分の死が見えるし、自分からそこに飛び込みそうになる。正直なところ、あのまま殺された方が数倍マシだったような気がする。

しかし、まあ。これも正直なところ、紫乃に殴られるのは、もう慣れたし。

青に爪痕だけを残して死ぬよりは、この苦痛に耐えて、希望を求めめる方が、億倍はマシだ。

けれど、青の泣き叫ぶ声も、もう聞こえなくて。痛みも感じなくなつて。

魂ごと擦り切れて、消えてなくなつてしまひそうであるとき、青は、なんとか示を繋ぎ止めようと。大きく口を開けて。

きれいに並んだ歯を 彼女の牙キバを剥き出して。示の首筋に、唇を寄せ。

もっと強く抱き締めるように、怒るように、憎むように、恨むように、縋るように、愛するように、恋するように 強く強く、噛み付いた。

その感触が、なんだかひどく甘くて。

示の意識は、幸福に包まれたまま途切れた。

## ホールド・ミー・バイト（後書き）

五つの試練、決着。ほとんどの謎が明らかになりましたが、どうでしょう、バレバレでしたか？

ドクトル・フロイト曰く、リビドー発達段階の最初は口唇期だそう。生きるために必要なものを、人は口に含む。噛み付いたりもするでしょう。それは幼くて、だからこそ強い愛の形。

断章 夜に棲む者たち（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## 断章 夜に棲む者たち

これといったもののない路地に立ち尽くす、なんということもない街灯。

ちか、ちかちか、と不定期に明滅する電灯の上に、一つの影がある。

夜の闇より、昼の光よりなお色濃い、えげつないほど灰色の影。

「けたけたけた！ けたけたけた！」

影は笑う。その声色は、可憐な少女のそれで、しかしその響きは、氷点下に冷やした木鈴めいて虚無的だ。

声というより、音。

「けたけたけた！ いやはやいやはや、なんともはやの予定調和！

愛と勇氣の大勝利！ 道化の筋書き、まるで無視！」

道化の少女は、手を叩いて笑う。箸が転がっても可笑しいという調子で、なにもかもが異常オカしいという感じで、顔の皮一枚だけで感動しながら、涙を流して爆笑する。

「主演女優、逆咲青！ 助演女優、麻倉紫乃！ 主演俳優、東

堂示！ 筋書き崩壊の悲喜劇ドラマ、お楽しみいただけましたかな？」

「ええ、とつてもお……」

そこに、新たなる影一つ。

朔の空よりなお暗く。

十五夜月より輝かしく。

その姿、まさしく夜の女王。

「お初にお目にかかります。麻倉家御当主、極東最古の夜族、霧統べる魔術師、杯の女王、麻倉エリザ様、御前に！」

「ご丁寧に、どうもお……」

女優たちの母、エリザである。

「聞きしに勝る魔術の御手腕、いやはや、苦勞いたしましたぞ。つまらぬ手品ではございませんでしたが、御笑覧いただけましたかな？」



「とおんでもない。お若いのに、素晴らしい業前わざまえね？ 示くんの体内に使鬼を忍ばせ、その体を結界に作り替え、しかるのちに、支配する……。エリザちゃんとしたことが、自慢の結界を素通りされた上、最後の最後まで、見抜けなかったものお……」

「恐悦、至極にございます」

道化は、深々と腰を折った。

「しかも、示くんを通じて、結界内で使鬼を増やしていたわね？

蝙蝠たちを駆逐するのに、今の今までかかってしまおうとはねえ……。うちの不器用な娘とは、才能が違うわあ……」

「いやいや、結界に力を割かれたまま、分身体のみで我が使鬼ども、文字通りに壊滅せしめた御身こそ、流石の一言に尽きますぞ。なにより、純粹体術で顕醒した人狼を圧倒するとは、娘御こそまさに規格外。血混じりとはいえ、毛並みが違いますな」

「そうなの、それなのよねえ……」

道化の笑みが、裂けるように深まる。

「埋伏した使鬼のみとはいえ、わたくしに感づかれずに結界を抜けるなんて、ふつうは不可能なもの……。『天狼星』とか、『椿姫』あたりの結社には、力づくで結界を破れる夜族なら、いるでしょうけれどお……」

「さらば？ 其それがしの出所、何処いずくにあらんや？」

「『新月』は、血混じりの娘を、使い走りつかいばしりにしているらしいわねえ……？」

エリザは、にっこりと微笑み。

「けたけたけたけたけたけたけたけたけたけた！」

道化は、壊れたように笑い転げる。

奇妙に静まり返った路地に、しばし、狂笑だけが響き渡った。

「悪事千里を走るとは真まことにございますな！ いかにも。其、結社『新月』の裏番、『猿回しの猿』ムラサキと呼ばれる使い走りつかいばしりでございます。以後、お見知り置きを」

エリザは、小さく溜息を返す。

「夜族純血主義の結社に属するなんて、物好きな子ねえ……」

「餌に飼われた物好きな吸血鬼が娘のすること、お気になさらず」

「そうするわあ……」

静まり返った夜気が、ぴり、と震える。

「目的は、『杯の族』の奪取……。それと、麻倉　つまり、わたくしへの宣戦布告……と、いうことで、いいのかしらあ……?」

「過不足ございません」

「ありがとうございます……ねえ……」

エリザは、唐突に、深々と腰を折った。

「おやおや？　其、今宵はたつぷりと御叱責いただく心算で推参いたしたが？」

「試練は、人の糧です。結果としてはあく、うちの娘たちの成長に、一役買っていたいただいたわけだしねえ……。なにより……」

「かにより？」

「あつちゃんに彼氏ができたのは、貴女のおかげ、ですものお……」  
吸血鬼は、処女の生き血を好む。

そう。『杯の族』を探索すべく、呪をかけられた男でもなければ、処女であるべく、異性の眼を逃れるようプログラムされた、『盃の族』の女に恋することなど、誰にも不可能だっただろう。

それが例え、標的に反応するだけの、歪んだ生理だとしても。

道化の首が、転げそうな勢いで傾げられた。

「身の安全より、恋が貴しというわけですか？」

「命を懸けてもいい恋って、あるものよお……」

感心したように、道化は、繰り返し首肯した。

「御身の御言葉とあれば、重みも違うというもの」

「まあ、それはそれとしてえ……」

道化の体が、石のごとく硬直する。

「うちの娘たちに手を出した報いは、受けていただかないとねえ……?」

怯えていた。明滅する街灯が、ぬるく冷えたアスファルトが、う

す暗闇にうごめく虫どもが、徘徊する野良犬が、空気も月も星さえも、夜を構成する森羅万象ことごとくが、盟主たる彼女の放つ気に恐怖していた。

見えぬ手で捕らえられ、薄皮一枚で笑んだまま固められた道化だけが、泰然と、猛吹雪のごとき殺気を受け流している。

「影を切ったところで、どうということもないでしょうけどお……。一月くらいは、寝込んでいただくわねえ……？」

ぴっ、と虚空に線が疾った。

すると、道化の姿が、紙のごとき薄さの層となって、斜めに崩落し始める。

「 けた」

虚ろな笑い音一つを残して。

道化の姿は、微塵に砕け、消え散った。

あとに残されたのは、ただの夜と、美女一人。

「 さあ……って……。忙しい、忙しい……」

残された女の姿も、退屈な夜の闇に溶けて、じわり、と消えた。なにごとくもなかったかのように、古びた電灯は、明滅を続ける。

## 断章 夜に棲む者たち（後書き）

黒幕登場。続きを書けることになれば、ムラサキちゃんは本格的に出張ってくる予定です。

床屋さんの前に必ずある三色のアレは、動脈・静脈・包帯を意味し、かつて散髪が医者の仕事であった時代の名残である……って、ほんとなんですかねえ。

示くんのキャラクターカラーは、赤ノ白です。

ちなみに、作者はあざの耕平、環望両先生をリスペクトしています。  
次回、完結。

あれがデネブ・アルタイル・ベガ（前書き）

本作は、2011年前期GA大賞に応募したものです。

## あれがデネブ・アルタイル・ベガ

示が目を覚ますと、清潔な、真っ白いベッドに寝かされていた。  
「おはよう」

声の元に目をやれば、ベッドサイドに紫乃が腰掛けている。

「まだ起きてはダメよ。ふつうの人間なら三度は死んでいる重傷だったのだから」

確かに、痛みこそなかったが、体の感覚もまた利かず、凄まじい気怠さだけが、示の全身を支配していた。

「もう、命に別状がないのはわかるけれど、無理をしたら治るものも治らないわ」

それでも、示は苦勞して口を開く。

「逆咲……さんは……」

「無事よ。少なくとも、あんたよりはね」

まったく表情を変えないまま、紫乃は続けた。

「アカウンタビリティ」

「……え？」

「説明責任というやつね。ここまで関わってしまったのだし、一通りのことは教えてあげる。それで、どこまで把握しているのかしら」

示は、重たげに答えた。

「全部……聞いてたよ……」

「そう」

示が面食らうほどの、簡素な反応だった。

「では、確認になるけれど、話しておくわ。まず、あんたは丸三日間眠っていた。そして、私は吸血鬼。正確に言えば、そのハーフ

半吸血鬼ダンピールよ。お母様が吸血鬼、亡くなったお父様が人間だった。

青は

「あの……ここで話して、問題は……」

淡々と話す紫乃に、示のほづが心配になる。

「ないわ。この病院、お母様の息がかかっているから。色々が無理が利くのよ」

「そ、そう……」

「続けるわ」

示は、黙って聞くほかない。

「青は、吸血鬼に血液を提供するために造られた奴隷の一族、その末裔よ。あの子のご両親が亡くなってから、うちで引き取って、中学校までと一緒に暮らしていた。今、一人暮らしをしているのは知ってるわね？」

「うん……」

「それでも、あの子は麻倉の子よ。そして、私の大切な人。私は必ず、青を護る」

あっさりとした口調に、示は、紫乃の決意の重さを感じ取る。

「さて、あなたの話ね」

「……うん」

「あなたは、人狼の末裔だったようね。いちおう聞いておくけど、ご両親からは、なにも？」

「十年前に……事故で……その前には、なにも」

「……そうだったの」

紫乃は、そつと瞑目した。

「……その、辿は……おれの、妹は……？」

「ほんとに人のことばっかりね、あなたは」

呆れたように、紫乃は溜息を吐く。

「う、ごめん……だけど……」

「わかってるわよ。あなたの妹なんだから、当然人狼の血統ということになる。けれど、血が薄れて、ほとんどふつうの人間と変わらないようね。なんのきっかけもなければ、生き方を変える必要はないでしょう」

「そつか……。なら、辿には、今回のこと、知らせないようにしたい」

「好きになさい。さ、あなたの話に戻っていいかしら？」

「あ、うん、ごめん……ありがとう」

「感謝される謂われはない」

きっぱりと言う紫乃に、示は口ごもる。

「敵の手によって、あなたは人狼として覚醒した。ふつうの状態でも、身体能力、感覚能力の向上が見られることでしょう。最近、怪我の治りが早かったのもそのせいね。そして、先日あったように獣化の能力をも得ることになったわ。体が治り次第、制御のためのトレーニングを行ってもらおう」

「制御……」

示は、周囲を見回した。広いといっても逃げるに十分ではない、おそらくは三階の病室を。

「もう、敵に支配される心配はないし、今は、私が抑えているから、突然暴走することはないわ。次に、私とあなた、二人の話をする」

紫乃は、佇まいを正した。

「あなたは、私の眷属 僕しもへとなった。未熟な私では、限度があるけれど……あなたの意識、行動を束縛し、支配することができると今もしている。それに、あなたの体調や感情も、なんとなくわかるの。究極的なところ、あなたのプライバシーも自由意志も、なくなつたといつていいわ」

そう、紫乃は一息に言いきつた。

示は、しばらく言葉を探して、ゆっくりと深呼吸してから、答えた。

「麻倉さん、言ったよね……奴隷になるな、って」

「……ええ」

示が暴走した日に話したことを、紫乃は思い返す。

「おれも、そう思う……。おれは、麻倉さんの、奴隷にはならない」

「それでいいわ」

紫乃は、儀式に臨む神官めいて、真摯に答えた。

「私は、あなたの望まない限り、あなたを束縛も支配もしないと、



誓う。そうでないか 青を裏切ることになるから」

示は、にへっ、といつもの気弱げな笑みを浮かべた。

「じゃあ、約束、だね……」

「ええ」

紫乃は、シートに手を差し入れ、ギプスで固められた示の手を引っ張り出し、両手で包むように握った。

「私たちの、新しい約束よ」

示は、その手を握り返すこともできなかつたけれど、  
少しだけ、心底嬉しそうに、笑った。

紫乃は、目を逸らす。

「紫乃でいいわ」

「……え？」

「『麻倉さん』じゃ他人行儀でしょ。紫乃って、呼んで」

「あ、え、うん……」

戸惑う示の手を、顔を背けて、紫乃は握ったまま。

「なにしてるの」

「あ、え？ え？」

「呼んで」

「あ……ああ！ うん、紫乃、さ……ししし、紫乃」

「……示」

「……え？」

「って、呼ぶから。私も」

「ああ……うん……」

ようやく、示の手を、紫乃はベッドに戻した。

そして、すつく、と立ち上がった。

「それはそれとして！」

びっ、と示を指さす。

「私が主<sup>あ</sup>だつてことには変わりないんだから、敬意を払いなさいよね！」

「……ええっ……？」

「口答えしない！」

「……はい……」

「よろしい！」

満足げに頷くと、紫乃はきびすを返した。

「ほかに、言うべきこと、聞くべきことはあるけれど、今日はやめにするわ。くれぐれも、安静にしていること」

「あ、うん」

「また明日、来る」

扉に手をかけ、紫乃は立ち止まる。

そのまま、押し黙った。

戸惑った示が、声をかける。

「あの……」

「ごめんなさい」

被せるように発せられた、小さくかすれた声は、それでも、示の耳に、ちゃんと届いた。

「あなたを信じてあげられなくて……ごめんなさい……」

そう、言い残して。

紫乃は、逃げるように病室を去っていった。

すぐにでも医者がやってくるかと思いきや、病室には誰も訪れなかった。

そうして、示には、物思いに沈む時間が与えられた。

思い返せば、この一週間あまりというもの。

青は、いつも突然、示の前に現れた。

彼女は、いつも唐突で。

示は、いつもドギマギして。

だから、示がすっかりと、できる限りの心の準備を整えて、青を迎えることができたのは、あの、告白のとき以来かもしれない。

「……こんにちは」

「……こんにちは」

現れた青に、示は初めて、自分から声をかけることができた。青は、ゆっくりと病室を進み、紫乃が腰掛けていた椅子に、そつと腰を下ろした。

その首筋には、痛々しげに、包帯が巻かれている。

「これは、チョーカーの代わり」

示の視線に、青はそう答えた。

「ケガは、ないよ」

「そう……」

それつきり、二人は押し黙った。

話すべきことは多かった。

重かった。

それでも、示は、ただ躊躇していたわけではなかった。

青が、自分と同じように、心を整えるのを待っていた。

そして、示が口を開こうとした、その瞬間だった。

「自分の意志じゃなかったとはいえ、ぼくを騙していたこと」

青は、氷めいた無表情のまま、遮るように、切り出した。

「ぼくを襲ったこと、勝手に死のうとしたこと」

そして、一息に続けた。

「許してあげる」

それは、呪いだった。

脱出不可能の、束縛の言葉だった。

示を、奴隷にする言葉だった。

卑怯だと知っただけでも。

無様だと悟っただけでも。

後悔が、胸を締め付けても。

語られた愛が幻でも、恋しているのが自分だけだったとしても。

荒れる気持ちは仮面に隠して。

離れたく、なかった。

牙を立てる以外に、術を持たなかった。

それがつまり、青の意志だった。  
それでも、なお。

「おれはね」

示は、無理矢理に体を起こす。

眠っていた痛覚が叩き起こされ、正直すぎる本音をぶちまける。

筋肉も骨も内臓もガタガタ、生きてるだけで儲けもの、これ以上戦うなんてもつてのほか。

示は傷ついていて、倒れて、休息を必要としていた。

たちまち顔を真っ青に染め、脂汗を浮かべ、カタカタ、力ない痙攣に震え、ただの呼吸で肺を痛めつけながら、それでも。

泣きそうな青の視線に射られて、それでも。

示は、起き上がる。

「あるとき、きみの徴しるしを見た瞬間、自分が狂ってたことに気が付いた」

青に、手を伸ばす。

「どうして、きみを見ると、ドキドキするのか、わかった」

青の、頬に触れる。

「おれは、きみの、血に惹かれてた。徴を探してた。おれは、きみを捕らえるために、放たれた猟犬だった」

真実を、突き付ける。

「おれは、きみのことを、好きなわけじゃ、なかった」

青は、その絶望すら、隠そうとする。

不可能だとしても。

それが、彼女の意地だから。

それでも。

「きみが、おれを憎んでくれることしか、願えなかった……」

そう、誰よりも。

紫乃よりも、青よりも。

愛することを奪われた、示の絶望こそ、深かった。

それでも。

「きみが、きみだけが、おれを、見つけてくれた……」  
逃げ出した示を。

化け物と成り果てた示を。

絶望を振り撒く存在と墮した示を。

その、本当の気持ち。

「……うれしかった……」

嘘の牢獄に捕らわれていた示の心。

青だけが、その檻を、喰い破りに来てくれた。

「おかげで、おれは、気付けたんだ」

にへっ、と。

痛みに耐えて、示は微笑む。

「おれは、きみを、護りたい。きみを、大切にしたい。きみを、幸せにしたい」

今は、青の涙だつて拭える。

「ズルくて、残酷で、傲慢で、優しくなくて、誰より綺麗なきみが、ほしいんだ」

だから、最初から決めていた。

間違つていないと、信じられた。

「今度は……嘘じゃない」

青はもう、こらえることなんてできなくて。

「おれの、恋人になつてください」

悲しくない涙を、示の手がびしょびしょになるほど、流したのだつた。

血反吐を吐きかけた示を、ベッドに寝かしてついで。

ギプスで固められた、腕だけ抱き締めたまま。

青は、延々と泣き続けた。

好きな女の子の涙に、示の精神が耐えきれなくなりかけて、陽が傾き始めたころに、ようやく、青は泣きやんだ。

くすん、くすん、とすすり上げ。

示の腕を抱き締めたまま、ちーん、と涙をかみ。どうか、話せる感じになった。

なんだか、微妙に目が据わっているが。とろん、とじていた。

示は、落ち着かない気分のみまだ。

「あの……えと、そうだ、さつき、あさく……紫乃、が来て  
「『紫乃』……？」

律儀に訂正する示に、青が敏感に反応した。

「え？ あ、それは、その」

「ぼくは……？」

じわり、と青の目に涙が盛り上がる。

「え、あ、あ、あ、いや、その」

「ぼく、一度も、名前で呼ばれたことないのに……」

「あ、青！」

じつとりした、恨めしげな視線で睨め付ける青に、示は慌てて答えた。

「……って、呼ぶよ、これからは……」

「……うん」

青は、目を閉じて、示の手のひらに頬ずりした。繰り返す。執拗に。

示の感情に、恐怖に似たものが混じっていたことは否定しかねる。身の危険を感じた。

「ねえ、示……」

「な、なに……あ、青」

紫乃のちよつとした調教の成果か、示はすっかり名前を呼んで、青を満足させた。

悲しみに似た表情のまま、青は濡れた流し目を恋人に送る。

「示……？」

「う、うん、青」

「縫い物、できる……？」

「そ、それなりには。あ、手、手が治ったらね」

その手の温かさを堪能しながら、青は続ける。

「今度、ね……。チョーカー、作って……」

「えっ!? あ、え……。おれが、作っていいの……?」

操られた結果とはいえ、彼女のチョーカーを破ったのは示だ。その責任、果たせるものなら果たしたい。

しかし、青の首筋の徴は、彼女にとっては恐らく、一番他人に見られたくない 恥ずかしい部分であるわけで、つまりその 所謂いうところを隠すものが、示の手作りというのは、如何なものか  
「前付けてたチョーカー、ね……。ほんとうのママの、形見だったの……」

「うぐっ……」

重すぎだった。

「だから、示のがいいの……。ね? そうじゃなきゃ、やだ……」

「う、わ、わかったよ……」

そこだけ取り出せば、なんともいじらしい台詞だったが、ズシリとのしかかる責任感に、示はそれを楽しむ余裕もない。

「あとね……。縫い取りステッチ、付けて……?」

「う、うん。どんなのがいい?」

「あのね、あのね……。狼と、蝙蝠がいい……」

「……うっ……」

かと思えば、不覚にも涙腺の緩む示だった。

実のところ、示は、青と紫乃の関係についても、けっこう心配していたのだが、余計なお世話というものだった。変わらない二人の絆が嬉しかった。

「ね……。? いいでしょ……?」

「も、もちろんだよ! 待っててね、可愛いのは、作るから」

「……うん」

今更、気にすることでもないのだろうが、明らかに男女の役割が逆だった。

「それから……。天の川も、見に行くんだよ……？」

「や、約束、したもんね。絶対に行こうね」

改めて。かつて結んだ約束が、未だ生きていることに、示は救われる気持ちになる。

「それから、示の家にも、連れてって、ね……？」

「ひい……？ う、うん……わかったよ……」

精神支配が解けた、本来の示は、かなり純朴ではあるけれども、異性に対して興味も関心もある、ふつうの少年だ。従って、恋人の家に行く、という行為の意味合いも、それなりには理解しているのだ。

まあ、それなりに。なんとなく、頬を赤らめる示である。

「麻倉の……紫乃の家にも、一緒に行こうね……？」

「お、おおお、お母さんの、ところに？」

「うん……」

「そ、それは……わ、わかり、ました……」

いちおう、エリザは、青の母である前に、紫乃の母なのだけども。

重大イベントが次々に決定されていくことに、示は戦慄を禁じ得ない。

「それからね……」

熱に浮かされたように願望を並べ立てていた青の目に、またしても唐突に、じわつと涙が浮かび上がった。示の心臓と胃が爆発しかける。

「どっ、どっ、どうしたのっ」

「示は……？ ぼくに、“お願い”、ないの……？」

「……えええっ……」

その発想はなかった。

「ぼくのことなんか、どうでも……いいんだ……」

「そっそんなっ、そんなばかな！」

「じゃあ、“お願い”して……？ お願いだからあ……」



示はもう、どうしていいのかわからない。

いや、彼とて、健全な男子だからして、彼女に“お願い”したいことの一つくらい、ある。あるのだが、自分から言い出すのも恥ずかしいし、なにより、青が却って泣いてしまいそうなので、黙っていたのだ。

しかし、“お願い”されては弱かった。やむを得ず、示はその“お願い”を口にした。

「じゃ、じゃあ、一つ……」

「なに……?」

「笑って……くれないかな……?」

かちーん、と青は硬直した。

「えと、その……“お願い”！ 笑顔、見せてください!」

「チェンジ」

青は、冷淡に言い放った。

「えええっ……」

「無理」

「そ、そんなあ……!」

いったん口に出してしまった以上、さすがの示も、易々とは引けない。

「そ、そこを、なんとか……!」

「……だって……」

青は、顔を俯けた。

「恥ずかしいもん……」

そう言っつて、涙を浮かべられては、示としては為す術がない。しかしだ。

「だ、だけど……一度、くらい……」

こつ言われると、いかに青でも、反省するところがないではなかった。

「ん、ん……」

自らの、羞恥心と天邪鬼と強情に、青は向き合ってみる。

そして、一つの解答を導き出した。

「じゃあ……」

「……な、なに……?」

「キス……して……」

「……えっ? えっ?」

「……キス……」

「……ええー……!」

見上げんばかりに高いハードルだった。

「そしたら……がんばる……」

キスよりも、笑顔を見せるほうが恥ずかしいというのはどうなのか。というか、そんな理由でキスしてしまっただけのものなのか。

「そ、それは、その」

青の涙が、表面張力ギリギリまで膨れ上がった。

「いや……?」

「ば、ばかな!」

「じゃあ……いいでしょ……?」

「……ひええ……」

もはや、チキンレースの様相を呈している。

さつきまで号泣していて、変なスイッチが入っている、半泣きの彼女にキス。

難度を上げる要素しかなかった。

「チエ、チエンジは……」

「ありえない」

「う、うううう……」

そして、示は、ふと、まことに実際的な問題に気づいた。

「と、いうか……おれ、起きられない……んですが……」

「あっ」

二人とも、完全に忘れ去っていた。

いくらなんでも、キスのために無理をして、入院を延ばすのは馬鹿すぎる。

とはいえ、ここで中断したら、互いに恥ずかしい要求をした甲斐がない。それはそれで、あまりにも馬鹿馬鹿しすぎた。

青は、頭を抱える。

「ご、ごめんね、無理言つて……。この件は、またの機会に……」  
都合よく難題を先延ばしにするようで、罪悪感を覚えつつ、示が言い出した矢先だった。

青が、示の腕を放つて、すっく、と立ち上がった。

「あ痛<sup>いだ</sup>っ」

「わかった」

「は、はい……？」

「こうすればいい」

青は、示にかけられたシーツを勢いよくめくりあげ、その重さに苦勞しながら、示の右腕をL字型すると、ベッドに残された狭いスペースに滑り込み、もろともにシーツを被った。

いわゆる、腕枕状態。

補足するなら、添い寝だった。

「な、ん」

咄嗟に逃げようとする示の顔を、青の細腕が捕獲した。

「これなら……キス、できるよね……」

「あ、わ、わ」

全身に残る疼痛の中に、確かに、青の体温と柔らかさが混じっている。

患者服を掴む青の手が、脇の下あたりをくすぐる。

頬を、すべすべした青の手のひらが押さえ込んでいる。

二の腕に、細すぎる青の首筋が乗っている。

青の、熱く潤んだ瞳と　うすく開いた唇が、目の前にある。

かつて植え付けられた胸の高鳴りよりも、ひどく傷付けられた体よりも、いま衝き上げる鼓動が、ずっとずっと痛かった。

「示……」

とっくに近すぎている距離を、青がさらに削っていく。

蟻も通れないような隙間を残して、ようやく止まった。

目に映るのは、互いの瞳だけ。

肌に触れるのは、互いの体だけ。

鼻に届くのは、互いの匂いだけ。

耳に聞こえるのは、自分の心臓の音だけ。

口に感じるのは　。

「はじめてのキス……あげる」

そうして、青は目をつぶる。

それから、二人が交わした行為と。

二人が交わした、表情は。

シーツの陰に隠されて、誰一人として、見た者はない。

まだまだ問題山積なれど、これにて本件、ひとまずの、落着とす  
る。

r " " S  
t M y h e  
. l o v e r a  
h a s a f a n g  
a "g" g  
f a n s i  
"g" e n d  
w i l l .  
s t a  
a

## あれがデネブ・アルタイル・ベガ（後書き）

つまらぬ手妻でございましたが、ご笑覧いただけましたでしょうか。  
『彼女には牙がある。』これにて はじまりはじまり、でございます。

示くんというのは、まあしょっちゅう告白する主人公でした。  
そんな、いきなり正しい告白ができるわけないじゃないですか、ねえ？

作中の時期は六月ですので、夏の大三角の観望には少々早いです。

「夏の間はよく見えるが、日本では七夕の時期の一更（午後8 - 10時頃）は、まだ夏の大三角は昇ったばかりであり、また日本は温暖湿潤気候に当たり梅雨があるため曇また雨の日が多く、よく見えない。旧七夕や月遅れの七夕に当たる8月上旬の方がよく見える。9月になると、一更の頃は天頂近くに、街灯りが少なく条件が良ければ空を縦断する天の川も見ることができる。」

（夏の大三角 - Wikipedia）

織姫はこと座のベガ、彦星はわし座のアルタイル、最後の一角がはくちょう座のデネブにあたります。「みにくいアヒルの子」が美しい白鳥に成長するには、まだもう少し、というところです。

さて、ドヤ顔はこのくらいにして。ご意見ご感想、マゾヒスティックにお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9142t/>

---

彼女には牙がある。～汝は人狼なりや？～

2011年6月11日03時40分発行